埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第407集

八　潮　市

八 條 遺 跡

中川右岸改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

２０１３

国土交通省　関東地方整備局
公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1　八條遺跡第４号住居跡出土遺物

2　八條遺跡出土青磁

序

埼玉県東部は関東平野の中心的な位置を占め、数多くの河川が集中する全国有数の地域として知られています。古利根川や元荒川をはじめとする中川水系の諸河川に囲まれた八潮市は、高次の都市機能と交通利便性を備えつつも、これらの川が育んだ豊かな自然に恵まれています。

一方、こうした地勢下においては、洪水への固い備えも求められます。国土交通省では、これまで江戸川、中川、綾瀬川の水辺環境と調和した治水対策を進めてまいりました。このうち、中川では堤防強化を主体とする整備事業を行っています。

八潮市には周知の埋蔵文化財包蔵地が８箇所存在します。今回発掘調査を実施した八條遺跡もその一つです。発掘調査は中川右岸改修事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

調査の結果、八潮市では初めてとなる平安時代の竪穴住居跡、鎌倉時代の墓を含む多数の土壙、井戸跡、溝跡の発見など、貴重な成果をあげることができました。とりわけ、平安時代の住居跡から官人の帯を飾った石製品や、武蔵、下総、常陸で生産された土師器や須恵器が出土したことから、当時の物流に深く関与した中心的な遺跡であることが分かりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所、八潮市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成２５年１１月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　中　村　英　樹

例　言

１．本書は八潮市に所在する八條遺跡第１・２次調査の発掘調査報告書である。

２．遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

八條遺跡第１次（ＨＴＪＯ１次）

八潮市八條 4065 番地７他

平成 24 年２月２日付け教生文第２－ 79 号

八條遺跡第２次（ＨＴＪＯ２次）

八潮市八條 4067 番地７他

平成 24 年５月 24 日付け教生文第２－ 19 号

３．発掘調査は、中川右岸改修事業に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

４．各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成 23 ～ 24 年度）

「中川右岸改修事業に伴う埋蔵文化財調査（その１）業務委託」（第１次）

「中川右岸改修事業に伴う埋蔵文化財調査（その２）業務委託」（第２次）

整理報告書作成事業（平成 25 年度）

「中川右岸改修事業に伴う埋蔵文化財調査業務委託（整理）」

５．発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ－３に示した組織により実施した。

八條遺跡第１次を平成 24 年２月１日から平成 24 年３月 31 日まで西井幸雄、吉田幸一が、同第２次を平成 24 年４月６日から平成 24 年６月 30 日まで西井、古谷渉が担当した。

整理報告書作成事業は、平成 25 年７月１日から平成 25 年９月 30 日まで実施し、福田聖が担当した。報告書は、平成 25 年 11 月 25 日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 407 集として印刷・発行した。

６．発掘調査における基準点測量は (株) 中野技術に委託した。

７．発掘調査における空中写真は (株) シン技術コンサルに委託した。

８．発掘調査における写真撮影は西井、古谷、吉田が行い、出土遺物の写真撮影は福田が行った。巻頭図版用の遺物写真撮影は、合資会社池澤に委託した。

９．出土品の整理・図版作成は福田が行った。

10．本書の執筆はⅠ－１を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、その他を福田が行った。

11．本書の編集は福田が行った。

12．本書にかかる諸資料は平成 25 年 12 月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

13．発掘調査や本書の作成にあたり、下記の方々、八潮市教育員会、関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。

鬼塚知典　北沢　滋　岸本光子　黒濟和彦
黒濟玉恵　越川欣和　関　絵美　中野達也

凡　例

1．遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系、国家標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を指す。

　Ｇ－４グリッド北西杭の座標は、Ｘ＝-16010.000 m、Ｙ＝530.000 m、北緯35° 51′ 20″、東経139° 50′ 21″である。

2．調査に際して使用したグリッドは、国家標準平面直角座標に基づく10×10 mの範囲を基本（１グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を設定した。

3．グリッドの名称は、北西隅を基点に、北から南にA～N、西から東に１～10とし、表記は両者を組み合わせて、Ｂ－５グリッド等とした。

4．本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

　ＳＪ…竪穴住居跡　ＳＫ…土壙　ＳＥ…井戸跡　ＳＤ…溝跡　Ｐ…ピット・柱穴

5．本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。

　全測図　1：500
　遺構図　1：60・1：30
　遺物実測図・拓影図　1：4・1：3・1：2

6．遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。断面黒塗りしたものは須恵器。また、赤彩された土器は、その範囲に網10％をかけて示し、施釉陶器には釉の範囲を網（灰釉30％、緑釉50％）で示した。

7．遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海抜標高（単位 m）を表す。

8．遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・器種は土師器、須恵器、ロクロ土師器→ロクロ土師、陶器、磁器、中世土器、かわらけと表記した。
・遺物計測値は土器を㎝、石製品を mm、重さをｇ単位とした。
・土器計測値の（　）は復元推定値、[　]は残存値を示す。
・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。
　Ａ：雲母　Ｂ：片岩　Ｃ：角閃石　Ｄ：長石　Ｅ：石英　Ｆ：軽石　Ｇ：砂粒子　Ｈ：赤色粒子　Ｉ：白色粒子　Ｊ：白色針状物質　Ｋ：黒色粒子　Ｌ：その他　Ｍ：チャート
・焼成は良好・普通・不良の３段階に分けて示した。
・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を％で示した。
・備考には出土位置、注記No.、煤の付着、生産窯、年代等を記した。

9．ロクロ土師器の生産地比定については、八木崎遺跡の報告書に従った。砂質で雲母・針状物質を含む厚手のものを在所産として下総産、角閃石・石英を含み、薄手で褐色のものを利根川流域の北関東で生産されたものとして利根川流域産と標記した。

10．本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の１/50000地形図、八潮市発行の１/2500都市計画図を編集のうえ、使用した。

11．文中の引用文献等は、（著者 発行年）の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1．発掘調査に至る経過 ……1
　2．発掘調査・報告書作成の経過……2
　3．発掘調査・報告書作成の組織……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境……4
　1．地理的環境 ……4
　2．歴史的環境 ……6
Ⅲ　遺跡の概要……10
Ⅳ　遺構と遺物 ……15
　1．住居跡 ……15
　2．土壙 ……33
　3．井戸跡 ……53
　4．溝跡 ……58
　5．畠跡 ……68
　6．ピット ……69
　7．グリッド出土遺物 ……72
Ⅴ　調査のまとめ ……76
　1．調査の成果 ……76

写真図版

挿図目次

第１図　埼玉県の地形……4
第２図　周辺の地形……5
第３図　周辺の遺跡……8
第４図　調査地点位置図……11
第５図　基本土層……12
第６図　全体図……12
第７図　調査区北半部……13
第８図　調査区南半部……14
第９図　第１号住居跡……15
第10図　第１号住居跡出土遺物……16
第11図　第２号住居跡……17
第12図　第２号住居跡出土遺物……18
第13図　第３号住居跡……20
第14図　第３号住居跡出土遺物（１）……21
第15図　第３号住居跡出土遺物（２）……22
第16図　第４号住居跡……25
第17図　第４号住居跡出土遺物（１）……26
第18図　第４号住居跡出土遺物（２）……27
第19図　第５号住居跡……29
第20図　第５号住居跡出土遺物……30
第21図　住居跡出土石製品……31
第22図　住居跡出土鉄製品……32
第23図　土壙（１）……39
第24図　土壙（２）……40
第25図　土壙（３）……41
第26図　土壙（４）……42
第27図　土壙出土遺物（１）……44
第28図　土壙出土遺物（２）……45
第29図　土壙出土遺物（３）……46
第30図　土壙出土遺物（４）……47
第31図　土壙出土石製品……50
第32図　土壙出土鉄製品……51
第33図　土壙出土銭……52
第34図　井戸跡（１）……54
第35図　井戸跡（２）……55
第36図　井戸跡出土遺物……56
第37図　第１・２号溝跡……60
第38図　第３・４号溝跡（１）……61
第39図　第３・４号溝跡（２）……61
第40図　調査区北部溝跡分布図……62
第41図　調査区南部溝跡分布図……63
第42図　溝跡出土遺物……65
第43図　溝跡出土石製品……67
第44図　溝跡出土銭……67
第45図　溝跡出土鉄製品……67
第46図　第１号畠跡……68
第47図　グリッドピット（１）……70
第48図　グリッドピット（２）……71
第49図　グリッド出土遺物（１）……74
第50図　グリッド出土遺物（２）……75

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧……9
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表 …… 16
第３表　第２号住居跡出土遺物観察表 …… 19
第４表　第３号住居跡出土遺物観察表 …… 23
第５表　第４号住居跡出土遺物観察表 …… 28
第６表　第５号住居跡出土遺物観察表 …… 30
第７表　住居跡出土石製品観察表 …… 31
第８表　住居跡出土鉄製品観察表 …… 32
第９表　土壙一覧表…… 35
第10表　土壙出土遺物観察表…… 48
第11表　土壙出土石製品観察表 …… 50
第12表　土壙出土鉄製品観察表 …… 51
第13表　井戸跡出土遺物観察表 …… 57
第14表　溝跡一覧表…… 58
第15表　溝跡出土遺物観察表 …… 66
第16表　溝跡出土石製品観察表 …… 67
第17表　溝跡出土鉄製品観察表 …… 67
第18表　ピット一覧表…… 69
第19表　グリッド出土遺物観察表 …… 72

写真図版目次

巻頭図版　１　八條遺跡第４号住居跡出土遺物
　　２　八條遺跡出土青磁

図版１　１　八條遺跡遠景（北から）
　　２　八條遺跡空中写真（垂直）
図版２　１　第１号住居跡（南から）
　　２　第１号住居跡カマド遺物出土状況（南から）
　　３　第２号住居跡（南から）
　　４　第２号住居跡カマド（北東から）
　　５　第２号住居跡遺物出土状況（１）（南から）
　　６　第２号住居跡遺物出土状況（２）（南から）
　　７　第２号住居跡遺物出土状況（３）（丸鞆）（南から）
　　８　第３号住居跡（南から）
図版３　１　第３号住居跡遺物出土状況（１）（南から）
　　２　第３号住居跡遺物出土状況（２）（鉈尾）（東から）
　　３　第４号住居跡（南から）
　　４　第４号住居跡遺物出土状況（１）（南から）
　　５　第４号住居跡遺物出土状況（２）（カマド）（南から）
　　６　第５号住居跡（南から）
　　７　第４号土壙（南から）
　　８　第５号土壙（東から）
図版４　１　第５号土壙遺物出土状況（１）（北東から）
　　２　第５号土壙遺物出土状況（２）（北東から）
　　３　第５号土壙遺物出土状況（３）（北東から）
　　４　第２・６～８号土壙（南西から）
　　５　第２・８号土壙（南から）
　　６　第９号土壙（東から）
　　７　第 11 号土壙（東から）
　　８　第 12 号土壙（北から）
図版５　１　第 16・18 号土壙（南から）
　　２　第 18 号土壙（西から）
　　３　第 18 号土壙（粘土貼付）（北東から）

4　第 18 号土壙完掘（西から）
5　第 18 号土壙遺物出土状況（刀）（西から）
6　第 19 号土壙（南から）
7　第 26 号土壙（東から）
8　第 37 号土壙（東から）

図版６
1　第 40 号土壙（西から）
2　第 42 号土壙（東から）
3　第 87・88 号土壙（北から）
4　第 96 号土壙（南東から）
5　第 97 号土壙人骨出土状況（南から）
6　第２号井戸跡（西から）
7　第１・２号溝跡（東から）
8　基本土層（Ｋ－３グリッド）

図版７
1　第１号住居跡（第 10 図１）
2　第１号住居跡（第 10 図２）
3　第２号住居跡（第 12 図１）
4　第２号住居跡（第 12 図５）
5　第２号住居跡（第 12 図６）
6　第２号住居跡（第 12 図７）
7　第２号住居跡（第 12 図９）
8　第２号住居跡（第 12 図 10）
9　第２号住居跡（第 12 図 13）

図版８
1　第３号住居跡（第 14 図２）
2　第３号住居跡（第 14 図４）
3　第３号住居跡（第 14 図５）
4　第３号住居跡（第 14 図６）
5　第３号住居跡（第 14 図 12）
6　第３号住居跡（第 14 図 13）
7　第３号住居跡（第 14 図 20）
8　第３号住居跡（第 14 図 27）
9　第３号住居跡（第 15 図 29）

図版９
1　第３号住居跡（第 15 図 31）
2　第３号住居跡（第 15 図 32）
3　第３号住居跡（第 15 図 43）
4　第３号住居跡（第 15 図 45）
5　第３号住居跡（第 15 図 46）
6　第３号住居跡（第 15 図 47）
7　第４号住居跡（第 17 図１）
8　第４号住居跡（第 17 図２）
9　第４号住居跡（第 17 図６）
10　第４号住居跡（第 17 図７）

図版 10
1　第４号住居跡（第 17 図 11）
2　第４号住居跡（第 17 図 12）
3　第４号住居跡（第 17 図 13）
4　第４号住居跡（第 17 図 17）
5　第４号住居跡（第 17 図 22）
6　第４号住居跡（第 17 図 21）
7　第４号住居跡（第 17 図 26）
8　第４号住居跡（第 17 図 24）

図版 11
1　第４号住居跡（第 17 図 28）
2　第４号住居跡（第 17 図 29）
3　第４号住居跡（第 17 図 31）
4　第５号住居跡（第 20 図 15）
5　第５号土壙（第 27 図７）
6　第 17 号土壙（第 27 図 13）
7　第 17 号土壙（第 27 図 15）
8　第 37 号土壙（第 28 図 33）
9　第 42 号土壙（第 28 図 40）
10　第 50 号土壙（第 28 図 45）

図版 12
1　第 54 号土壙（第 28 図 47）
2　第 54 号土壙（第 28 図 48）
3　第 57 号土壙（第 29 図 49）
4　第 57 号土壙（第 29 図 50）
5　第 57 号土壙（第 29 図 51）
6　第 57 号土壙（第 29 図 53）
7　第 57 号土壙（第 29 図 56）
8　第 57 号土壙（第 29 図 61）

図版 13
1　第 69 号土壙（第 29 図 68）
2　第 69 号土壙（第 29 図 69）
3　第 69 号土壙（第 29 図 70）
4　第 69 号土壙（第 29 図 71）
5　第 92 号土壙（第 30 図 79）
6　第 92 号土壙（第 30 図 84）

7　第96号土壙（第30図85）
8　第97号土壙（第30図86）
9　第2号井戸跡（第36図5）
10　第3号井戸跡（第36図9）
図版14　1　第3号井戸跡（第36図10）
2　第4号井戸跡（第36図15）
3　第1号溝跡（第42図5）
4　第1号溝跡（第42図7）
5　第3号溝跡（第42図12）
6　第5号溝跡（第42図16）
7　第5号溝跡（第42図17）
8　第5号溝跡（第42図18）
9　第5号溝跡（第42図19）
10　グリッド（第49図1）
図版15　1　グリッド（第49図3）
2　グリッド（第49図16）
3　グリッド（第49図15）
4　グリッド（第49図25）
5　グリッド（第50図26）
6　グリッド（第50図27）
7　グリッド（第50図31）
8　表採（第50図34）
図版16　1　第3号住居跡鉈尾（第21図2）
2　第4号住居跡（第18図30）
3　第2号住居跡丸鞆（第21図1）
4　第18号土壙（第27図16）
5　第18号土壙（第27図17）
6　第23号土壙（第28図28）
7　第27号土壙（第28図31）
8　第53号土壙（第28図46）
9　第19号土壙（第31図88）
10　第37号土壙（第31図89）
11　第53号土壙（第32図98）
12　第18号土壙（第32図99）
13　第92号土壙（第32図100）
14　第1号井戸跡（第36図1）
15　第2号井戸跡（第36図3）
図版17　1　第4号井戸跡（第36図14）
2　第1号溝跡（第42図1）
3　第5号溝跡（第42図20）
4　第5号溝跡（第43図36）
5　第7号溝跡（第45図42）
6　グリッド（第49図5）
7　グリッド（第49図4）
8　グリッド（第49図7）
9　グリッド（第49図8）
10　グリッド（第49図9）
11　グリッド（第49図10）
12　グリッド（第49図11）
13　グリッド（第49図18）
14　グリッド（第49図19）
15　グリッド（第49図20）
16　グリッド（第49図21）
17　グリッド（第49図22）
18　グリッド（第50図28）
図版18　1　グリッド（第50図56）
2　グリッド（第50図57）
3　グリッド（第50図58）
4　第1・2号住居跡（第10・12図）
5　第3号住居跡（1）（第14・15図）
図版19　1　第3号住居跡（2）（第14・15図）
2　第4号住居跡（第17図）
3　第5号住居跡（第20図）
図版20　1　土壙（1）（第27・28図）
2　土壙（2）（第27・28図）
3　土壙（3）（第29・30図）
図版21　1　井戸跡（第36図）
2　溝跡（1）（第42図）
3　溝跡（2）（第42図）
図版22　1　グリッド（第49・50図）
2　置きカマド（第18・42・49図）
3　第92号土壙（第30図）
図版23　1　灰釉陶器（第20･27･36･49･50図）
2　第18号土壙（第33図101）

3　第 18 号土壙（第 33 図 102）
4　第 18 号土壙（第 33 図 103）
5　第 19 号土壙（第 33 図 104）
6　第 97 号土壙（第 33 図 106）
7　第 97 号土壙（第 33 図 107）
8　第 97 号土壙（第 33 図 108）
9　第 97 号土壙（第 33 図 109）
10　第 97 号土壙（第 33 図 110）
11　第 97 号土壙（第 33 図 111）
12　第 1 号溝跡（第 44 図 44）
13　第 2 号溝跡（第 44 図 45）
14　土錘（1）（第 50 図）
15　土錘（2）（第 50 図）

図版 24　1　第 1 ・ 2 号住居跡（第 22 図）
2　第 3 ～ 5 号住居跡（第 22 図）
3　土壙（第 32 図）
4　第 1 ・ 5 ・ 9 号溝跡（第 45 図）
5　第 2 ・ 5 号井戸跡（第 36 図）、グリッド（第 50 図）

Ⅰ　発掘調査の概要

１．発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所では、中川・綾瀬川流域の浸水被害を防ぐための河川施設の整備や流域自治体との連携を目指す総合治水対策の一環として、一級河川中川直轄管理区間改修事業を実施している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課ではこのような事業の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

事業地内について、平成 20 年 11 月 6 日付け江計第 21 号で国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所長より埼玉県教育委員会教育長あて埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて照会があった。

生涯学習文化財課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成 23 年 6 月 15 日付け教生文第 443 － 1 号で、八條遺跡の取扱いについて次のように回答した。

１　埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
八條遺跡（県遺跡番号 No.80-001）	集落跡・古墳・経塚	平安・南北朝・室町・戦国・江戸	八潮市八條地内

２　法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事着工に先立ち、文化財保護法第 94 条の規定による発掘通知を提出して下さい。

３　取扱いについて

「発掘調査が必要な範囲」については、計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施して下さい。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時　現在は公益財団法人）と国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所、生涯学習文化財課の三者により調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、平成 24 年 2 月 1 日から 3 月 31 日（第 1 次調査）、および 4 月 9 日から 6 月 30 日（第 2 次調査）までの期間で発掘調査を実施することになった。

文化財保護法第 94 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘通知が国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所長から提出され、第 92 条の規定による発掘調査通知が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され発掘調査が実施された。

発掘調査に係る通知は以下の通りである。

第 1 次調査…平成 24 年 2 月 2 日付け
教生文第 2-79 号
第 2 次調査…平成 24 年 5 月 24 日付け
教生文第 2-19 号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

２．発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

八條遺跡の調査は中川右岸改修工事に先立ち、平成 23 年度から平成 24 年度にわたって実施した。調査面積は 4,800 ㎡（第１次調査 1,920 ㎡、第２次調査 2,880 ㎡）である。

平成 23 年度は平成 24 年２月１日から平成 24 年３月 31 日まで、第１次調査を実施した。

平成 24 年２月３日に発掘事務所の設置を行い、６日に重機による表土除去作業を開始した。８日から補助員による遺構確認作業を行い、並行して遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業を実施した。

確認作業の結果、平安時代から近世に至る竪穴住居跡、溝跡、土壙など多数の遺構が検出された。調査区の南側から直ちに精査を開始し、順次土層断面図、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

平成 24 年度は平成 24 年４月６日から６月 30 日まで、第２次調査を実施した。第１次調査区の北側の精査を継続し、順次土層断面図、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。６月８日には航空機による空中写真の撮影を実施した。

その後重機により調査区を埋戻し、６月末に遺物、器材を撤収して現地調査を終了した。

（2）整理報告書作成

整理報告書の作成作業は平成 25 年７月１日から平成 25 年９月 30 日まで実施した。

作業は出土遺物の水洗・注記から開始し、直ちに接合復元に着手した。復元を終えた遺物は順次実測、トレース、採拓を経て遺構ごとに印刷用の挿図を作成した。８月下旬には図版用の遺物写真を撮影した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等は照合し、修正を加えてスキャナーでコンピューターに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

９月下旬までに原稿執筆を終え、報告書の編集を行った。入稿後、３回の校正を経て、平成 25 年 11 月 25 日に報告書（本書）を発行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、９月末に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

３．発掘調査・報告書作成の組織

平成 23 年度（発掘調査）

理事長	藤野龍宏	**調査部**	
常務理事兼総務部長	根本勝	調査部長	小野美代子
総務部		調査部副部長	劔持和夫
総務部副部長	金子直行	主幹兼調査第二課長	瀧瀬芳之
総務課長	矢島将和	主査	西井幸雄
		主事	吉田幸一

平成 24 年度（発掘調査）

理事長	中村英樹	**調査部**	
常務理事兼総務部長	根本勝	調査部長	昼間孝志
総務部		調査部副部長	劔持和夫
総務部副部長	富田和夫	調査監兼調査第一課長	瀧瀬芳之
総務課長	矢島将和	主査	西井幸雄
		主任	古谷渉

平成 25 年度（報告書作成）

理事長	中村英樹	**調査部**	
常務理事兼総務部長	大嶋紳一郎	調査部長	昼間孝志
総務部		調査部副部長	劔持和夫
総務部副部長	富田和夫	主幹兼整理第一課長	黒坂禎二
総務課長	藤倉英明	主査	福田聖

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

八條遺跡は八潮市大字八條に所在する。ＪＲ武蔵野線越谷レイクタウン駅の南東約 2.8km にあたる。埼玉県の東南端に位置する八潮市は、つくばエクスプレス、東京外かく環状自動車道路が市内を縦横に貫き、急速に市街化が進んでいる。市の全域が中川低地に含まれ、遺跡周囲の中川沿岸には屋敷林と水田が混在する景観が広がっている。

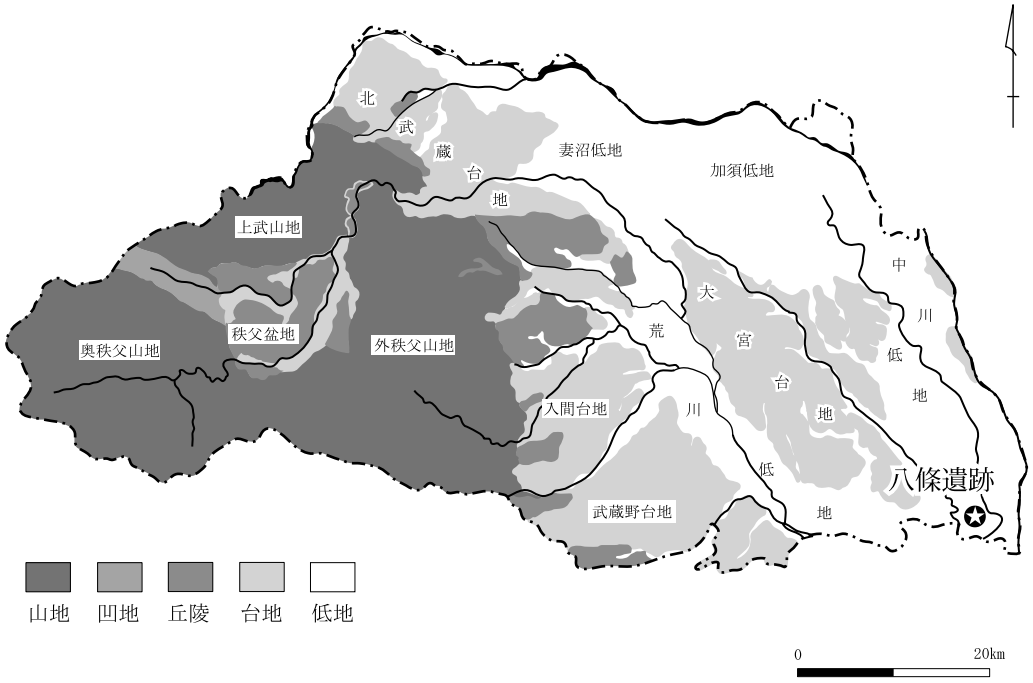
埼玉県は、起伏の有無で大きく三つの地形環境に分けられる。すなわち、盆地と周辺の山地からなる秩父地域、それに連なる丘陵と武蔵野面に相当する台地からなる中部地域、荒川・中川両低地帯と立川面の大宮台地などの低台地が展開する東部地域（いわゆる埼玉平野）である。

中川低地は、埼玉平野東部の久喜市（旧栗橋町）から八潮市にかけての古利根川や中川に沿う低地帯である。西の大宮台地、東の下総台地に挟まれた南北に細長い低地で、北は利根川中流低地の加須低地に連続している。全国でも屈指の河川集中低地であり、元荒川、古利根川、中川、毛長川といった県内の主要河川が南流している。遺跡周辺の標高は３ｍ前後と、県内で最も低い地域である。

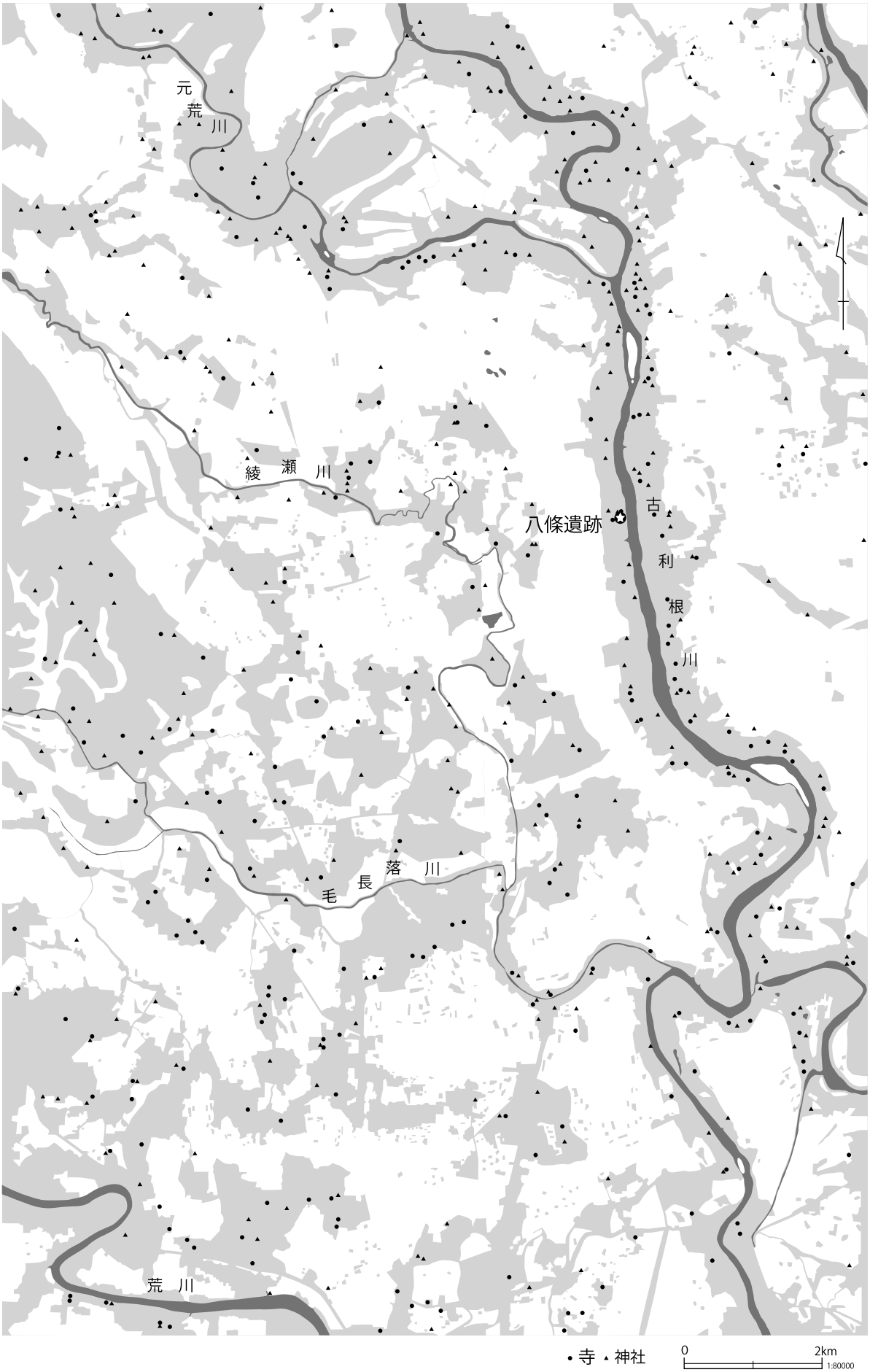
中川は羽生市付近から複雑な流を経て、遺跡の北側３km の越谷市中島で元々の本流であった古利根川、元荒川を、八潮市と足立区境で垳川をそれぞれ合せて江戸川に至る。遺跡の西側２km には古綾瀬川が、中川を挟んで４km 東側には大場川が流れている。

市域は縄文時代前期には奥東京湾となっており、縄文時代後期の小海進が及んだことも知られている。

この流域では河川によって砂が多く供給され、大小の自然堤防や後背湿地が発達している。現在の流路以外にも、乱流の跡を示すと考えられる自然堤防がいたるところに認められる。合流点付近



第１図　埼玉県の地形



第２図　周辺の地形

で蛇行が著しい古利根川、元荒川流域には大河の証である河畔砂丘が形成されている。

八條遺跡は中川右岸に形成された南北約 450 m、東西約 200 mの自然堤防上に立地し、東側は現在の流路に接している。西側の後背湿地に営まれる水田との比高差は約１ｍである。遺構の覆土や地山はシルト質で、砂質が強い。

２．歴史的環境

八條遺跡の所在する中川流域は河川の乱流が繰り返され、砂が多く供給された地域である。厚く堆積する砂層に覆われ、遺跡の分布は未だ不明な部分が多い。第１表に掲出した遺跡に単なる包蔵地が多いのはそのためである。

縄文時代の遺跡は現状では知られておらず、地山や他の時期の遺構から土器片が出土するのみである。中川低地に安定した沖積地が形成されるのは、縄文時代後期の小海進以降とされており、定住できるような住環境が整わなかったと考えられる。

弥生時代には陸化が進み、上流の春日部市須釜遺跡では、弥生時代中期中葉の再葬墓 11 基が検出されている。

中川低地で本格的に人々の足跡が印されるようになるのは、弥生時代終末から古墳時代前期である。掲出した 101 遺跡の内 56 遺跡で古墳時代の遺構、遺物が検出されている。分布の中心は、現在の川口市東部の旧鳩ヶ谷市域分、草加市域、足立区域の毛長川流域の自然堤防上である。川口市では三ツ和遺跡 (36)、草加市では東地総田遺跡 (75)（瀧瀬 2005)、西地総田遺跡 (74)（高橋 1984)、蜻蛉遺跡 (73)（鈴木 1985)、足立区では舎人遺跡 (55)（佐々木 1996 ほか)、伊興遺跡 (81)(実川 1992 ほか) などの集落遺跡が知られている。これらの集落跡には付随する方形周溝墓群が確認されている。川口市高稲荷古墳（48）は全長 75 mの前方後円墳で、前期から中期にかけて築造されている。

八潮市域では本遺跡と八條輪中遺跡（３）から古墳時代前期の遺物が出土している。

古墳時代中期には祭祀遺跡として著名な伊興遺跡がある（大場 1975)。玉類や石製模造品、土製模造品、古式須恵器、朝鮮半島系土器、木製品などの大量出土で知られている。丸木舟が井戸枠として利用されていたことなどは、具体的な河川交通を物語る資料と言えよう。河川が集中する荒川低地への入り口として、重要な場所であったと考えられる。舎人遺跡でも引き続き集落が営まれている。

古墳時代後期の集落については、越谷市見田方遺跡（35）で住居跡２軒と調査区全体から遺物集中箇所が検出されている（和島ほか 1971)。調査区が限定的なため詳細は不明だが、舎人遺跡では、終末期を中心とした 20 軒以上の住居跡が調査さている。伊興遺跡でもやはり終末期の住居跡が調査されている。

八條遺跡の南西約 800 mには、新編武蔵風土記稿にも記載された八條殿社古墳（２）がある。詳細は不明だが現在でも盛土が残り、かつては石槨が露出していたと伝えられている。

６～７世紀の群集墳は、低地南半の各所に分布している。川口市域の新郷古墳群 (43・45)、蜻蛉遺跡の円墳、伊興古墳群 (66・67・71)、白旗塚古墳群 (78・79・86) などが知られるほか、足立区花畑地区には一本松古墳 (92) と白山塚古墳 (95)、さらに南の葛飾区では大谷田古墳 (21) の存在が認められる。いずれも 20 ～ 30 m級の円墳を中心とするようだが、調査例はない。古墳時代後期の集落跡の様相は現状では不明瞭だが、後期後半の群集墳が分布することから、それぞれを形成した規模の大きな集落が存在したことを推定でき

る。

奈良・平安時代の集落は越谷市大道遺跡（26）で９世紀後半～ 10 世紀の住居跡６軒、土器焼成土壙２基が調査されている。八條遺跡同様に下総地域の器肉の厚いロクロ土師器が主体的に出土している (橋本 2002)。

大落古利根川支流の古隅田川右岸、小渕砂丘周辺には、古墳時代後期から中世にかけての集落である春日部市の浜川戸遺跡、八木崎遺跡、小渕山下遺跡の大規模な遺跡群があり、平安時代ではやはり本遺跡同様のロクロ土師器が主体的に出土している。

前出の三ツ和遺跡では竪穴住居跡は検出されていないが、掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、火葬跡、溝跡が多く検出され、大規模な集落と推定されている。平安時代では、灰釉陶器、須恵器、内面黒色処理のロクロ土師器が出土している（浅野ほか 2004)。

伊興遺跡ではグリッド出土ではあるが、８～９世紀の多量の土器や木器とともに、「延暦十七年」、「立薦二巻」、騎馬像の描かれた木簡、木札が出土している。他にも「継吉」、「綿」、「東」、「人」、「子」、「上益」、「三」、「七万」などの墨書土器、下総産のロクロ土師器も出土しており、地域の中核的な祭祀が行われた遺跡と考えられている（佐々木ほか 1999)。

武蔵国と下総国の国境は、前述の浜川戸遺跡などが所在する古隅田川とされており、その南側は下総国葛飾郡である。浜川戸遺跡や大道遺跡は葛飾郡、八條遺跡は埼玉郡、三ツ和、伊興、舎人の３遺跡は足立郡に属することになる。

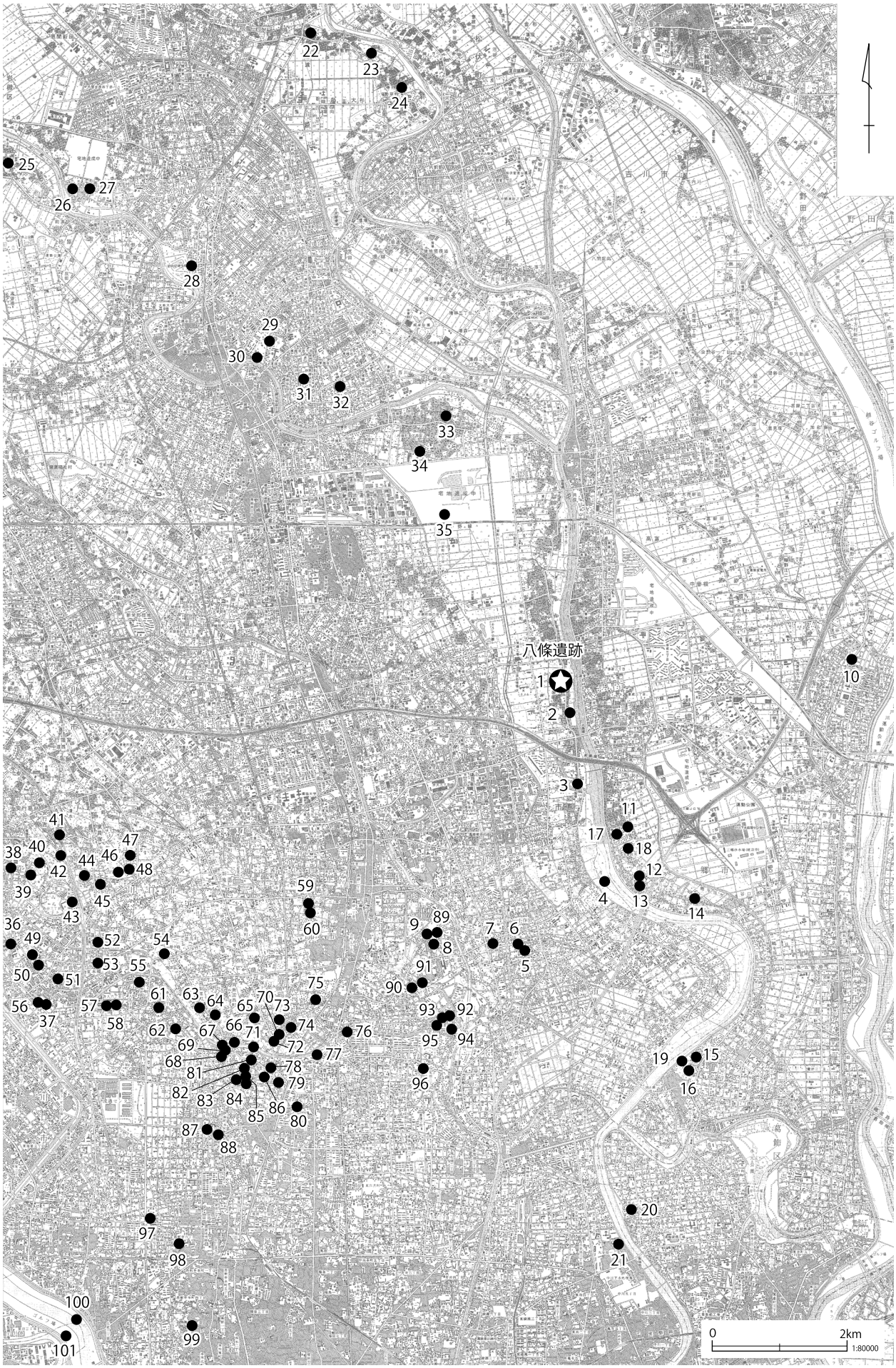
八潮市域の遺跡は近世旗本の墓所である幸田氏墓域のほかは、いずれも中世の遺跡とされているが未調査のため実態は明らかでない。調査区南側に隣接する八條輪中遺跡も未調査である。八條には武蔵七党の一つ野与党出身の地頭職渋江氏の館跡や、戦国時代に岩付太田氏に仕えた阿川氏の屋敷があるとされているものの、現在ではその遺構を見ることはできない。

西側に隣接する八條八幡神社は宝徳元年 (1449) 勧請と伝えられている。前述の八條殿社古墳の上にあった八條殿社から移された弘安七年 (1284) 銘の阿弥陀三尊板碑が保管されている。調査区は近世の八條村絵図によれば、この時に合わせて開かれた新義真言宗の清蔵院があった箇所であり、明治四十年 (1907) に八條橋西詰の清勝院に合寺となるまで同寺の境内であったと考えられる。

遺跡の南側は近世初頭からの開拓名主である会田氏の地所にあたるが、康正二年（1456)、寛正四年（1463)、天文五年（1536）をはじめとする 10 枚の板碑が伝えられており、本遺跡周辺に 15 ～ 16 世紀段階に清蔵院の墓所が存在していた可能性が高い。

周辺では三ツ和遺跡から掘立柱建物跡、井戸跡、大溝、火葬跡などが検出されている。13 世紀の青磁や白磁、渥美焼、山茶碗、14 ～ 16 世紀の常滑、古瀬戸、石鍋、伊勢系鍋が出土し、鎌倉街道中道との関係が推定されている。伊興遺跡からは木樋や溝跡、土壙、火葬跡が検出され、木樋の補強材として転用された 14･15 世紀代の板碑、常滑、焙烙などが出土している。

鎌倉時代の本遺跡周辺は武蔵国大河土御厨内八條郷に当たる。『吾妻鏡』建暦 3 年（1213）5 月 17 日条には岡崎政宣の所領武蔵国大河土御厨内八條郷が式部大夫重清に与えられ、地頭職は従来通り渋江五郎光衡に安堵されたとある。周辺は武蔵国と下総国の国境で、市域南の中川の蛇行地帯には、南北朝期の応安五年 (1372)、香取神社が遺跡の南側の中川左岸下総国側に彦名関、戸ケ崎関、猿ケ俣関を、武蔵国側には鶴ケ曽根関を設けていた。延文六年（1361）の市場祭文には「武州き西こふり八十市祭成之」の記載があり、中世段階で市が立っていた様子が窺える。遺跡周辺は河川交通の結節点として重要な位置を占めていた


八條遺跡
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
0
2km
1:80000

第３図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧

番号	遺　跡　名	時　期
1	八條	
2	八條殿社古墳	古
3	八條輪中	古、中
4	中島	中、近
5	幸田氏墓跡	近
6	鶏鳩塚	中
7	柳之宮	奈
8	西袋陣屋	中
9	氷川神社	古
10	万葉葛飾早稲産地	不明
11	島根氏屋敷跡	中
12	包蔵地	不明
13	包蔵地	古
14	馬場氏屋敷跡	中
15	加藤氏屋敷跡	中
16	匝瑳氏館跡	中
17	包蔵地	古
18	包蔵地	古
19	包蔵地	中
20	包蔵地	不明
21	大谷田古墳	古
22	№13	奈、平
23	№14	奈、平
24	清淨院開山塚	中
25	№９	奈、平
26	大道	奈、平
27	大道第２	奈、平
28	海道西	奈、平、近
29	一番	不明
30	会田出羽屋敷	近
31	№15	奈、平
32	№16	奈、平、近
33	№２	奈、古
34	大相撲次郎能高館跡	不明
35	見田方	古
36	三ツ和	縄、弥、古、奈、平、中、近
37	八幡木神社	近
38	浅間山	弥、古、平
39	赤井台	古
40	天陣山	縄、弥、古、平
41	吉岡	縄、平
42	東本郷台	縄、平
43	八兵衛山古墳(新郷古墳群)	古
44	東本郷	弥、古
45	東養寺古墳(新郷古墳群)	古
46	宮脇	古
47	包蔵地	古
48	高稲荷古墳	古
49	包蔵地	不明
50	包蔵地	古、平
51	近袋貝塚	縄、古、
52	石御堂	古、中、近
53	包蔵地	弥、平
54	包蔵地	奈、平
55	舎人	古、平
56	八幡木天神社	近
57	入谷古墳	古、奈
58	氷川神社境内	古、奈、平
59	包蔵地	古
60	御殿稲荷	古
61	包蔵地	縄、平
62	古千谷	古、平
63	包蔵地	縄、古、
64	包蔵地	古、奈、平
65	包蔵地	奈、平
66	船山塚古墳(伊興古墳群)	古
67	聖塚古墳(伊興古墳群)	古
68	包蔵地	不明
69	東伊興	古
70	包蔵地	古、平
71	金塚古墳(伊興古墳群)	古
72	草加市№６.	奈
73	蜻蛉	古、平、中、近
74	西地総田	古、奈、平
75	東地総田	縄、古、奈、平
76	花畑	弥、古、奈、平
77	法華寺境内	古
78	摺鉢塚古墳(白旗塚古墳)	古
79	白旗塚古墳群	古
80	延命寺境内	古、奈、平
81	伊興	縄、弥、古、平、中、近
82	伊興･谷下･狭間	古
83	熱田宮	古、奈、平
84	経塚遺跡	中
85	伊興経塚(伊興内)	奈、平、中
86	甲塚古墳(白旗塚古墳群)	古
87	若宮八幡神社	平
88	六万部経塚	近
89	包蔵地	弥、古
90	包蔵地	古
91	包蔵地	古、奈、平
92	一本松古墳	古
93	大鷲神社	縄、弥、古
94	大鷲神社境内古墳	古
95	白山塚古墳	古
96	包蔵地	古
97	包蔵地	中
98	宮城氏館	中
99	千葉城跡	中
100	都民ゴルフ場	弥、古
101	都民ゴルフ場内	古

のである。

さらに第３図より西側には岩付城が、南側には東京都葛飾区葛西城がある。両者との具体的な関係は不明ながら、前述の阿川氏の動向からは岩付城との関係が窺える。

近世の遺跡周辺は幕府の直轄領である御料所となっており、近世初頭に会田氏、中嶋氏をはじめとする開発名主によって大規模な開発が行われている。

一方、遺跡南側の八條橋西詰にあった渡しには宿場が開けた。河岸問屋であった太田家の住宅や蔵は移築され、現在公開されている。八條の西側には日光脇往還として利用された千住ー岩槻間を結ぶ下妻道が通っており、新編武蔵風土記稿にも人馬の継立が行われていたと記されている。近世においても、遺跡周辺は河川交通、陸上交通双方の要衝として重視されていたのである。

Ⅲ　遺跡の概要

八條遺跡は八潮市八條に所在し、遺跡の東側には隣接して中川が南流している。市内は都市化が進み遺跡周辺でも宅地が増えているが、水田と屋敷林が多く残されている一帯でもある。

基本土層は５層に分層したが、各層とも砂を多く含んでおり、過去に起きた多くの洪水を彷彿とさせる。現地表面から確認面とした灰黄褐色土（第Ⅳ層）の上面まではおよそ 80cm で、その上層は包含層である。

第Ⅰａ・Ⅰｂ層は砂層で近世以降の堆積土である。第Ⅱ層は焼土を含む暗褐色土で、中世の遺物が包含されている。第Ⅲ層は平安時代の遺物包含層で、確認面とした灰黄褐色土との分層は困難な部分が多い。第Ⅳ層以下は遺物を包含しないが、土壙から縄文時代後期の土器片が出土しており、調査箇所以外に縄文時代の遺構や包含層の存在する可能性がある。

確認面の標高はおよそ 2.00 ｍである。調査区の南側と東側の端部は急激に傾斜しており、自然堤防の範囲の狭さを窺わせている。

調査では平安時代の住居跡５軒、土壙 62 基、井戸跡２基、溝跡 10 条、畠跡１箇所、中世の土壙 11 基、井戸跡３基、溝跡４条、近世の土壙３基、井戸跡１基、溝跡２条、重複関係、遺構の分布から中近世と考えられる土壙が４基、溝跡１条、時期不詳の土壙 10 基、溝跡５条、ピット 137 基を検出した。

平安時代の住居跡はいずれも北にカマドを備え、掘り込みは浅い。土壙、溝跡は同一の軸線状に並ぶ場合が多く、何らかの区画を形成していると考えられる。

遺物は灰釉陶器をはじめ、下総産や利根川流域産のロクロ土師器、南比企・東金子・三和・新治窯産の須恵器、土師器、土錘、刀子、釘、鉄斧、鉄製紡錘車が出土している。

さらに、第 4 号住居跡からは置きカマドが出土している。ロクロ土師器は内面が黒色処理され、ヘラ磨きされるものが大部分である。第３号住居跡からは「兀」の墨書のあるロクロ土師器の坏が、第 57 号土壙からは見込みに「正金」と刻書された坏が出土している。

また、第２号住居跡からは蛇紋岩製の丸鞆、第３号住居跡からは同じく鉈尾が出土しており、第４ 号住居跡で出土した置きカマドとともに特筆される。

中世の土壙では第 18・19 号土壙が墓壙と考えられる。土層断面に蓋板の痕跡や棺座状の粘土の貼り付けが認められ、刀や青磁、北宋銭などの副葬品が出土している。第 92 号土壙からは渥美焼の大甕が一括して出土しているが、接合しないため廃棄したものと考えられる。

遺物は同安窯系青磁や龍泉窯系青磁といった中国産磁器、渥美、常滑、山茶碗などの陶器、かわらけ、在地産の鉢、鍋、焙烙などの土器、土錘、刀、古銭などが出土している。特徴的なのは同安窯系青磁が多く出土していることである。龍泉窯系青磁も鎬蓮弁の碗のみでなく、ヘラ描きの花弁文が施されている例が多い。

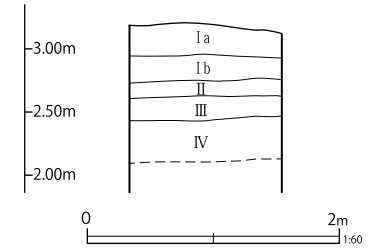
近世の土壙では第 93・97 号土壙が墓壙と考えられる。第 97 号土壙は調査時に「鍋被り葬」が確認されている。骨片や副葬品と考えられる肥前系磁器、古銭が出土している。

遺物は肥前系磁器、瀬戸美濃陶器、志野皿、かわらけ、焙烙、硯が出土している。第５号溝跡から近代の陶磁器が多く出土したほかは少量である。

確認面に至るまでの包含層からの出土遺物も多く、遺構として認定できなかったものの、あるいは更に多くの遺構が存在したかも知れない。特に古代の遺物が多い。

2次調査区
1次調査区
遺跡の範囲
八条八幡神社
中川紙業
ケアハウス
やしお寿苑
八條北小学校
ふるさとの森
0
100m
1:5000

第４図　調査地点位置図



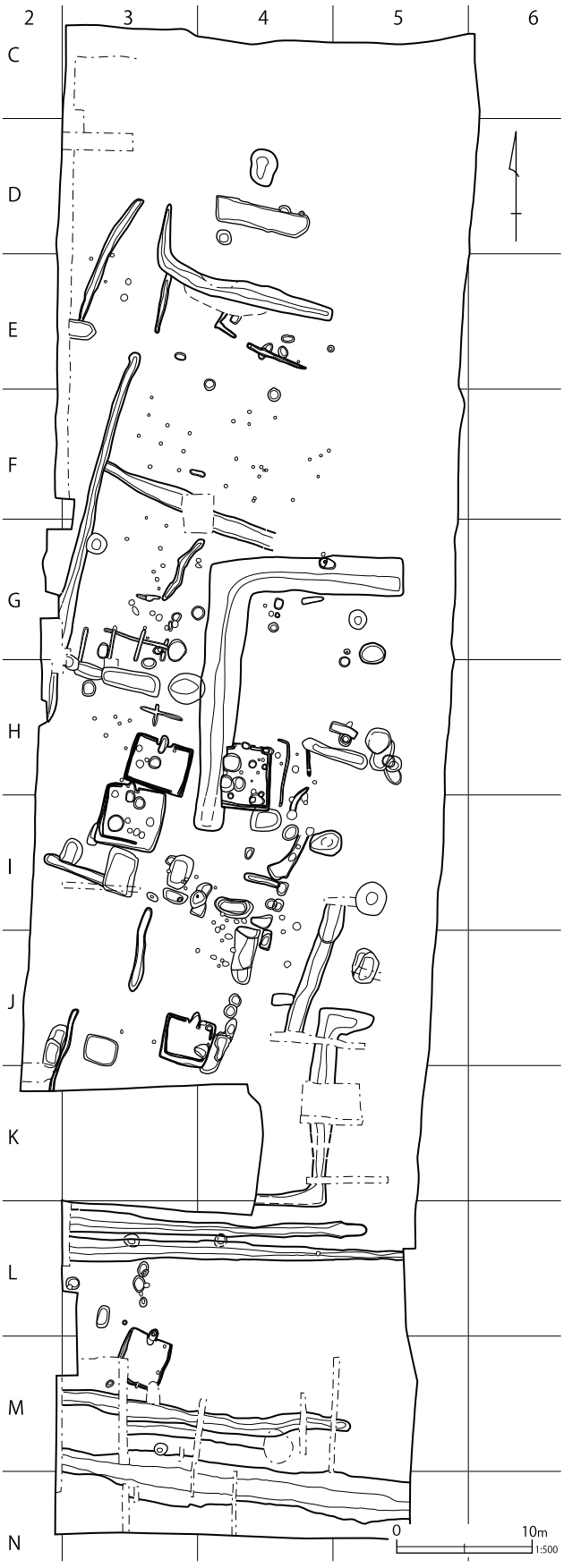
Ⅰa	褐色土	砂層　しまりなし　粘性弱い
Ⅰb	褐色土	砂層　しまりなし　粘性弱い Ⅰa層より砂が少ない
Ⅱ	暗褐色土	焼土粒（径１～５㎜）少量 しまりあり　粘性やや強い
Ⅲ	にぶい黄褐色土	マンガン少量　しまりあり 粘性強い
Ⅳ	灰黄褐色土	マンガン多量　しまりあり 粘性強い

第５図　基本土層

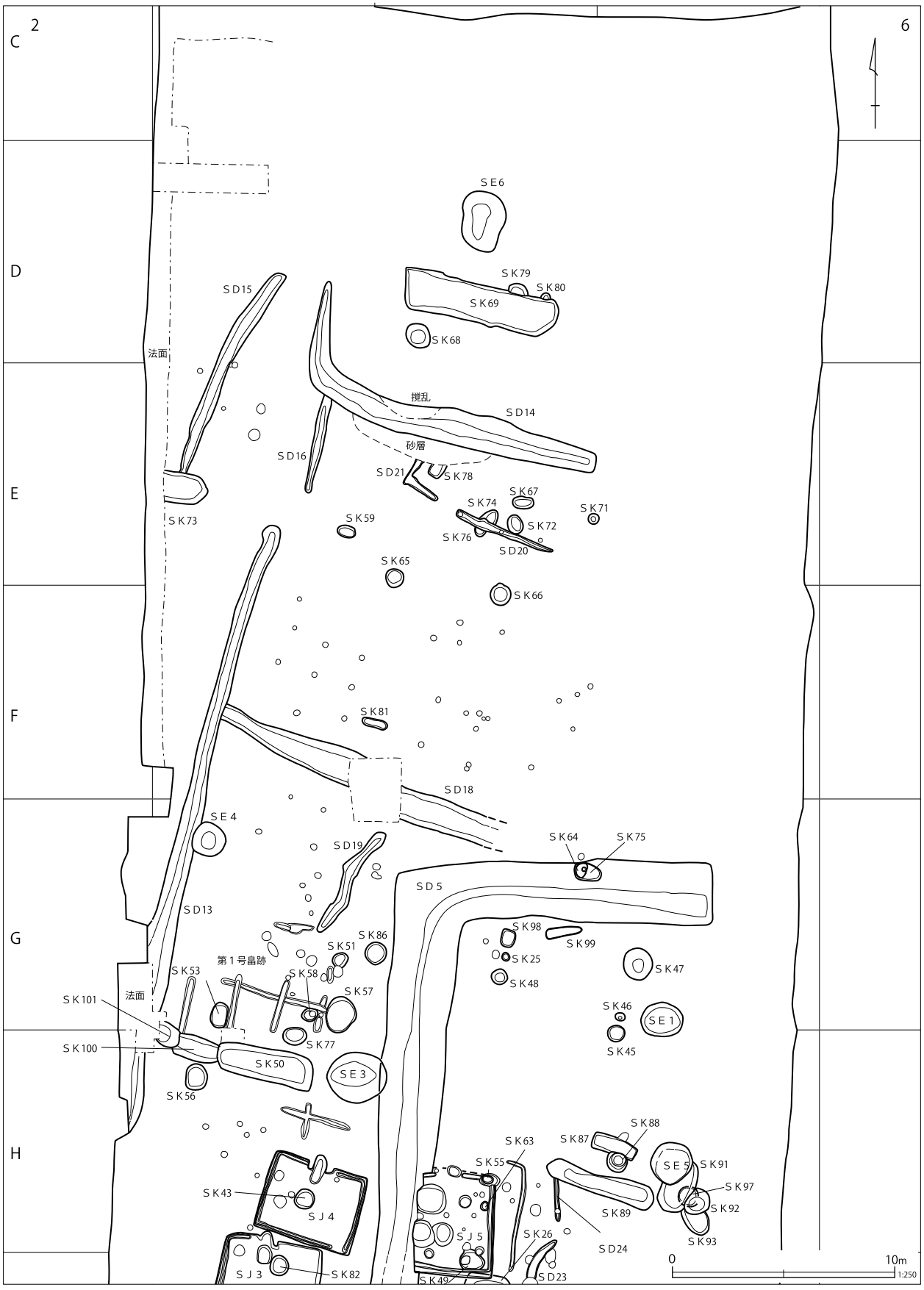
今回の調査区は、古代においては集落域として利用されていた。最も大きな特徴は、武蔵、下総、常陸、利根川流域の各地で生産された須恵器、ロクロ土師器、土師器が使われている点である。丸鞆や鉈尾、置きカマドの出土とも合せて、下級官人の関与など一般的な集落とは性格を異にする地域の中心的な集落である可能性が考えられる。

中近世においては集落の存在を示す遺構がなく土壙墓が存在すること、南側の隣接地に板碑が多く伝えられていることからも、墓域などとして利用されたと考えられる。中国産青磁の出土や、刀が副葬されるなど、在地の有力者層の関与が推定される。

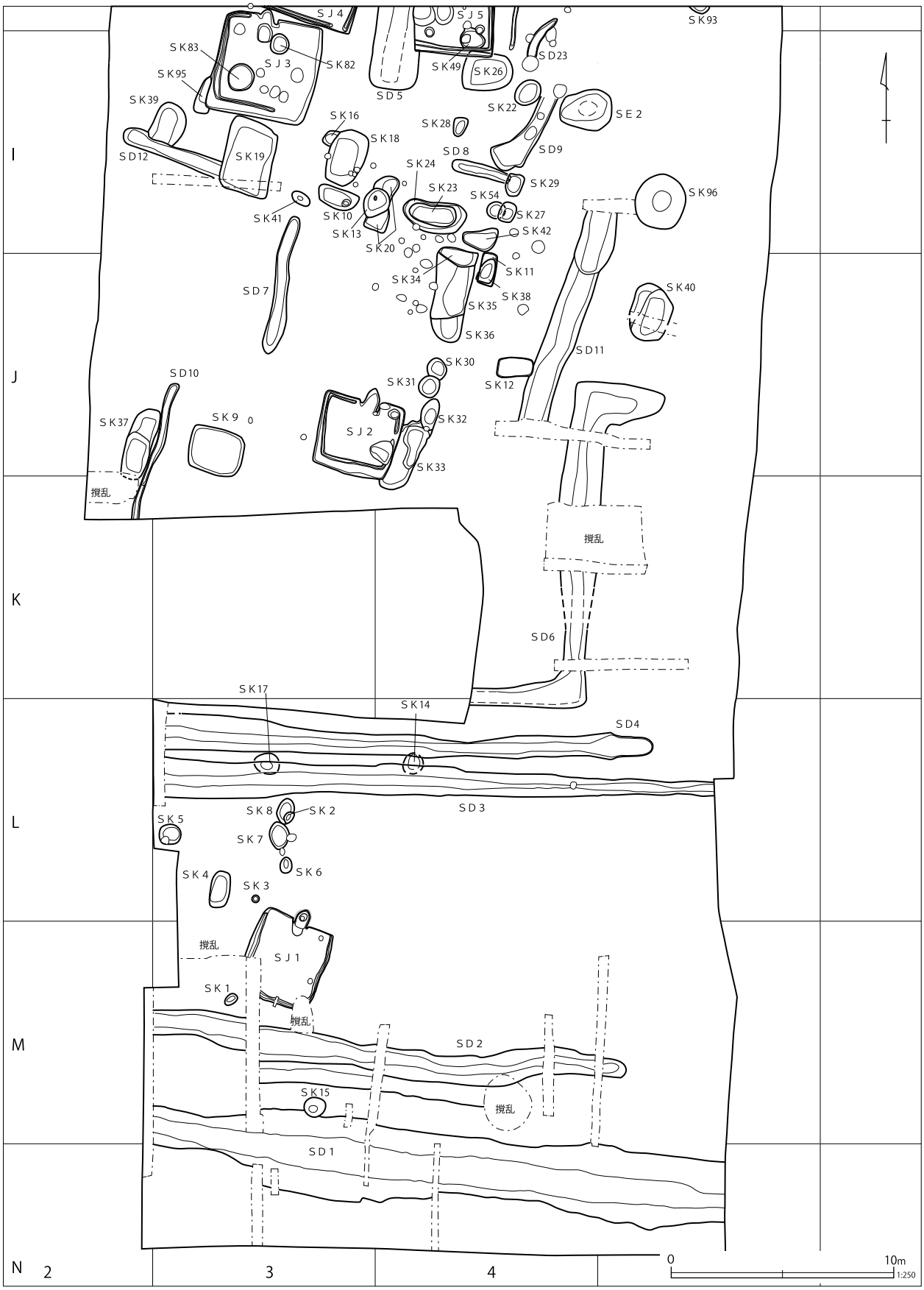
中世末から近世には、Ⅱで触れた八條村絵図に示された清蔵院の境内になり、近代に至ったものと思われる。



第６図　全体図


2
6
C
D
E
F
G
H
SE6
SK79
SK80
SK69
SK68
SD15
法面
攪乱
SD14
SD16
砂層
SD21
SK78
SK67
SK74
SK71
SK73
SK59
SK72
SK76
SD20
SK65
SK66
SK81
SD18
SE4
SD19
SK64
SK75
SD5
SD13
SK98
SK99
SK86
SK51
第1号畠跡
SK25
SK47
SK53
SK58
SK48
SK57
SK101
法面
SK46
SE1
SK77
SK45
SK100
SK50
SE3
SK56
SK88
SK63
SK87
SK55
SE5
SK91
SK43
SK97
SJ4
SK89
SK92
SJ5
SK26
SK93
SD24
SJ3
SK82
SK49
SD23
0
10m
1:250

第７図　調査区北半部


SJ4
SJ5
SK93
SK83
SJ3
SK82
SK95
SK49
SK26
SD23
SD5
SK39
SK22
SE2
SK16
SK28
SK18
SD12
SK19
SD8
SD9
SK24
SK29
SK23
SK54
SK96
SK41
SK10
SK27
SK13
SK42
SK20
SK11
SD7
SK34
SK40
SK38
SK35
SK36
SD11
SK30
SD10
SK31
SK12
SK37
SK9
SK32
SJ2
SK33
搅乱
搅乱
SD6
SK17
SK14
SD4
SD3
SK8
SK2
SK5
SK7
SK6
SK4
SK3
搅乱
SJ1
SK1
搅乱
SD2
SK15
搅乱
SD1
I
J
K
L
M
N
2
3
4
0
10m
1:250

第８図　調査区南半部

Ⅳ　遺構と遺物

１．住居跡

今回の調査では、平安時代の住居跡を５軒検出した。第１号住居跡を除き、調査区の中央に集中して分布している。いずれも北カマドで、軸方向もほぼ一致する。

第１号住居跡（第９・10図）

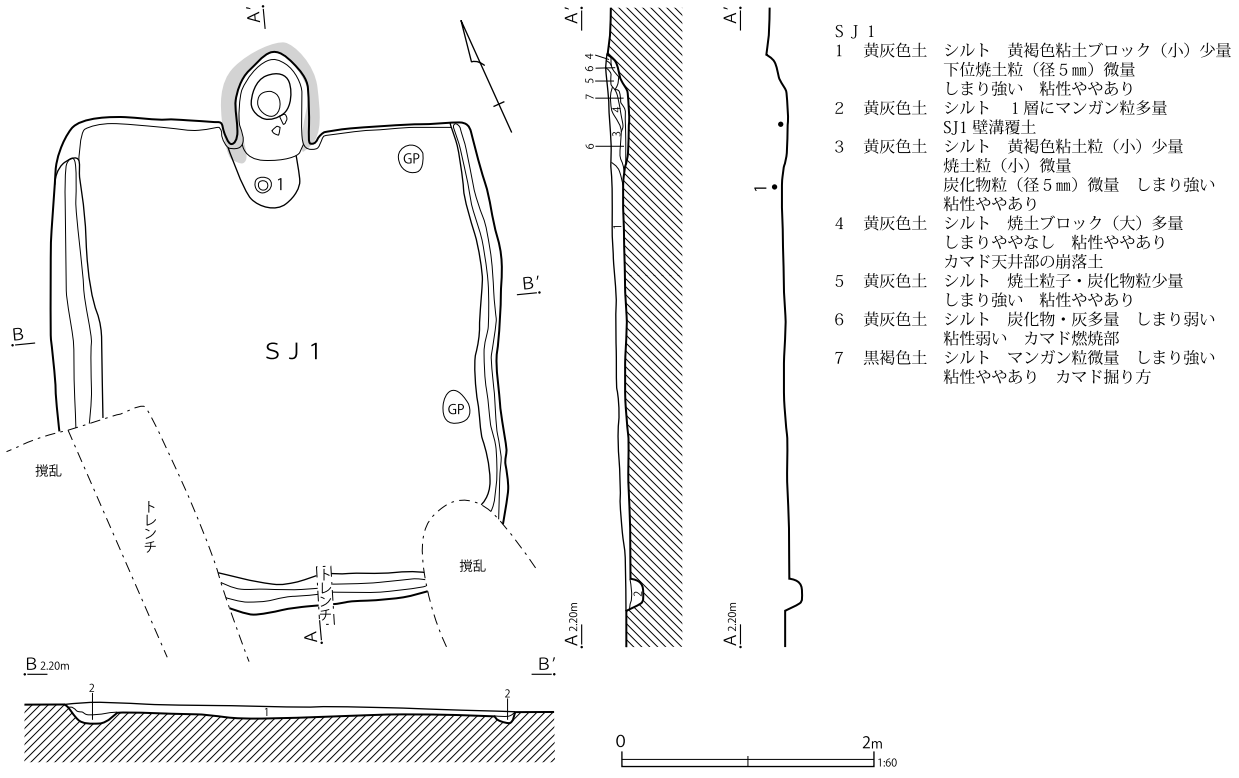
調査区南のＬ・Ｍ－３グリッドに位置する。南東コーナー、南西コーナーが撹乱されている。平面形態は長方形で、各辺とも丸みを帯びている。カマドを通る長軸を主軸とすると、主軸方位はＮ－21°－Ｅで、北カマドである。規模は長軸3.85 m、短軸3.54 mである。深さは0.15 mである。覆土は黄灰色土の単層である。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられていた。燃焼部が壁の外側に突出している。煙道は検出されていない。規模は全長0.95 m､幅0.75 mである。焚口部は深さ0.1 mほどの皿状に掘り窪められ、１の完形の坏が出土している。燃焼部は半円形で中央がやや凹んでいる。壁一面が焼土化し、良く焼けていた。覆土は４層が天井の崩落土、６層が灰層、７層がカマド掘り方である。灰層中からは土師器甕の破片が出土した。７層上面は火床面だがあまり焼けていなかった。袖は黄褐色粘土の貼り付けにより造られ、内側が良く焼けていた。

柱穴等の床面の施設は検出されなかった。壁周溝は北壁を除く三辺でほぼ全周する。幅0.15～0.40 m、深さ0.03～0.08 mで西側の方がやや深い。

遺物は少量で、平安時代の須恵器坏、蓋、ロクロ土師器の高台付坏、土師器の甕が覆土中から出土した。

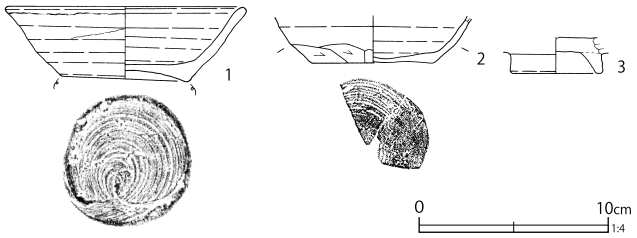
１はロクロ土師器の坏で、完形である。底面は回転糸切りである。歪みが大きく、器肉が厚い。



ＳＪ１
1　黄灰色土　シルト　黄褐色粘土ブロック（小）少量
　　下位焼土粒（径５㎜）微量
　　しまり強い　粘性ややあり
2　黄灰色土　シルト　１層にマンガン粒多量
　　SJ1壁溝覆土
3　黄灰色土　シルト　黄褐色粘土粒（小）少量
　　焼土粒（小）微量
　　炭化物粒（径５㎜）微量　しまり強い
　　粘性ややあり
4　黄灰色土　シルト　焼土ブロック（大）多量
　　しまりややなし　粘性ややあり
　　カマド天井部の崩落土
5　黄灰色土　シルト　焼土粒子・炭化物粒少量
　　しまり強い　粘性ややあり
6　黄灰色土　シルト　炭化物・灰多量　しまり弱い
　　粘性弱い　カマド燃焼部
7　黒褐色土　シルト　マンガン粒微量　しまり強い
　　粘性ややあり　カマド掘り方

第９図　第１号住居跡

下総産。２はロクロ土師器の坏である。底部外周ヘラケズリ。底面回転糸切り後外側に手持ちヘラケズリを加えている。器肉は薄いが下総産の可能性が高い。３はロクロ土師器の高台付埦である。見込み部分にヘラ磨きが施されていると考えられるが不明瞭である。下総産。



第 10 図　第１号住居跡出土遺物

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表（第 10 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	坏	12.4	3.7	6.5	ＡＣＨＩＫ	100	普通	にぶい黄橙	下総　カマド　№１	7-1
2	ロクロ土師	坏	－	2.4	(6.4)	ＡＣＨＩＫ	35	良好	にぶい橙	下総	7-2
3	ロクロ土師	高台付埦	－	1.9	(4.9)	ＡＥＨＩＫ	80	良好	にぶい橙	下総	18-4

第２号住居跡（第 11・12 図）

調査区中央やや南側のＪ・Ｋ－３・４グリッドに位置する。本住居跡を壊して第 33 号土壙が掘り込まれている。平面形態はやや歪んだ方形で、各辺とも直線的である。北カマドある。壁周溝が、壁から離れた内側を巡り、断面では確認できないが拡張されたと考えられる。

覆土は灰黄褐色土、黒褐色土、暗黄褐色土で、レンズ状の自然堆積である。

カマドは歪んでおり、住居跡の中軸方向はＮ－16°－Ｅである。規模は長軸 3.65 ｍ、短軸 3.46 ｍである。深さは 0.30 ｍである。

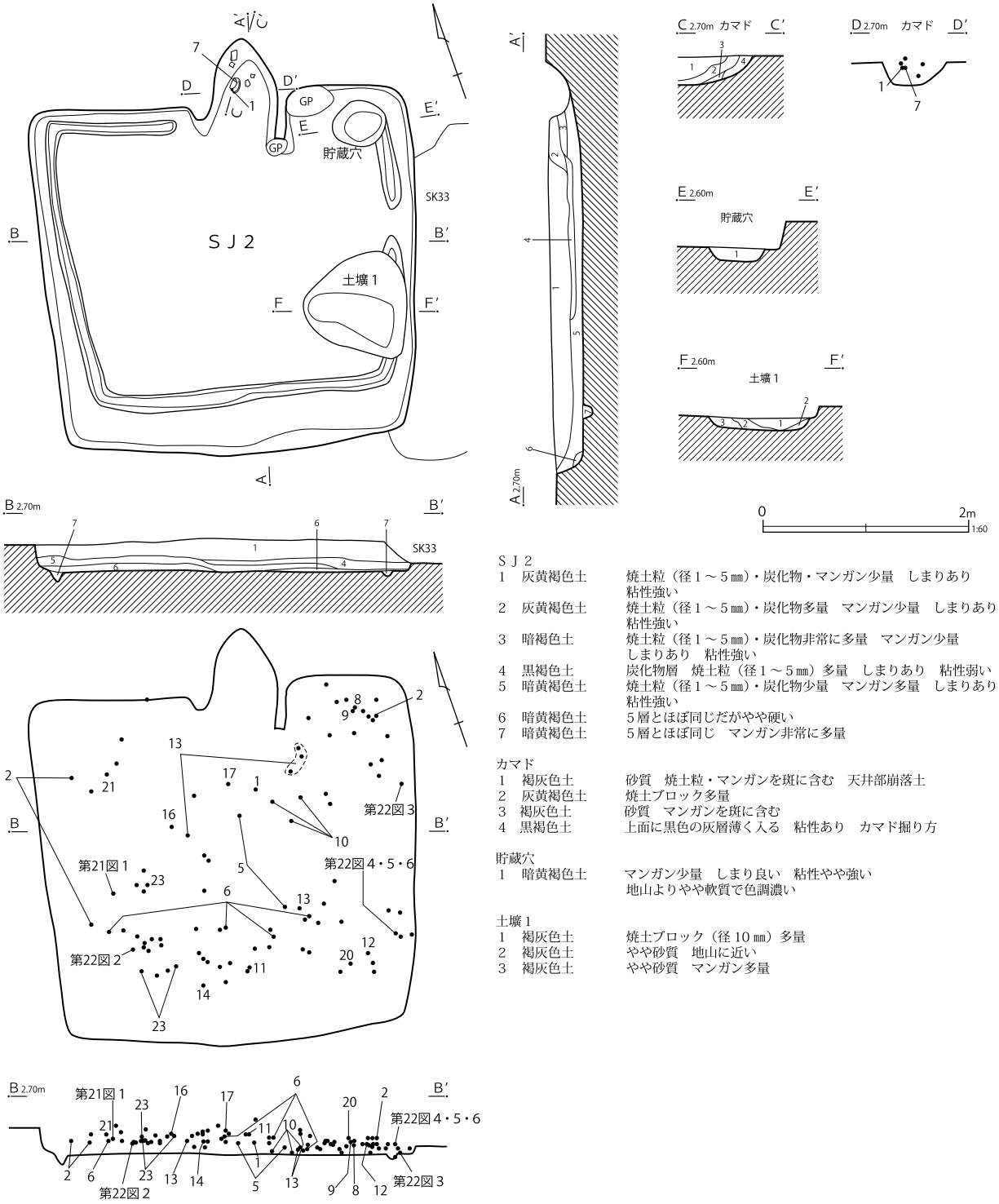
カマドは北壁のほぼ中央に設けられていた。規模は全長 1.14 ｍ、幅 0.70 ｍである。全体の軸方向より東へ傾いている。燃焼部は壁の外側に突出し、煙道は検出されていない。袖は黄褐色粘土の貼り付けにより造られており、焚口部は床面から連続し、燃焼部は中央がやや凹み、徐々に浅くなる。覆土は１層が天井の崩落土、２・３層が灰層、４層が掘り方である。カマドの覆土中からは１・７の灰釉陶器碗、ロクロ土師器の坏、土師器甕の破片が出土した。

床面からは北東隅に貯蔵穴、東壁中央手前に土壙状掘り込み、壁周溝が設けられていた。貯蔵穴は長軸 0.50 ｍ、短軸 0.45 ｍ、深さ 0.15 ｍで、不整楕円形を呈する。覆土は暗黄褐色土の単層で、遺物は出土していない。壁周溝は南壁から 0.4cm ほど離れて巡っていた。東側中央とカマド東側が途切れていた。

遺物は５層中とその直上から出土した。平安時代の灰釉陶器碗、須恵器坏、甕、ロクロ土師器の坏、高台付坏、甑、土師器の甕、台付甕、甑、蛇紋岩製の丸鞆、鎖、棒状鉄製品が覆土中から出土した。

丸鞆は西壁中央よりやや離れた箇所の中層からの出土である。

１は灰釉陶器の碗で、全面漬け掛けである。黒笹 14 号窯段階で、猿投窯産である。２・３は須恵器の坏である。南比企窯跡産で、鳩山Ⅷ期である。２は外面に火襷が認められる。５～11 はロクロ土師器の坏である。いずれも下総産と考えられる。６～11 は内面黒色処理され、細かい横位のヘラ磨きが加えられている。底面は５・８が回転糸切り、６・７は糸切り後用辺ヘラケズリ、９が全面回転ヘラケズリである。６～11 は底部の外周にヘラケズリが加えられている。４はロクロ土師器の高台付坏である。内面黒色処理後細かいヘラ磨きが施されている。12 は須恵器の甕である。底部外周ヘラケズリ、底面回転糸切りである。白色粒子を多く含み、三和窯産である。13 ～ 20 は土師器甕である。14 は屈曲が緩やかだが、その他は典型的なコの字甕である。13・14 には粘土の積み上げ単位が開裂状に認められる。口縁端



SＪ２
1　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物・マンガン少量　しまりあり　粘性強い
2　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　マンガン少量　しまりあり　粘性強い
3　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物非常に多量　マンガン少量　しまりあり　粘性強い
4　黒褐色土　炭化物層　焼土粒（径１～５㎜）多量　しまりあり　粘性弱い
5　暗黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　マンガン多量　しまりあり　粘性強い
6　暗黄褐色土　５層とほぼ同じだがやや硬い
7　暗黄褐色土　５層とほぼ同じ　マンガン非常に多量

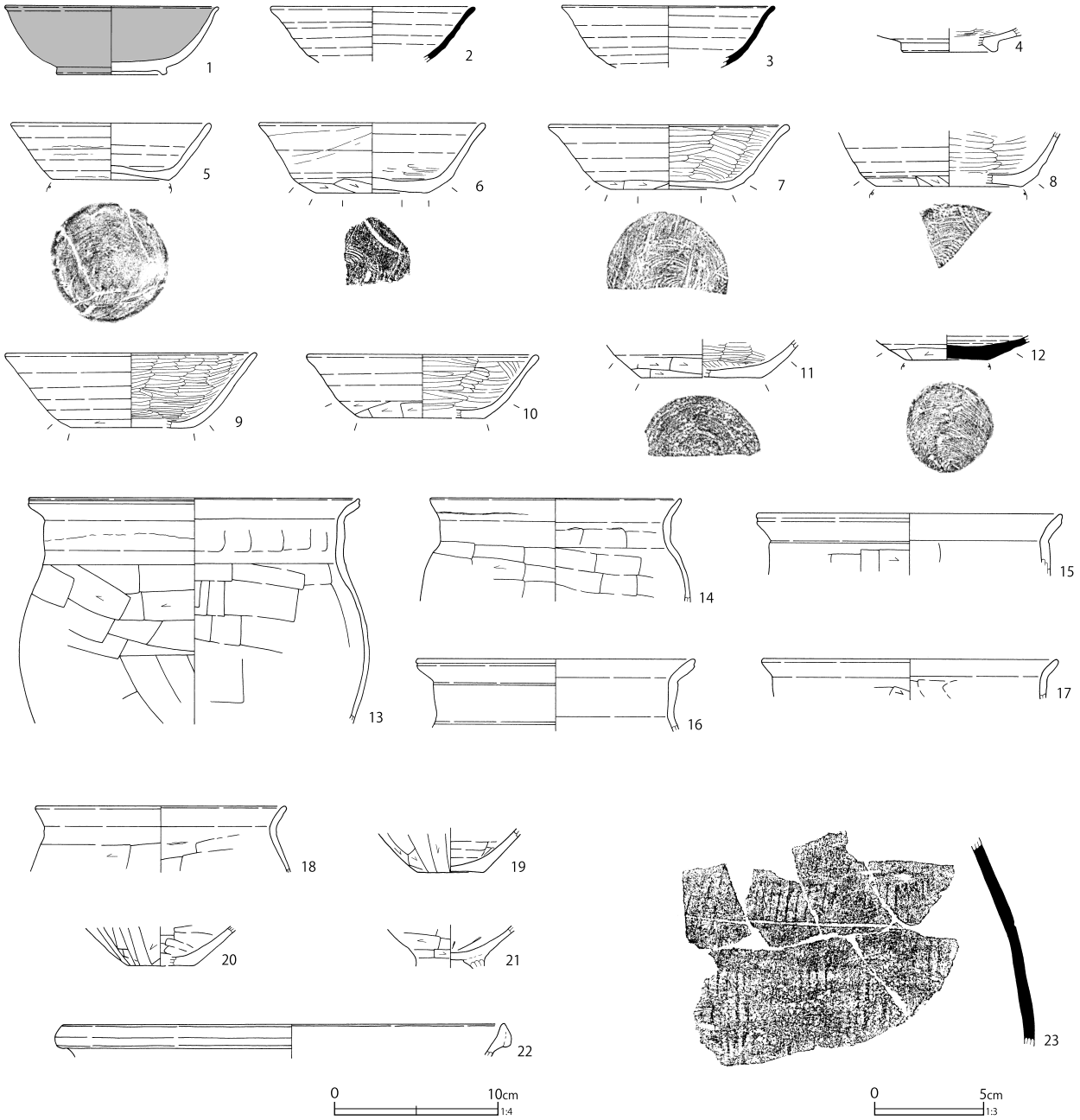
カマド
1　褐灰色土　砂質　焼土粒・マンガンを斑に含む　天井部崩落土
2　灰黄褐色土　焼土ブロック多量
3　褐灰色土　砂質　マンガンを斑に含む
4　黒褐色土　上面に黒色の灰層薄く入る　粘性あり　カマド掘り方

貯蔵穴
1　暗黄褐色土　マンガン少量　しまり良い　粘性やや強い　地山よりやや軟質で色調濃い

土壙１
1　褐灰色土　焼土ブロック（径 10 ㎜）多量
2　褐灰色土　やや砂質　地山に近い
3　褐灰色土　やや砂質　マンガン多量

第 11 図　第２号住居跡

部はやや面を持ち、沈線状を呈している。口縁部の横ナデと下位のヘラケズリには前後があり、14・15 はヘラケズリが横ナデを切っている。18 は小型の甕で緩いコの字状を呈する。19・20 は甕の底部である。外面全体ヘラケズリである。21 は台付甕の接合部である。22 はロクロ土師器の甑口縁部である。下総産である。23 は須恵器の甕胴部である。土師質に近い。外面平行タタキ後ナデが加えられている。内面は風化している。煤が付着する。白色粒子を多く含み、三和窯産と考



第 12 図　第 2 号住居跡出土遺物

えられる。

第３号住居跡（第 13 ～ 15 図）

調査区中央西側のＨ・Ｉ－３グリッドに位置する。第 82・83・95 号土壙を床面精査時に検出したことから、本住居跡はそれらを壊して掘り込まれたと判断できる。北側には本住居跡に先行する第４号住居跡が接している。

平面形態はやや歪んだ方形で、各辺とも直線的である。北壁はカマドの左右で連続せず、先行する第４号住居跡の掘り込みを避けて造られたと考えられる。南側の壁周溝は壁から離れて巡り、それに合わせて覆土が不連続となることから、壁周溝と一致する北側に造り替えられたと思われる。

覆土に焼土、炭化物を多量に含む焼失家屋だが、構造材と考えられる炭化材は出土していない。

カマドを通る住居跡の中軸線の方向はＮ－ 14°

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表（第 12 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	碗	13.0	4.1	6.8	ＩＪ	60	良好	灰白	猿投窯　№12　カマド№６	7-3
2	須恵器	坏	(12.4)	3.4	－	ＡＩＪＫ	25	良好	灰	南比企　鳩山Ⅷ　外面火襷　№１･28･94	18-4
3	須恵器	坏	(13.0)	4.7	－	ＩＪ	20	普通	灰	南比企　鳩山Ⅷ　SJ４ SK33	18-4
4	ロクロ土師	高台付坏	－	1.4	(5.9)	ＨＩ	15	普通	にぶい橙	下総　内面黒色	
5	ロクロ土師	坏	12.0	3.4	7.2	ＣＨＩＫ	80	普通	橙	下総　№11・53	7-4
6	ロクロ土師	坏	(13.7)	4.2	(7.0)	ＡＨＩＫ	35	良好	橙	下総　内面黒色　内面煤付着　№50･57･65･93	7-5
7	ロクロ土師	坏	(14.4)	3.9	7.4	ＡＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	下総　内面黒色　カマド　№５	7-6
8	ロクロ土師	坏	－	3.3	(9.0)	ＡＧＩＫ	15	良好	にぶい橙	下総　内面黒色　№23	
9	ロクロ土師	坏	(15.2)	4.5	(7.4)	ＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	下総　内面黒色　№24	7-7
10	ロクロ土師	坏	(14.0)	3.8	(7.6)	ＡＨＩＫ	50	普通	灰褐	下総　内面黒色　内外面煤付着　№13･14･95	7-8
11	ロクロ土師	坏	－	2.3	(7.4)	ＡＣＨＩＫ	30	良好	内黒　外にぶい黄橙	下総　内黒土器　№60	
12	須恵器	甕	－	1.5	5.2	ＣＥＩＪＫ	80	良好	灰	三和窯　№42	18-4
13	土師器	甕	(10.2)	8.8	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	№８･17･52	7-9
14	土師器	甕	(15.4)	6.3	－	ＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	外面煤付着　№74	18-4
15	土師器	甕	(18.7)	3.7	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	カマド	18-4
16	土師器	甕	(17.0)	4.4	－	ＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	№７	18-4
17	土師器	甕	(18.0)	2.4	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	橙	№10	
18	土師器	甕	(15.2)	4.0	－	ＣＨＩＫ	5	普通	にぶい橙		18-4
19	土師器	甕	－	2.6	4.0	ＡＣＨＩＫ	65	普通	にぶい黄橙	カマド	
20	土師器	甕	－	2.4	4.0	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい赤褐	№46	
21	土師器	台付甕	－	2.6	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	褐灰	№３	
22	ロクロ土師	甑	(27.0)	2.0	－	ＡＨＩ	5	普通	灰黄褐	下総	18-4
23	須恵器	甕	－	9.5	－	ＥＩＫ	5	普通	黄灰	三和窯　内面煤付着　№75･78･96　同一個体№86	18-4

－Ｅである。規模は長･短軸とも 4.50 ｍである。深さは遺存の良い南側で 0.35 ｍである。

カマドは北壁の中央より西側に、やや西側に曲がった方向に取り付けられていた。規模は全長 0.70 ｍ、幅 0.40 ｍである。燃焼部は壁の外側に若干突出し、煙道は検出されていない。焚口部は床面から連続して燃焼部となり、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁は部分的に焼土化し、床面はあまり焼けていない。覆土はあまり明瞭でないが９･12 層が天井の崩落土、10 層が燃焼部床面の堆積土と考えられる。袖は黄褐色粘土の貼り付けにより造られていた。

床面にはカマド手前に床下土壙が、西側に壁周溝が設けられていた。床下土壙は南北方向を軸とする楕円形で、長軸 0.70 ｍ、短軸 0.65 ｍ、深さ 0.15 ｍで、暗黄褐色土の単層である。

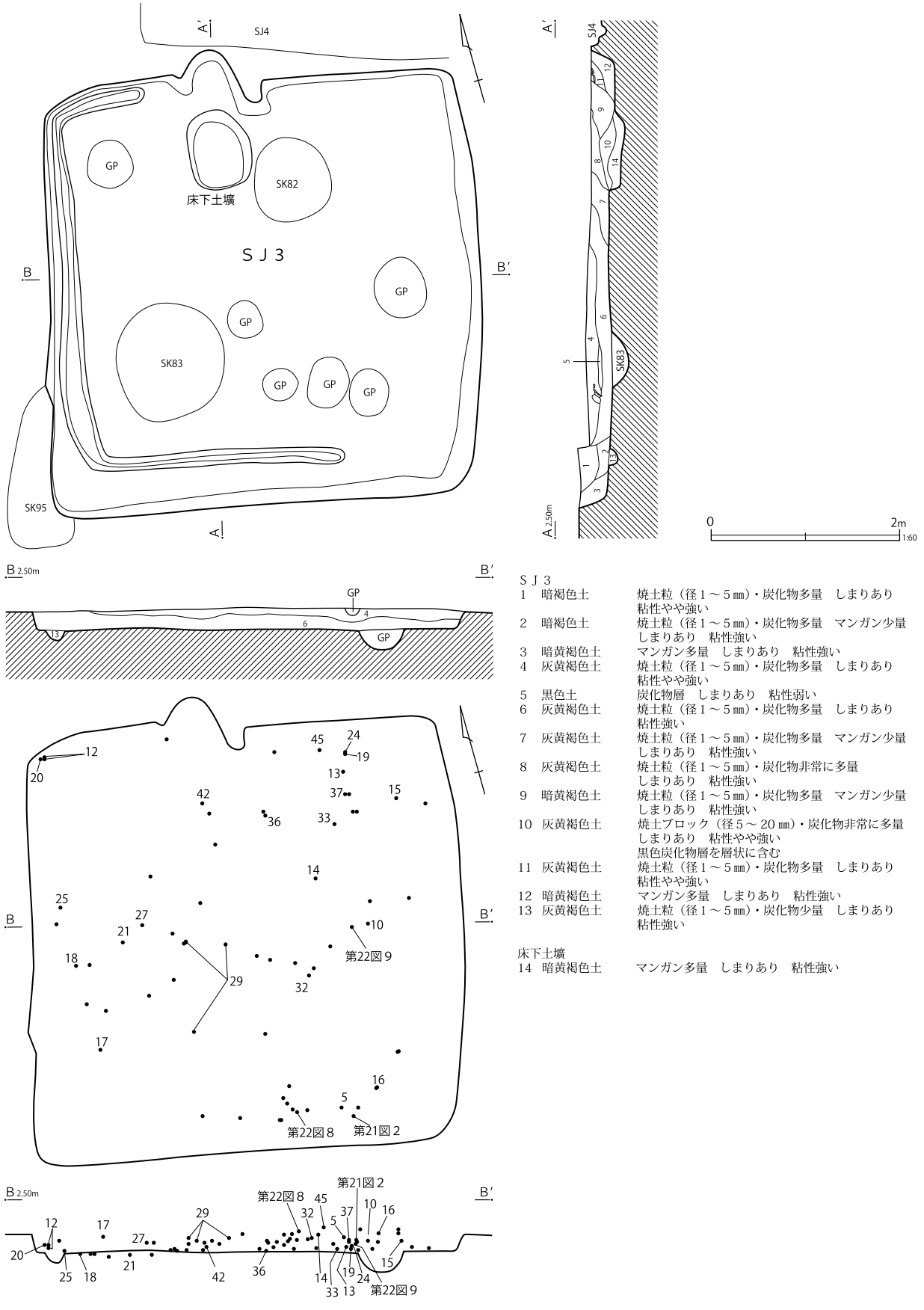
壁周溝は幅 0.10 ～ 0.30 ｍ、深さ 0.10 ｍで、住居の西側と南側に設けられていた。南側は壁から 0.2 ｍほど離れている。覆土は焼土、炭化物を含み、住居跡全体と同時に埋没したと考えられる。

遺物は下層を中心に、特に集中することなく住居跡全体から出土した。鉈尾は南東コーナー付近、床面から浮いた状態で出土している。紡錘車は南東コーナー付近の上層からの出土である。

出土遺物の器種は平安時代の灰釉陶器碗、壺、ロクロ土師器坏、高台付坏、須恵器坏、皿、甕、土師器坏、甕、台付甕、蛇紋岩製の鉈尾、鉄製紡錘車、鎌の可能性のある板状鉄製品、棒状鉄製品である。

１～３は灰釉陶器である。１は碗、２は鉢で、刷毛塗りにより施釉されている。尾北窯産、黒笹 14 号段階である。３は壺と推定される。

４～９は須恵器の坏である。底面は回転糸切りである。４は末野窯産、５・６が東金子窯産、７～９は南比企窯産である。８・９は鳩山Ⅷ期であ



ＳＪ３

1　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　しまりあり　粘性やや強い

2　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　マンガン少量　しまりあり　粘性強い

3　暗黄褐色土　マンガン多量　しまりあり　粘性強い

4　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　しまりあり　粘性やや強い

5　黒色土　炭化物層　しまりあり　粘性弱い

6　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　しまりあり　粘性強い

7　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　マンガン少量　しまりあり　粘性強い

8　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物非常に多量　しまりあり　粘性強い

9　暗黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　マンガン少量　しまりあり　粘性強い

10　灰黄褐色土　焼土ブロック（径５～20㎜）・炭化物非常に多量　しまりあり　粘性やや強い　黒色炭化物層を層状に含む

11　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　しまりあり　粘性やや強い

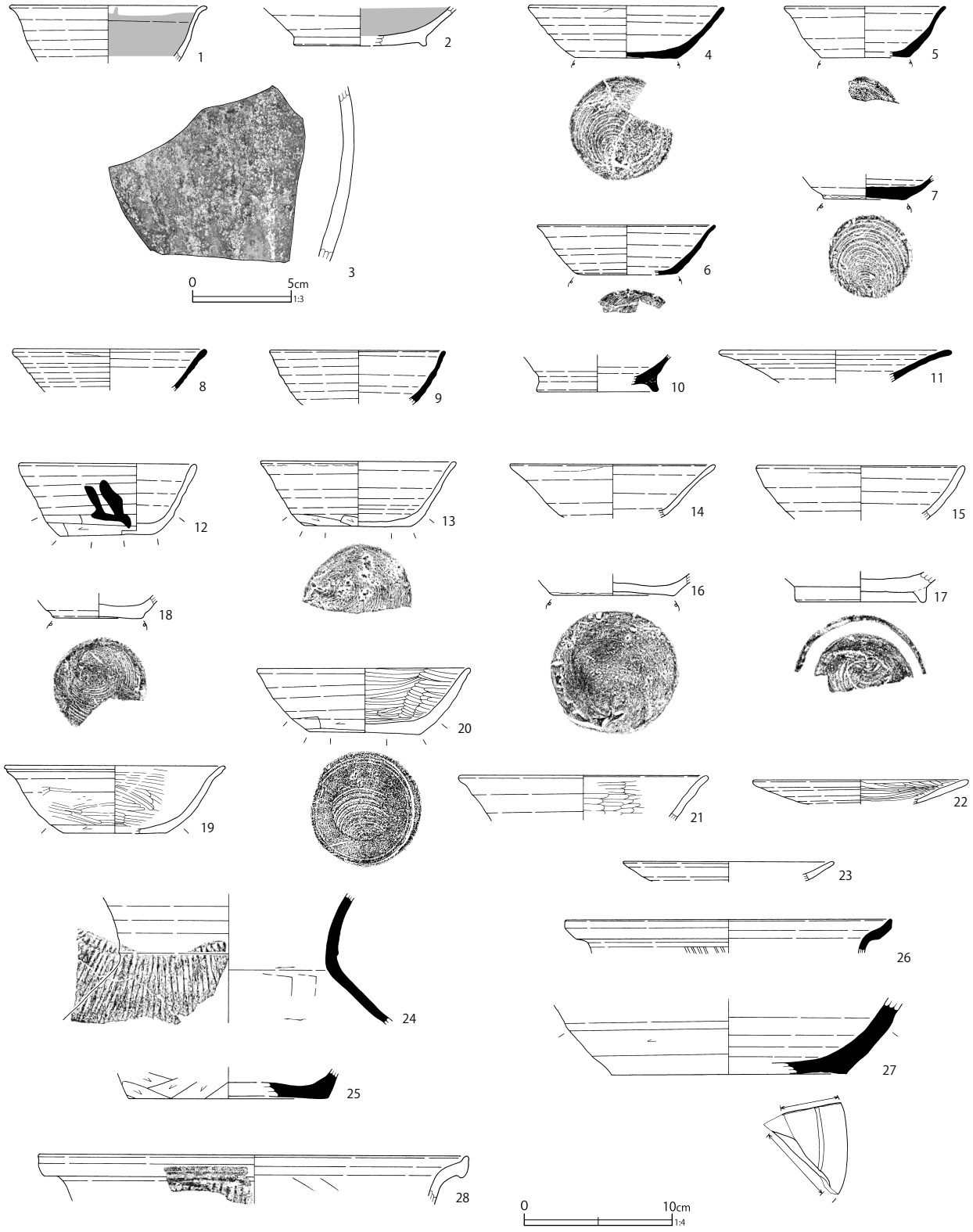
12　暗黄褐色土　マンガン多量　しまりあり　粘性強い

13　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い

床下土壙

14　暗黄褐色土　マンガン多量　しまりあり　粘性強い

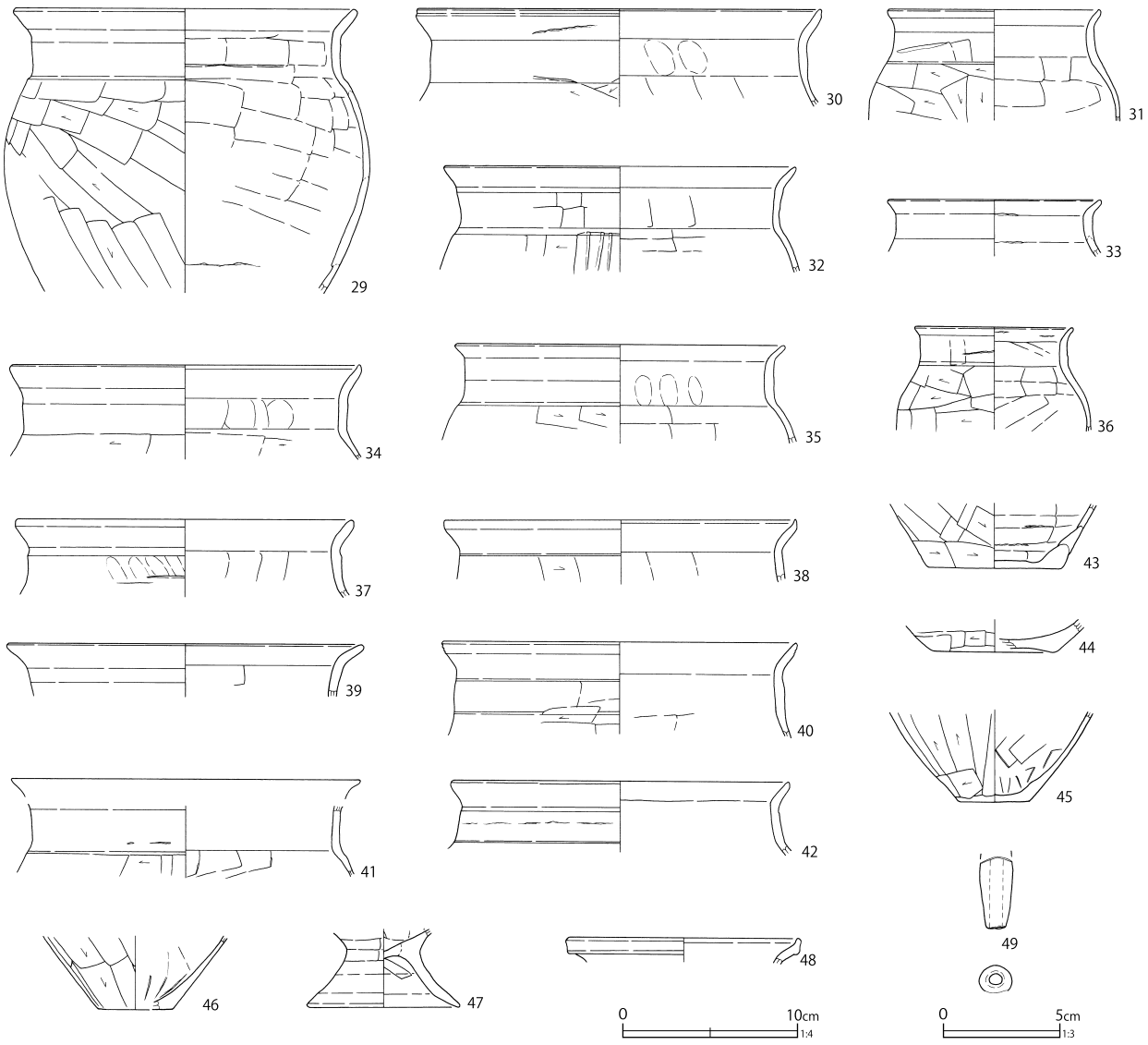
第 13 図　第３号住居跡



第 14 図　第 3 号住居跡出土遺物（1）

る。10 は須恵器の高台付埦である。南比企窯跡産で鳩山Ⅷ期である。11 は須恵器の皿で、末野窯跡産である。

12 ～ 23 はロクロ土師器である。12 ～ 16 は下総産の坏である。12 は墨書土器で外面下半に「兀」字が逆さまに書かれている。底部外周へラケズリ、



第 15 図　第 3 号住居跡出土遺物（2）

底面は周辺ヘラケズリ後ナデが加えられている。13 も同様だが、底面にナデが加えられていない。16・18 は回転糸切りのみの底部破片である。17 は下総産の高台付坏である。高台は貼付けである。19 ～ 21 は内面黒色処理、ヘラ磨きが施される坏である。19 は外面にヘラ磨きが加えられているが、不規則でまばらである。底部外周のヘラケズリはヘラ磨きを切って施されている。底面はヘラケズリである。角閃石、片岩を含み利根川流域産と考えられる。20 は底部外周ヘラケズリ、底面周辺ヘラケズリである。下総産である。22 の皿は内面にヘラ磨きが施されている。下総産である。23 の皿は角閃石、片岩を含み利根川流域産と考えられる。

24 は金雲母を多量に含む新治窯産の須恵器甕である。口縁部内面ヘラナデ、胴部外面平行タタキが施されている。胴部内面はヘラナデによって非常に平滑に仕上げられている。25 は新治窯産

第４表　第３号住居跡出土遺物観察表（第 14・15 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	碗	(13.0)	3.8	－	ＩＫ	10	良好	灰白	尾北窯	18-5
2	灰釉陶器	鉢	－	2.7	(4.5)	ＡＩＫ	20	良好	灰白	尾北窯	8-1
3	灰釉陶器	壺	－	8.8	－	ＩＫ	5	普通	灰白	尾北窯	19-1
4	須恵器	坏	(13.2)	3.5	7.0	ＡＢＣＥＩＫ	70	普通	灰	末野	8-2
5	須恵器	坏	(11.0)	3.5	(6.0)	ＩＫ	15	良好	灰	東金子　№５	8-3
6	須恵器	坏	(12.0)	3.3	(6.8)	ＩＫ	25	普通	灰	東金子　I-3G 東	8-4
7	須恵器	坏	－	1.7	5.6	ＩＪＫ	90	良好	灰	南比企	
8	須恵器	坏	(10.9)	2.9	－	ＡＩＪＫ	25	良好	灰	南比企　鳩山Ⅷ　西トレンチ	18-5
9	須恵器	坏	(12.0)	3.7	－	ＥＨＩＪ	15	普通	灰	南比企　鳩山Ⅷ　I-３Ｇ東	18-5
10	須恵器	高台付埦	－	2.5	(18.4)	ＥＩＪＫ	20	良好	灰	南比企　鳩山Ⅷ　№21	19-1
11	須恵器	Ⅲ	(16.0)	2.1	－	ＡＥＩＫ	15	良好	灰	末野　I-３Ｇ東	18-5
12	ロクロ土師	坏	(12.0)	4.8	6.6	ＡＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	下総　外面墨書「兀」　№55・69	8-5
13	ロクロ土師	坏	(13.0)	4.35	(7.3)	ＡＣＥＨＩＫ	30	良好	にぶい橙	下総　№48	8-6
14	ロクロ土師	坏	(14.0)	3.5	－	ＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	下総　№24	18-5
15	ロクロ土師	坏	(14.0)	3.6	－	ＨＩＫ	15	普通	灰褐	下総　外面煤付着　№50	18-5
16	ロクロ土師	坏	－	1.4	8.4	ＡＣＨＩＫ	85	良好	浅黄橙	下総　№３	
17	ロクロ土師	高台付坏	－	2.0	(8.6)	ＡＨＩＫ	40	良好	橙	下総　№13	19-1
18	ロクロ土師	坏	－	1.6	6.0	ＡＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	下総　№38	
19	ロクロ土師	坏	(15.0)	4.5	(7.0)	ＡＢＨＩＪＫ	10	良好	にぶい褐	利根川流域　内面黒色　№65	
20	ロクロ土師	坏	14.4	4.4	7.6	ＡＣＥＨＩＪＫ	80	普通	橙	下総　内面黒色　№66	8-7
21	ロクロ土師	坏	(17.0)	3.0	－	ＡＨＩＫ	10	普通	浅黄橙	下総　内面黒色　№34	18-5
22	ロクロ土師	Ⅲ	(14.6)	1.6	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	下総	19-1
23	ロクロ土師	Ⅲ	(14.0)	1.3	－	ＡＨＩＫ	20	良好	橙	利根川流域　酸化焔	18-5
24	須恵器	甕	－	8.7	－	ＡＥＨＩＫ	20	良好	にぶい黄橙	新治　№49	19-1
25	須恵器	甕	－	2.1	(13.6)	ＡＥＩＫ	30	良好	灰白	新治　平安時代　№40	19-1
26	須恵器	甑	(22.0)	2.3	－	ＩＫ	10	普通	灰	南比企	19-1
27	須恵器	甕	－	5.1	(16.0)	ＡＥＩＪＫ	5	良好	黄灰	南比企　転用　№33	8-8
28	ロクロ土師	甑	(29.0)	3.2	－	ＡＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	下総	19-1
29	土師器	甕	19.4	16.2	－	ＡＣＨＩＫ	50	普通	橙	№14・27・29　I-３Ｇと接合	8-9
30	土師器	甕	(23.0)	5.5	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	利根川流域	18-5
31	土師器	小型甕	12.0	6.2	－	ＣＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	内外面煤付着	9-1
32	土師器	甕	(20.0)	6.0	－	ＡＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№16　I-３Ｇ東	9-2
33	土師器	小型甕	(12.0)	3.2	－	ＡＨＩＫ	20	普通	灰褐	№45	19-1
34	土師器	甕	(20.0)	5.4	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	カマド	18-5
35	土師器	甕	(18.6)	5.6	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	橙	I-３Ｇ東	18-5
36	土師器	小型甕	(9.0)	5.8	－	ＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№62	18-5
37	土師器	甕	(19.1)	4.4	－	ＡＣＩＫ	15	普通	明赤褐	№47	18-5
38	土師器	甕	(20.0)	3.6	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	明赤褐		18-5
39	土師器	甕	(10.0)	3.0	－	ＣＨＩＫ	15	普通	にぶい赤褐		18-5
40	土師器	甕	(20.1)	5.4	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	橙	I-３Ｇ東	19-1
41	土師器	甕	－	4.0	－	ＡＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	西トレンチ	
42	土師器	甕	(19.1)	4.1	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	明赤褐	内面煤付着　№43	18-5
43	土師器	甕	－	3.7	7.8	ＡＥＨＩＫ	60	普通	灰褐	利根川流域　内外面煤付着　西トレンチ	9-3
44	土師器	甕	－	1.9	(7.0)	ＡＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	下総　底面煤付着	
45	土師器	甕	－	5.2	4.1	ＡＨＩＫ	70	普通	にぶい赤褐	利根川流域　内外面煤付着　№52	9-4
46	土師器	甕	－	4.2	(4.4)	ＡＣＨＩＫ	40	普通	にぶい褐	利根川流域　内外面煤付着	9-5
47	土師器	台付甕	－	4.4	(8.5)	ＡＨＩＫ	70	普通	橙		9-6
48	土師器	甕	(13.0)	1.4	－	ＡＣＩＫ	10	普通	橙	内外面2次加熱赤変　内面煤付着　I-3G 東	19-1
49	土製品	土錘	長さ 3.1 ㎝　径 1.4 ㎝　孔径 0.5 ㎝　重さ 3.7 ｇ　残存 60%						浅黄橙	下総　I-３Ｇ東	

の甕底部で、外周ヘラケズリ、底面無調整である。26は南比企産の須恵器甑である。口縁端部横ナデ、その下位は外面平行タタキ、内面ヘラナデが施されている。27は南比企産の須恵器甕底部である。砥具として転用されている。ごく薄い高台が貼付されている。外周ヘラケズリ、底面はナデである。28はロクロ土師器の甑である。口縁端部は複合口縁状で横ナデ、下段は外面平行タタキ、内面ヘラナデである。下総産である。

29～46は土師器甕である。小型の31は屈曲が緩やかだが、その他は典型的なコの字甕である。30・42には粘土の積み上げ単位が開裂状に認められる。口縁端部が弱く摘み上げられる30は胎土に雲母、角閃石を多く含み、利根川流域産と考えられる。37は口縁部下段に指オサエの痕跡が明瞭である。38は横ナデが不明瞭である。この２点の他は、口縁部の下段はいずれもヘラケズリ後横ナデである。43～46は甕の底部である。いずれも内外面に煤が付着する。外面全体ヘラケズリである。43はやや大型で、内面の凹凸が著しい。底部外周はヘラケズリ、底面は無調整である。雲母を多く含み、利根川流域産である。44はやや大型で、底面無調整である。下総産である。45・46は小型で外面全体にヘラケズリが施されている。雲母、角閃石を多く含む。利根川流域産である47は土師器台付甕の脚台部である。外面横ナデ、内面ヘラナデが施されている。48は土師器甕としたが、壺の可能性がある。内外面２次被熱により、赤変し内面に煤が付着する。49は土錘である。半分を欠失する。風化著しい。下総産である。

第４号住居跡（第16～18図）

調査区中央西側のＨ・Ｉ－３グリッドに位置する。遺構確認時に重複する第43号土壙を検出し、先行して調査した。第３号住居跡が南側に接しており、前述のように本住居跡が先行する。

平面形態は整った横長の長方形で、各辺とも直線的であり、コーナーはほぼ直角である。

カマドを通る住居跡の中軸線の軸方向はＮ－17°－Ｅである。規模は長軸4.50ｍ、短軸3.60ｍである。深さは遺存の良い東側で0.35ｍである。

覆土は焼土、炭化物を含む灰黄褐色土、黒褐色土、灰褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

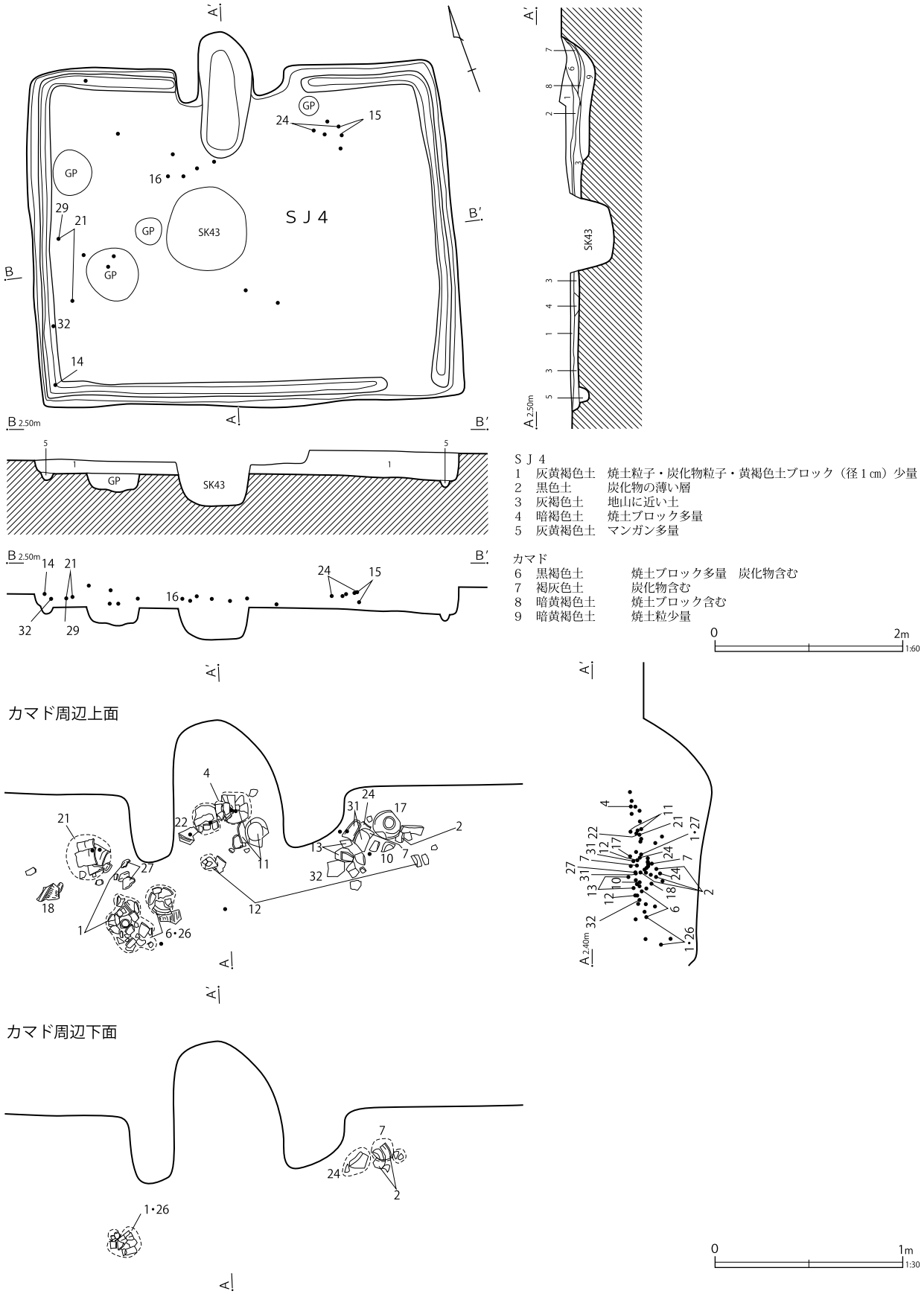
カマドは北壁のほぼ中央に設けられていた。規模は全長1.34ｍ、幅0.60ｍである。燃焼部は壁の外側に突出し、煙道は検出されていない。焚口部から燃焼部は土壙状に掘り窪められ、暗黄褐色土が充填され、その上面が火床面となっている。奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁は部分的に焼土化し、火床面は燃焼部の中央付近が良く焼けていた。覆土はあまり明瞭でないが６～８層が天井の崩落土と考えられる。袖は黄褐色粘土の貼り付けにより造られていた。支脚がカマドの外から出土していることから、カマドは住居廃絶時に取り壊した可能性が考えられる。

床面には幅0.08～0.17ｍ、深さ0.05～0.10ｍの壁周溝が設けられていた。南東隅が開口するほかは全周し、南側が深くなっている。

遺物はカマドとその周囲、北東コーナー手前、西壁沿いの３箇所から出土した。カマド周辺には最も多く遺物が集中している。確認面から上層にかけて集中することから、カマドとの関係は今一つ明確でない。袖の右側から支脚と置きカマドが出土しているがやはり上層からの出土である。他の２箇所も中～上層の出土である。

出土遺物の器種は、平安時代の須恵器坏、高台付坏、皿、ロクロ土師器坏、高台付埦、皿、甑、土師器坏、甕、棒状土製品、土製支脚、刀子、棒状鉄製品である。

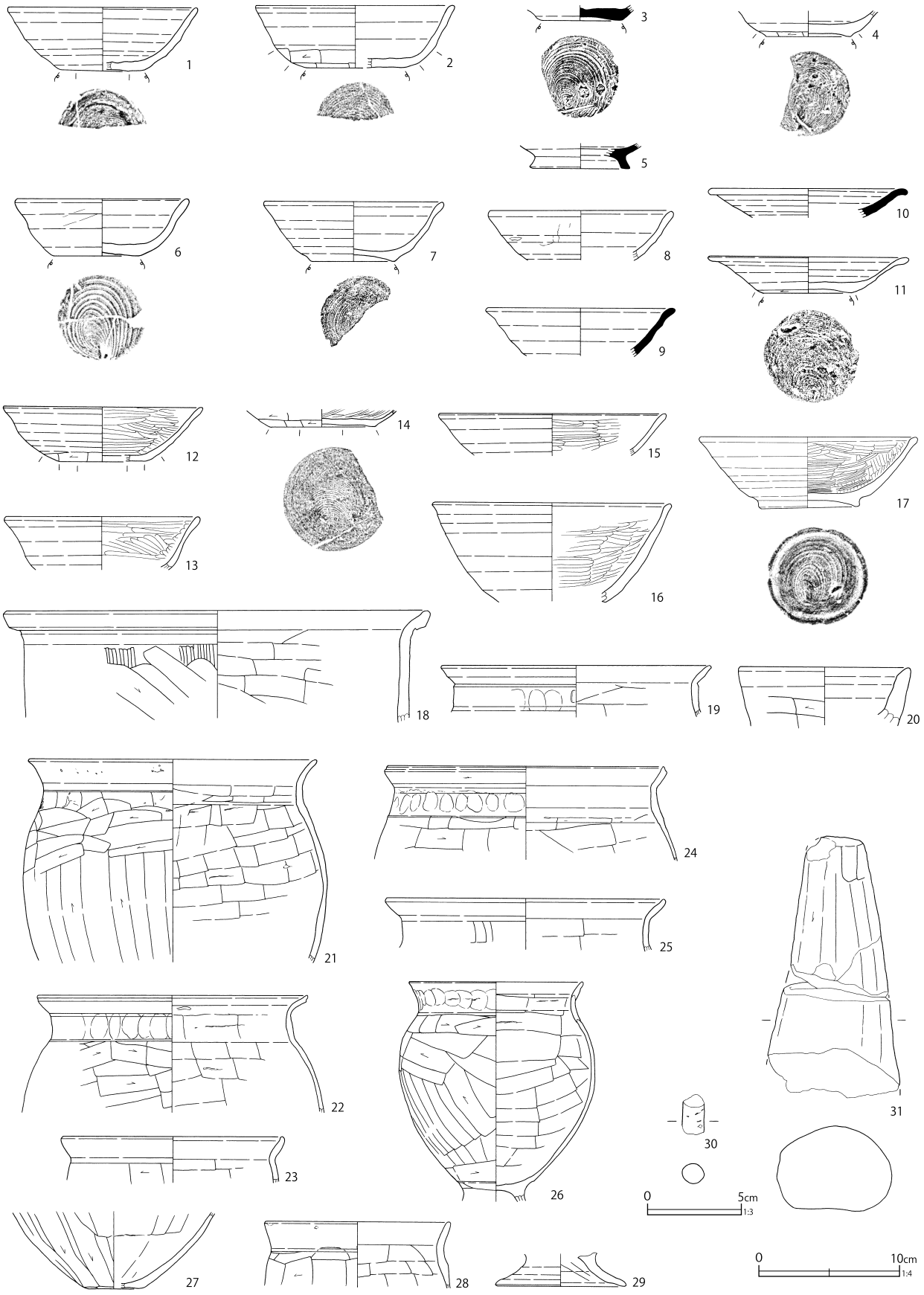
３・５・９・10は須恵器である。３・５は南比企窯跡産、10は末野窯跡産である。９はロクロナデが明瞭である。産地は不明である。10は内面が平滑で、硯などに転用された可能性がある。



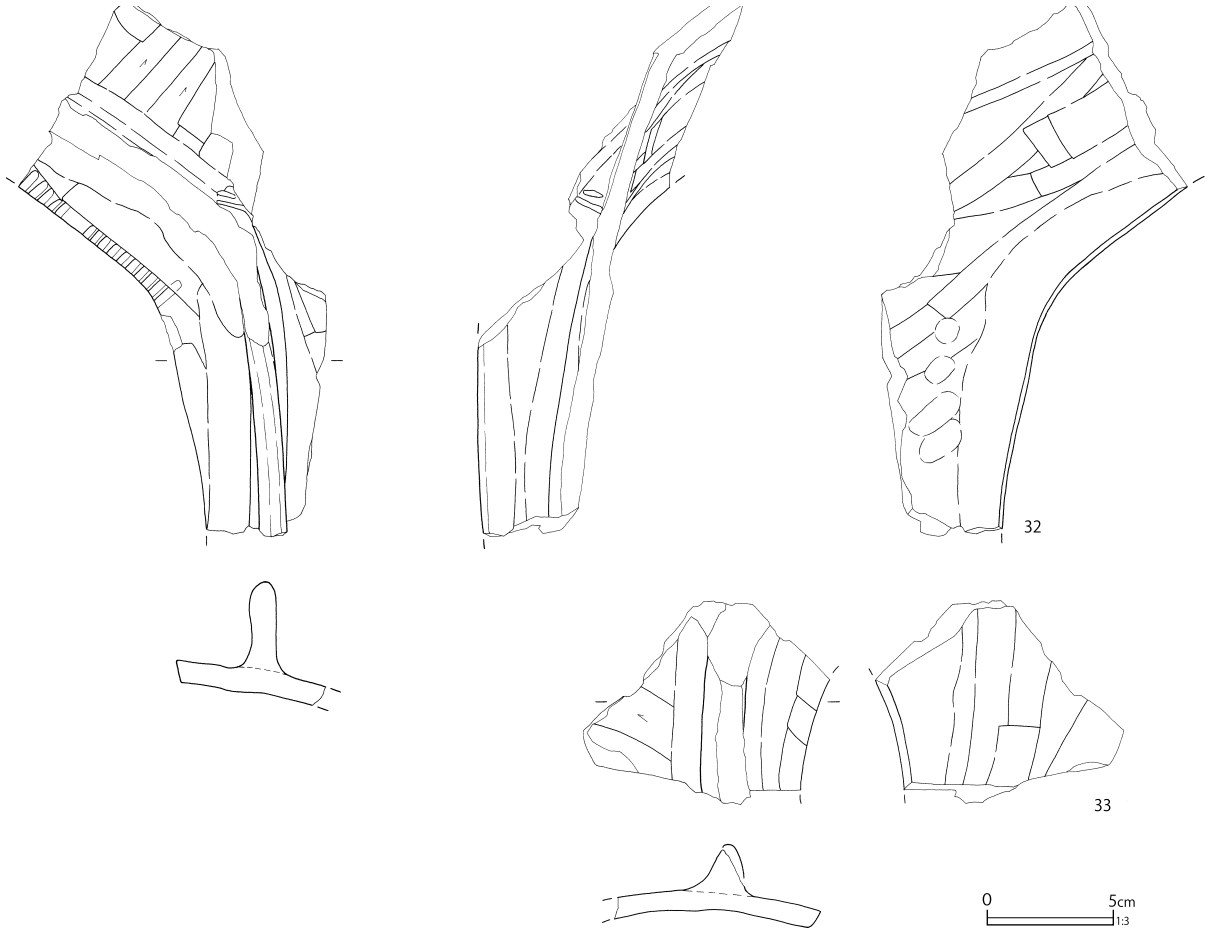
ＳＪ４
1　灰黄褐色土　焼土粒子・炭化物粒子・黄褐色土ブロック（径１㎝）少量
2　黒色土　炭化物の薄い層
3　灰褐色土　地山に近い土
4　暗褐色土　焼土ブロック多量
5　灰黄褐色土　マンガン多量

カマド
6　黒褐色土　焼土ブロック多量　炭化物含む
7　褐灰色土　炭化物含む
8　暗黄褐色土　焼土ブロック含む
9　暗黄褐色土　焼土粒少量

第 16 図　第 4 号住居跡



第 17 図　第 4 号住居跡出土遺物（1）



第 18 図　第 4 号住居跡出土遺物（2）

これらを除く 1 ～ 18 はロクロ土師器である。1・2 は角閃石を多く含み利根川流域産と考えられる。底部外周ヘラケズリ、底面は 1 が回転糸切り、2 は周辺ヘラケズリである。4・6 ～ 8 は内面にヘラ磨きが施されない下総産の坏である。8 は外面に粘土の捩れが多く見られる。4 は底部外周ヘラケズリである。底面はいずれも回転糸切りである。周辺ヘラケズリ後ナデが加えられている。12 ～ 15 は内面黒色処理、ヘラ磨きが施される坏、16 は同様の処理がされている埦、17 は高台付埦である。12・14 は底部外周ヘラケズリが施されている。底面は周辺ヘラケズリである。13 は色調が他と異なり、褐色を呈している。17 は口縁部の歪みが大きい。15 は角閃石を多く含み利根川流域産、その他は下総産である。11 の皿は内外面に黒斑が見られる。胎土は酸化鉄が多く、片岩を含むことから利根川流域産と考えられる。底面は回転糸切りである。18 は甑である。複合口縁を呈する。胴部外面は平行タタキ後ヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。

19 ～ 29 は土師器で 20 は分厚いコップ形を呈する坏である。底部外周ヘラケズリである。19・21 ～ 25・28 は甕の口縁部と上半である。いずれも煤が付着している。口縁部のコの字の屈曲はやや弱めである。下段には、ヘラケズリや指オサエが明瞭に認められる。特に 21・28 は胴部との境が不明瞭でコの字を呈しておらず、特徴的である。胎土に雲母、角閃石を多く含み、利根川流域産と考えられる 19・22・24 は指頭圧痕が明瞭である。27 は甕底部で、底面は無調整である。26・29 は台付甕である。26 はごく薄く仕上げられている。27 は内外面横ナデが施されている、内面煤付着、

第５表　第４号住居跡出土遺物観察表（第 17・18 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	坏	(13.4)	4.5	(6.0)	ＡＨＩＫ	45	普通	にぶい黄橙	利根川流域　№32･34･80	9-7
2	ロクロ土師	坏	(14.2)	4.3	－	Ｉ	40	普通	にぶい褐	利根川流域　内外面煤付着　№65･73･74	9-8
3	須恵器	坏	－	1.1	6.0	ＡＪＫ	75	良好	黄灰	南比企	
4	ロクロ土師	坏	－	1.8	6.0	ＡＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	下総　№43	
5	須恵器	高台付埦	－	1.8	(7.1)	ＡＣＩＪＫ	20	良好	灰	南比企　西トレンチ	19-2
6	ロクロ土師	坏	(12.0)	4.0	6.1	ＡＥＨＩＫ	75	普通	にぶい黄橙	下総　№34･35	9-9
7	ロクロ土師	坏	(12.6)	4.2	(5.8)	ＡＣＥＩＫ	45	普通	浅黄橙	下総　№61･75	9-10
8	ロクロ土師	坏	(12.8)	3.5	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	下総　西トレンチ	19-2
9	須恵器	坏	(13.0)	3.4	－	ＡＨＩＫ	30	普通	灰白	西トレンチ	19-2
10	須恵器	皿	(13.5)	2.0	－	ＣＥＩＪ	20	良好	灰白	末野　№64	19-2
11	ロクロ土師	皿	14.0	2.6	6.2	ＡＥＨＩＫ	85	普通	浅黄橙	利根川流域　黒斑　№47･48	10-1
12	ロクロ土師	坏	(14.0)	3.7	－	ＡＨＩＪＫ	65	普通	にぶい褐	下総　内面黒色　№39･68　SK34	10-2
13	ロクロ土師	坏	13.6	3.7	－	ＡＣＩＪＫ	50	良好	にぶい赤褐	下総　内面黒色　№54・55	10-3
14	ロクロ土師	坏	－	1.2	7.4	ＡＣＥＨＩＪ	70	普通	褐灰	下総　内面黒色　№３	
15	ロクロ土師	坏	(16.0)	3.0	－	ＡＣＨＩ	10	普通	にぶい橙	利根川流域　内面黒色　№19･20	19-2
16	ロクロ土師	埦	(16.6)	7.0	－	ＡＣＥＨＩＪＫ	30	普通	にぶい黄橙	下総　内面黒色　№13	19-2
17	ロクロ土師	高台付埦	15.2	5.1	7.2	ＣＥＨＩＪＫ	70	良好	にぶい黄橙	下総　内面黒色　№62	10-4
18	ロクロ土師	甑	(50.0)	8.0	－	ＡＨＩＪＫ	5	普通	橙	下総　№24	19-2
19	土師器	甕	(19.0)	3.6	－	ＡＣＨＩＪＫ	10	普通	橙	内面煤付着　西トレンチ	19-2
20	土師器	坏	(12.0)	4.1	－	ＡＥＨＩＪＫ	15	普通	にぶい橙	利根川水系の土か	19-2
21	土師器	甕	20.2	14.3	－	ＣＨＩＪＫ	50	普通	にぶい黄橙	利根川流域　煤付着　№５･９･28	10-6
22	土師器	甕	(19.1)	8.2	－	ＡＣＥＨＩ	30	普通	にぶい橙	利根川流域　煤付着　№41　カマド	10-5
23	土師器	甕	(15.6)	3.3	－	ＡＢＥＩＫ	15	普通	橙	煤付着　西トレンチ	19-2
24	土師器	甕	(19.4)	6.6	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい褐	利根川流域　煤付着　№17･20･71･72	10-8
25	土師器	甕	(19.7)	3.7	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	灰黄褐	下総　外面煤付着　№34	19-2
26	土師器	台付甕	12.3	15.6	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	下総　№34･35･80	10-7
27	土師器	甕	－	5.3	(4.3)	ＣＨＩＪ	30	普通	灰褐	内面焦げ　№32･33	
28	土師器	小型甕	(13.0)	4.6	－	ＣＨＩ	40	不良	にぶい黄橙	利根川流域	11-1
29	土師器	台付甕	－	2.3	(9.3)	ＡＫ	40	良好	にぶい橙	下総　内面煤付着　赤変　№９	11-2
30	土製品	不明	長さ[2.1]cm　径 1.2×1.1 cm　重さ 4.0 g　残存 80%						浅黄橙		16-2
31	土製品	支脚	長さ 18.5 cm　幅 9.4 cm　厚さ 6.0 cm　重さ 709.2 g						浅黄橙	№57･58	11-3
32	土製品	置きカマド	幅 12.1 cm　高さ 21.1 cm 厚さ 4.4 cm			ＡＨＩＪＫ	－	良好	にぶい橙	№４・49	22-2
33	土製品	置きカマド	幅9.7cm　高さ8.1cm 厚さ3.0cm			ＡＨＩＪＫ	－	良好	橙		22-2

赤変している。

30 は棒状の土製品である。両端が欠損している。風化著しい。

31 は支脚である。下端が欠失している。全体にヘラケズリが施され、風化が進んでいる。

32・33 は置きカマドである。これ以外にも同一個体と考えられる破片が第 12 号溝跡、Ｈ－３グリッドから出土している。いずれも調整､胎土､色調が共通しており、同一個体の可能性がある。32 は焚口部上位の破片である。残存高 21.1cm である。鍔は上方の部分が欠失しており、横の直立する部分のみが遺存していた。最大で 3.2cm 張り出している。器面の基本的な調整は平行タタキ後ヘラケズリで、その上にナデによって鍔を貼付している。内面はヘラナデである。鍔を圧着する際の指頭圧痕が観察できる。33 は焚口部横の直立する部分の破片である。残存高 8.1cm である。器面の調整は 32 同様である。褐色を呈する土師質で、下総産と考えられる。

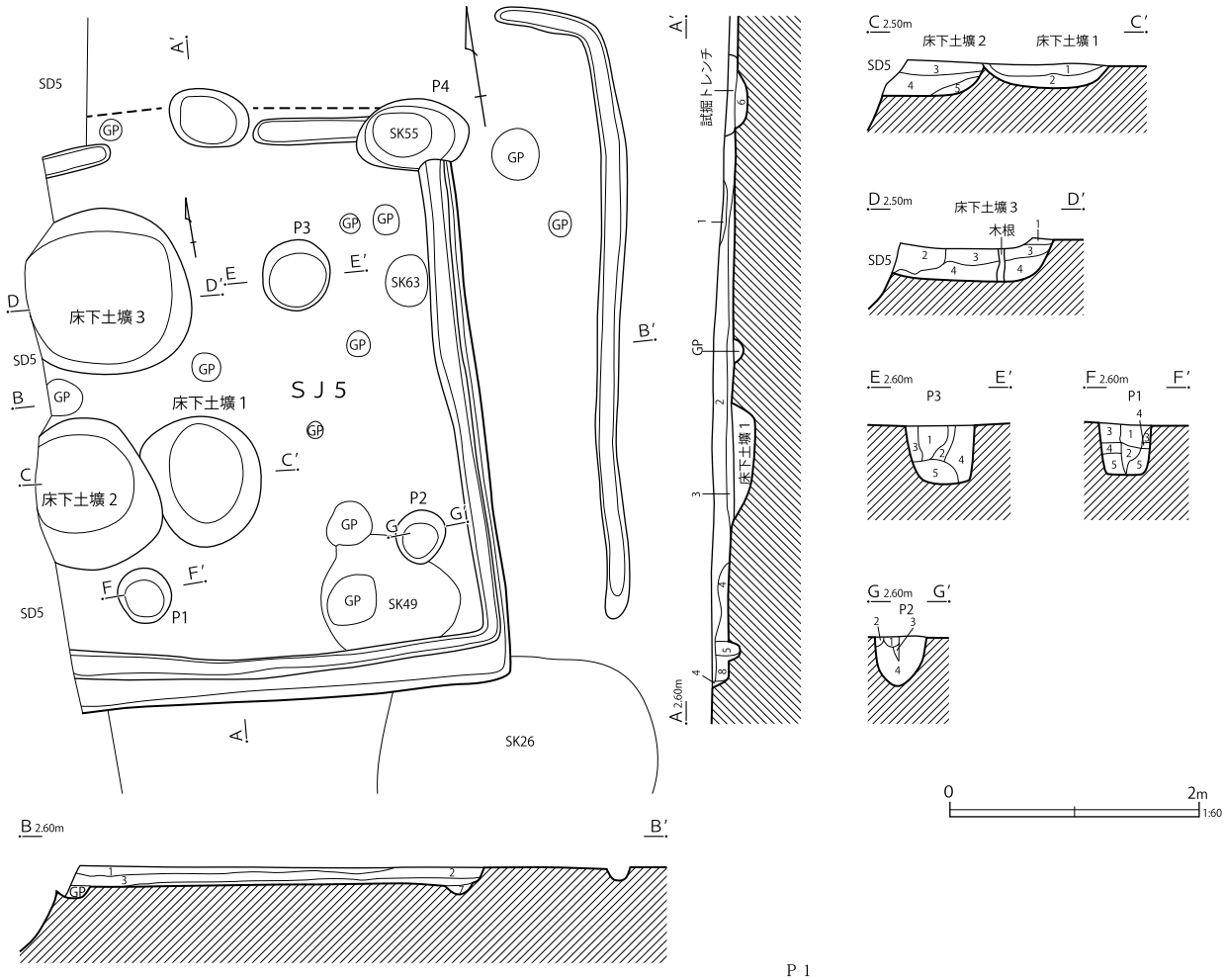
第５号住居跡（第 19・20 図）

調査区ほぼ中央のＨ・Ｉ－４グリッドに位置する。遺構の西側を中世の第５号溝跡に大きく壊さ

れている。第26号土壙は壁周溝が上端を切っており、本住居跡が後出すると考えられる。東壁の１ｍほど東側に壁周溝のみが掘り込まれていることから、本住居跡は建て替えられたものと考えられる。

平面形態は整った方形で、各辺とも直線的であり、コーナーはほぼ直角である。

カマドを通る住居跡の中軸線の軸方向はＮ－３°－Ｅである。規模は長軸4.60ｍ、短軸は計測可能な範囲で3.60ｍである。深さは遺存の良い



ＳＪ５
1　灰黄褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性やや強い
2　灰黄褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　マンガン少量　しまりあり　粘性強い
3　灰黄褐色土　　黒褐色の炭化物層を薄く含む　マンガン少量　しまりあり　粘性強い
4　暗黄褐色土　　マンガン多量　しまりあり　粘性強い
5　灰黄褐色土　　マンガン多量　しまりあり　粘性強い
6　灰黄褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い　カマドの掘り方
7　灰黄褐色土　　マンガン多量　しまりあり　粘性強い
8　暗黄褐色土　　マンガン非常に多量　しまりあり　粘性弱い

床下土壙１・２
1　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物非常に多量　しまりあり　粘性弱い
2　暗黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量 マンガン多量　しまりあり　粘性やや強い
3　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物非常に多量　しまりあり　粘性弱い
4　暗黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物・マンガン多量　硬質　しまりあり　粘性弱い
5　暗黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　マンガン多量　しまりあり　粘性やや強い

床下土壙３
1　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物非常に多量　しまりあり　粘性弱い
2　暗褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物・マンガン多量　硬質　しまりあり　粘性弱い
3　暗黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　マンガン多量　硬質　しまりあり　粘性弱い
4　暗黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　マンガン多量　硬質　しまりあり　粘性やや強い

Ｐ１
1　暗褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）少量　マンガン多量　硬い　しまりあり　粘性強い
2　黒褐色土　　マンガン層　焼土粒（径１～５㎜）少量　硬い　しまりあり　粘性強い
3　灰褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）少量　しまりあり　粘性強い
4　黒褐色土　　マンガン層　硬い　しまりあり　粘性強い
5　にぶい褐色土　マンガン少量　しまりあり　粘性強い

Ｐ２
1　黒褐色土　　マンガン多量　しまりあり　粘性やや強い
2　暗褐色土　　しまりあり　粘性やや強い
3　暗褐色土　　マンガン多量　しまりあり　粘性やや強い
4　暗褐色土　　マンガン・焼土多量　しまりあり　粘性やや強い

Ｐ３
1　黒褐色土　　マンガン多量　焼土少量　しまりあり　粘性やや強い
2　暗褐色土　　マンガン多量　しまりあり　粘性やや強い
3　黒褐色土　　マンガン多量　しまりあり　粘性やや強い
4　極暗褐色土　焼土少量
5　黒褐色土　　マンガン多量　しまりあり　粘性やや強い

第19図　第５号住居跡

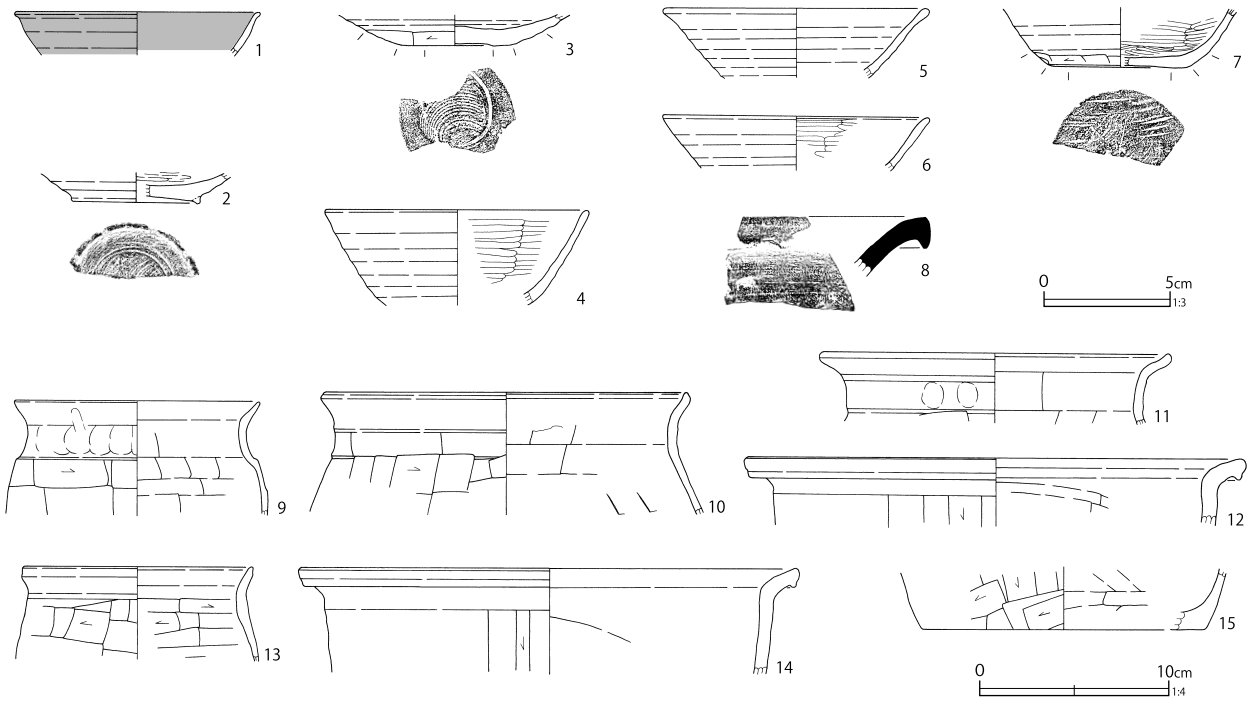
東側で0.20 mである。

覆土は焼土、炭化物を含む灰黄褐色土、暗黄褐色土で、自然堆積と考えられる。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられていた。長径0.70 m、短径0.50 mの燃焼部を土壙状に検出できたのみである。火床面は確認できなかった。覆土はあまり明瞭でないが６層が掘り方と考えられる。袖は検出できなかった。

床面には床下土壙３基と柱穴３基、壁周溝が設けられていた。

床下土壙１～３は第60～62号土壙として調査したもので、床面精査時に検出された。規模は１～３の順で、径1.04 m、1.20 m、1.30 m、深さは0.20 m、0.27 m、0.32 mである。いずれも灰黄褐色土と暗黄褐色土を主体とする覆土である。遺物が多く、いずれも破片だが灰釉陶器碗、



第20図　第５号住居跡出土遺物

第６表　第５号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	碗	(12.7)	2.3	－	ＩＫ	15	良好	灰白	浜北窯　SK61	23-1
2	ロクロ土師	高台付埦	－	1.6	(6.8)	ＡＥＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	下総	19-3
3	ロクロ土師	坏	－	1.6	(6.0)	ＨＩ	35	普通	にぶい橙	下総	19-3
4	ロクロ土師	坏	(13.8)	5.0	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	下総　内面黒色	19-3
5	ロクロ土師	埦	(13.5)	3.6	－	ＡＥＨＩＪＫ	20	普通	にぶい橙	利根川流域	19-3
6	ロクロ土師	坏	(14.0)	2.7	－	ＡＨＩ	10	普通	にぶい橙	下総　内面黒色	19-3
7	ロクロ土師	坏	－	3.1	(7.4)	ＡＣＨＩ	30	普通	にぶい黄橙	下総　内面黒色	
8	須恵器	甕	－	2.3	－	ＥＩＪＫ	5	良好	灰	南比企	19-3
9	土師器	甕	(12.8)	6.0	－	ＡＢＥＨＫ	20	普通	橙	利根川流域　内外面２次加熱・煤付着	19-3
10	土師器	甕	(19.1)	6.4	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	橙	利根川流域　煤付着	19-3
11	土師器	甕	(18.3)	3.8	－	ＡＣＨＩＪＫ	10	普通	橙	下総　内面煤付着	19-3
12	ロクロ土師	甑	(26.2)	3.5	－	ＣＥＨＪ	5	普通	にぶい橙	利根川流域　外面煤付着	19-3
13	土師器	甕	(12.0)	4.9	－	ＨＩ	15	普通	にぶい橙	下総　内外面２次加熱・煤付着　外面赤変	19-3
14	ロクロ土師	甑	(26.3)	5.5	－	ＡＣＥＨＪ	5	普通	にぶい橙	利根川流域　Ｐ１	19-3
15	ロクロ土師	甑	－	3.3	(14.9)	ＡＢＥＨＩＫ	10	普通	橙	利根川流域	11-4

須恵器坏、ロクロ土師器坏、埦、内面黒色処理坏、土師器甕が出土している。

柱穴はＰ１・２がほぼ同規模で、径 0.45 m、深さ 0.35 m、Ｐ３が径 0.65 m、深さ 0.40 mである。Ｐ１・２には柱痕が認められる。壁周溝は幅 0.12 ～ 0.22 m、深さ 0.04 ～ 0.09 mで、ほぼ全周する。外側の壁周溝は北東コーナーを囲むＬ字形で、幅 0.14 ～ 0.21 m、深さ 0.04 ～ 0.12 mである。

遺物は灰釉陶器碗、須恵器甕、ロクロ土師器高台付埦、坏、甑、延べ板状鉄製品が覆土中から出土している。

１は灰釉陶器の碗である。刷毛塗りにより施釉されている。浜北窯産、黒笹 90 号段階である。

２～７はロクロ土師器である。２は低平な高台が付く高台付埦である。底面周辺ヘラケズリ、下総産である。３・４・６・７は下総産の坏である。５は器形、色調が異なり利根川流域で生産された可能性がある。３・７は底部外周ヘラケズリ、底面は周辺ヘラケズリである。６・７は内面黒色処理、ヘラ磨きが施されている。８は南比企産の須恵器甕である。上端が強くナデつけられている。

９～ 11・13 は土師器甕である。いずれも煤が付着し、13 は赤変している。小型の 13 は屈曲が緩やかで、口縁部と胴部の境が不明瞭だが、その他は典型的なコの字甕である。下段は指オサエ、ヘラケズリ後強く横ナデが施されている。10 は胎土に片岩を含み、利根川流域産と考えられる。

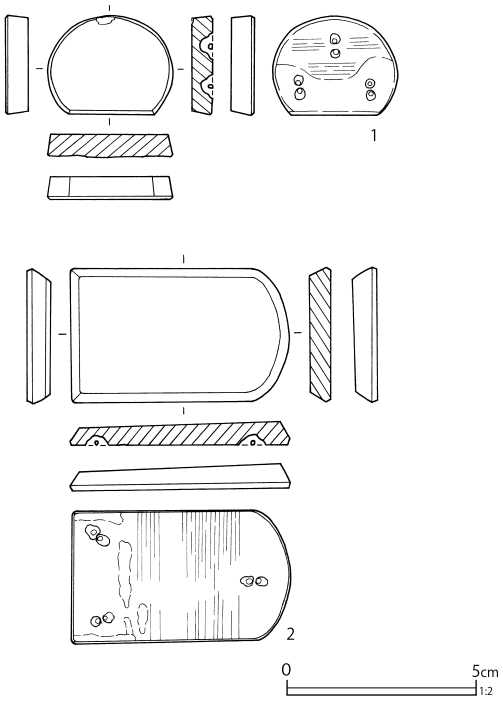
12・14・15 はロクロ土師器の甑である。いずれも胎土に角閃石を多く含み利根川流域産と考えられる。12・14 は複合口縁を呈する。胴部外面は平行タタキ後ヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。15 は底部の破片で、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。底面は無調整である。

住居跡出土石製品（第 21 図）

住居跡からは所謂石帯、丸鞆と鉈尾が出土している。１は蛇紋岩製の丸鞆である。垂孔がなく、革帯との接合のための潜り穴が ３ 対認められる。鋸によって切断され、裏面下半は更に研磨によって厚みが調整されている。裏面側は側縁が面取りされている。２は蛇紋岩製の鉈尾である。左側がやや薄く、右側へ向かって厚くなっている。垂孔がなく、革帯との接合のための潜り穴が ３ 対認められる。鋸によって切断され、裏面には切断痕が残る。裏面側は側縁が面取りされている。使用による剥離が認められる。

住居跡出土鉄製品（第 22 図）

１・11・12 は刀子である。いずれも刃部から茎にかけての破片で、両関である。いずれも刃関

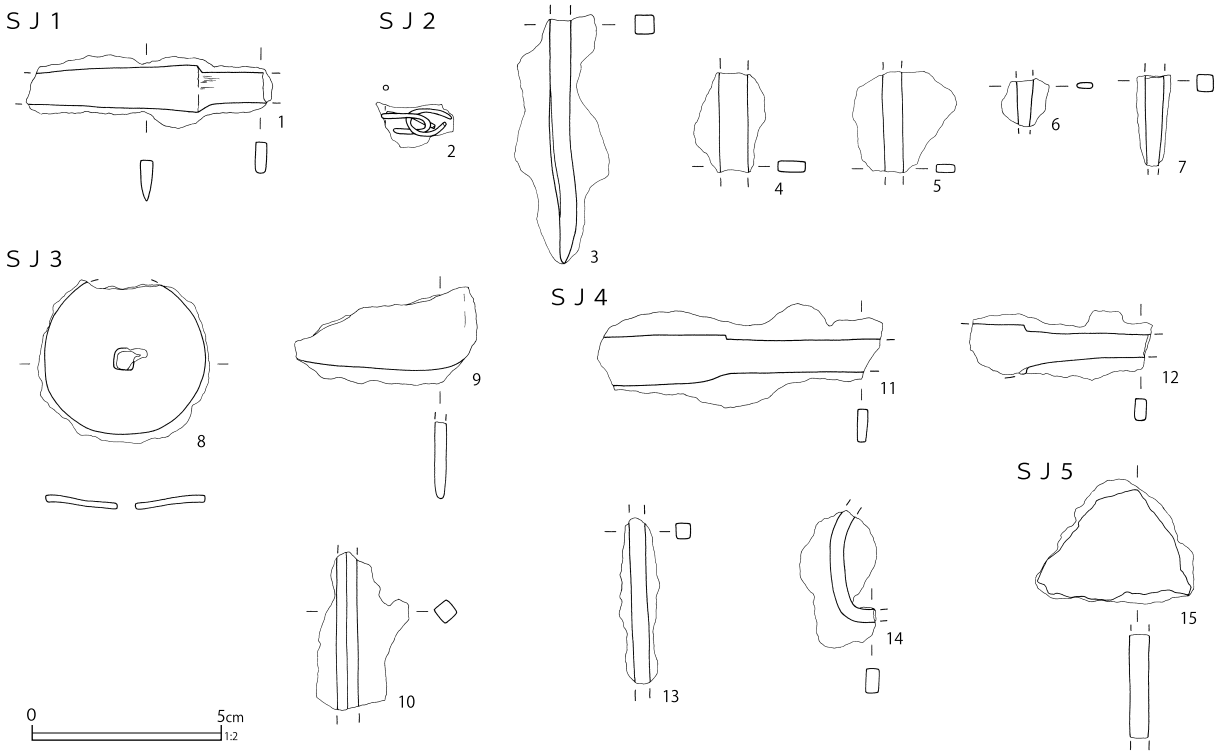


第 21 図　住居跡出土石製品

第７表　住居跡出土石製品観察表（第 21 図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
1	丸鞆	蛇紋岩	2.6	3.3	0.6	10.2	SJ２　№89	16-３
2	鉈尾	蛇紋岩	5.7	3.5	0.6	25.7	SJ３　№ 1	16-1

はなだらかで背関は段を持っている。１は木質が若干遺存している。２は鎖である。径 １mm ほどで断面が丸い。何らかの部品と考えられるが性格は不明である。３は釘である。頭部、脚部を欠失し折れ曲がっている。４～７・10・13・14 は棒状品である。いずれも上下端を欠失している。14 は大きく曲げられている。断面形は、７・10・13 が方形、それ以外は長方形である。７は下部が細くなり、鉄鏃の可能性がある。８は紡錘車である。軸穴は縦横 ３mm ほどの方形である。９・15 は延べ板状品である。９は鎌の一部の可能性がある。



第 22 図　住居跡出土鉄製品

第８表　住居跡出土鉄製品観察表（第 22 図）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
1	刀子	[6.5]	1.1	0.4	14.0	SJ１	24-1
2	鎖	長さ 1.9 cm　幅 0.8 cm　径 0.1 cm			1.8	SJ２　№ 92	24-1
3	釘	[6.4]	0.5	0.5	19.5	SJ２　№ 35	24-1
4	棒状品	[2.6]	0.75	0.3	4.5	SJ２　№ 40	24-1
5	棒状品	[2.6]	0.5	0.2	10.4	SJ２　№ 40	24-1
6	棒状品	[1.1]	0.4	0.2	1.0	SJ２　№ 40	24-1
7	棒状品	[2.3]	0.45	0.5	1.7	SJ２　鉄鏃茎部？	24-1
8	紡錘車	径 4.25 cm		0.2	13.3	SJ３　№ ６	24-2
9	延べ板状品	[4.9]	1.9	0.3	12.2	SJ３　№ 20　鎌の一部か？	24-2
10	棒状品	[4.1]	0.5	0.5	8.1	SJ３　カマド	24-2
11	刀子	長さ [7.5] cm　刃幅 1.3 cm　背幅 0.3 cm			32.2	SJ４　西側トレンチ　H-３G	24-2
12	刀子	[4.8]	0.6	0.3	9.9	SJ４	24-2
13	棒状品	[4.4]	0.4	0.4	5.3	SJ４　西側トレンチ　H-３G	24-2
14	棒状品	[3.2]	0.6	0.4	11.3	SJ４　西側トレンチ　H-３G	24-2
15	延べ板状品	[2.7]	[4.0]	0.5	30.0	SJ５	24-2

２．土壙

（１）概要

土壙は調査区全体から 90 基検出した。特にＧ～Ｊ－３～５グリッドに集中している。内訳は古代が 62 基、中世 11 基、近世が３基、重複関係等から中近世と考えられるものが４基である。出土遺物がなく、覆土からも時期が判別できない 10 基を不明分とした。時期の区分は出土遺物と覆土の状態で判別した。検出位置、規模、長軸方向、重複関係、出土遺物については第９表に示した。

古代の土壙は調査区全体に分布し、９世紀代にほぼ限定される。Ｇ列からＪ列の間に集中し、住居跡、溝跡とともに規則的な配置が認められる。全体としては、Ｎ－ 20°－Ｅ、Ｎ－ 70°－Ｗの軸線に沿って並ぶ傾向が見られ、特にＨ～Ｊ－３～５グリッドではその傾向が強い。

基本的な平面形は円形もしくは楕円形だが、規模の大きなものには方形、長方形、溝状の形態を呈するものがある。規模は長軸 0.70 ～ 1.20 ｍ、深さは 0.20 ～ 0.40 ｍのものが大部分である。覆土は黒褐色土、黒色土、暗褐色土を基調に、地山由来の暗黄褐色土、灰黄褐色土を含む例が多い。概してしまりが良く、硬質である。

中世の土壙は北側にはほとんど分布がなく、大部分がＨ・Ｉ列に集中する。軸方位は古代の土壙と類似するものが多く、溝跡や井戸跡とともに一定の方向性が認められる。基本的な平面形は円形もしくは楕円形だが、溝状の形態の大型のものがある。規模は長軸 1.50 ～ 3.00 ｍ、深度は 0.30 ～ 0.60 ｍが多く、概して古代より大型である。覆土は暗褐色土、黒褐色土に地山由来の暗黄褐色土、灰黄褐色土を含む場合が多い。概してしまりが良く、粘性が強い。

近世の土壙は調査区の北半に分散している。円形もしくは楕円形で、軸方向は北西－南東方向と東西方向がある。規模は長軸 0.80 ～ 1.20 ｍ、深さは 0.40 ～ 1.00 ｍで、中世に比してやや小型である。覆土は暗褐色土を主体に、地山由来の暗黄褐色土、灰黄褐色土を含む例が多い。

以下、代表的な例について記す。

第５号土壙（第 23 図）

調査区の南側、Ｌ－３グリッドで検出した。覆土は焼土、炭化物粒子、黄褐色粘土を含む黒色土、暗黄灰色土、暗黄褐色土である。平安時代に帰属する。

第９号土壙（第 23 図）

調査区のほぼ中央西側、Ｊ－３グリッドで検出した。規模の大きな長方形である。覆土は焼土粒子を含む黒褐色土、暗褐色土である。平安時代に帰属する。

第 13・20 号土壙（第 23 図）

調査区のほぼ中央、Ｉ－３・４グリッドで検出した。第 20 号土壙の埋没後に第 13 号土壙が掘り込まれている。遺物は古代と中世のものが混在しており、遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。

第 16 号土壙（第 23 図）

調査区のほぼ中央、Ｉ－３グリッドで検出した。中世墓の第 18 号土壙に壊されている。土師質の内黒土器、土師器甕が出土している。

第 18 号土壙（第 23 図）

調査区のほぼ中央、Ｉ－３グリッドで検出した。平安時代の第 16 号土壙を壊して造られている。刀や古銭が出土しており、上層の粘土化した蓋板、粘土が貼付された棺座と考えられる第３層の存在と合わせて木棺墓と考えられる。

北宋銭の宣和通宝が蓋板の上から、第３層に落ち込む形で刀が出土している。

遺物は、龍泉窯系青磁碗、渥美焼大甕、常滑焼大甕、青磁碗が出土している。いずれも破片であり、明確に副葬品として位置付けるのは困難である。混入して平安時代のロクロ土師器坏、土師器

甕、台付甕が出土している。重複する第16号土壙の遺物である可能性が高い。

第19号土壙（第23図）

調査区のほぼ中央、Ｉ－３グリッドで検出した。中世の第12号溝跡埋没後に造られている。北宋銭の元豊通寶が出土しており、第18号土壙同様に粘土が貼付された棺座と考えられる第３層の存在から、木棺墓と考えられる。

北宋銭の元豊通宝が出土しており、副葬品の可能性がある。

遺物は、渥美焼大甕、常滑焼大甕の転用砥具が出土している。いずれも破片であり、明確に副葬品として位置付けるのは困難である。混入して平安時代の灰釉陶器長頸瓶、須恵器坏、甕、ロクロ土師器坏、砥石、軽石が出土している。重複する第12号溝跡の遺物と考えられる。

第23・24号土壙（第24図）

調査区のほぼ中央、Ｉ－４グリッドで検出した。第24号土壙が、暗褐色土、黒褐色土によって埋め戻された後に第23号土壙が造られている。第23号土壙の上層は、焼土粒、炭化物を多く含む黒褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土によって埋め戻されている。

遺物は両者を一括して取り上げてしまったが、平安時代から鎌倉時代に亘ることから、第24号土壙を平安時代、第23号土壙を鎌倉時代に帰属するとしたい。

第32・33号土壙（第24図）

調査区のほぼ中央、Ｊ・Ｋ－４グリッドで検出した。溝状に連結しており、一連の遺構と考えられる。第２号住居跡埋没後に掘り込まれているが、出土遺物が平安時代に限定されるため、比較的近い時期に掘り込まれたと考えられる。第30・31号土壙が北側に接しているが、平面形や覆土の様相が異なるため、一連の遺構ではないと考えられる。第33号土壙は北側に一段深い掘り込みが見られる。

覆土は炭化物、焼土粒子を含む暗褐色土、黒褐色土で、下層は黄褐色土をブロック状に含む。

本土壙は平安時代に帰属する。

第34～36号土壙（第24図）

調査区のほぼ中央、Ｉ・Ｊ－４グリッドで検出した。第32・33号土壙と同様に溝状に連結しており、一連の遺構と考えられる。第11・42号土壙が北側に接しているが、平面形や覆土の様相が異なるため、一連の遺構ではないと考えられる。

覆土は炭化物、焼土粒子を含む暗褐色土、黒褐色土で、下層は黄褐色土粒子を含む。

第37号土壙（第24図）

調査区のほぼ中央、Ｊ－２・３グリッドで検出した。古代の第10号溝跡埋没後に造られている。覆土は焼土、炭化物を多量に含む黒褐色土で、暗黄褐色土を挟み、最下層も黒褐色土である。完形のかわらけ、不明鉄製品が出土しており、覆土の状況と合わせて墓等の施設と考えられる。

遺物は、大型のかわらけ皿、須恵器坏、甕、甑、土師器甕、不明鉄製品が出土している。平安時代の遺物を除いて重複する第10号溝跡の遺物と考えられ、本土壙は古代の帰属とする。

第42号土壙（第24図）

調査区のほぼ中央、Ｉ－４グリッドで検出した。覆土は焼土粒子、炭化物を含む暗褐色土、灰黄褐色土である。規模はやや小型だが、ロクロ土師器坏、内面黒色処理坏、大型土錘等多量の遺物が出土している。

第50・100・101号土壙（第25図）

調査区のほぼ中央西側、Ｇ・Ｈ－３グリッドで検出した。第34～36号土壙と同様に溝状に連結しており、一連の遺構と考えられる。

覆土は炭化物、焼土粒子を含む暗褐色土、黒褐色土で、下層は灰黄褐色土である。

第53号土壙（第25図）

調査区のほぼ中央、Ｇ－３グリッドで検出した。第１号畠跡を壊して造られている。覆土は暗黄褐

色土、暗褐色土で自然堆積である。下層に刀と青磁碗が出土しているが、規模、覆土からは埋葬施設と断定し難い。

遺物は、同安窯系青磁碗、土師器甕、刀が出土している。青磁や土器はいずれも破片であり、明確に副葬品として位置付けるのは困難である。出土遺物から鎌倉時代に帰属すると考えられる。

第57号土壙（第25図）

調査区のほぼ中央西側、G・H－3グリッドで検出した。第1号畠跡を壊して造られている。覆土は炭化物、焼土粒を多く含む暗褐色土、黒褐色土で、下層は黄褐色土ブロックを多く含む。

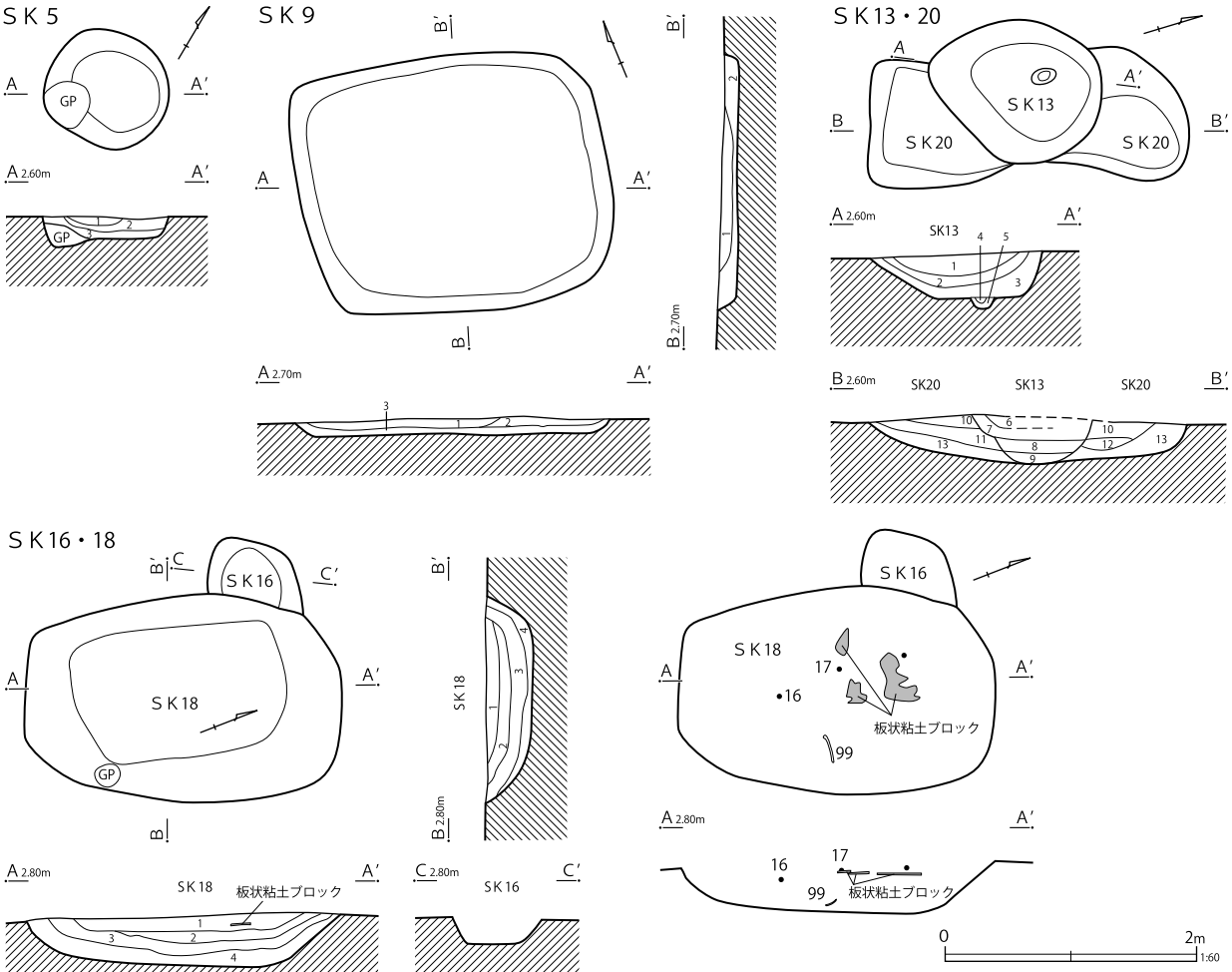
第9表　土壙一覧表（第23～26図）　　単位：m

遺構名	時期	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
1号土壙	不明	M－3	－	N－51°－E	0.62	0.43	0.18	逆台形	楕円形		
2号土壙	古代	L－3	SK8（新）	N－48°－E	0.54	0.36	0.13	皿形	楕円形		
3号土壙	古代	L－3	－	N－40°－E	0.33	0.32	0.05	皿形	円形	土師器甕　須恵器坏	
4号土壙	古代	L－3	－	N－11°－E	1.62	0.86	0.24	逆台形	隅丸長方形	土師器甕　須恵器坏・甕	
5号土壙	古代	L－3	L－3－P3（旧）	N－90°－E	0.96	0.86	0.19	逆台形	隅丸方形	土師器甕・台付甕　須恵器坏・甑・蓋・甕	
6号土壙	古代	L－3	－	N－9°－E	0.70	0.54	0.11	皿形	楕円形	土師器甕	
7号土壙	古代	L－3	L－3－P2（新）	N－3°－W	1.22	0.88	0.09	皿形	楕円形	須恵器坏・甕	
8号土壙	古代	L－3	SK2（旧）	N－11°－E	1.15	0.73	0.11	皿形	楕円形	土師器甕	
9号土壙	古代	J－3	－	N－73°－W	2.42	2.02	0.17	皿形	隅丸長方形	内黒坏　土師器甕	
10号土壙	古代	I－3	－	N-71°-W	1.80	0.88	0.37	逆台形	不整楕円形	土師器坏　須恵器坏・甕　鉄滓	
	古代						0.53				上端～Pitの深さ
11号土壙	古代	I･J－4	SK38（旧）	N－13°－E	1.44	0.70	0.12	皿形	隅丸長方形	須恵器坏　ロクロ土師坏	上面検出
12号土壙	古代	J－4	SD11（旧）	N－90°－E	1.60	0.84	0.20	箱形	隅丸長方形	須恵器坏　土師器甕　内黒坏	
13号土壙	中世	I－3・4	SK20（旧）	N－33°－E	0.90	1.13	0.34	箱形	不整形	ロクロ土師坏　須恵器甕　土師器甕　砥石	
14号土壙	古代	L－4	SD3・4（新）	N－4°－E	(0.92)	0.90	0.13	皿形か	楕円形	須恵器坏	
15号土壙	古代	M－3	SD1（新）	N－75°－E	0.95	0.88	0.37	逆台形	不整円形	土師器甕　ロクロ土師坏	
16号土壙	古代	I－3	SK18（新）	N－33°－E	0.74	(0.45)	0.19	逆台形	不整形	土師器甕　内黒坏	上面検出
17号土壙	古代	L－3	SD3（新）	N－82°－W	1.14	0.92	0.43		楕円形		
18号土壙	中世	I－3	SK16（旧）I－3－P12（新）　I－3－P2・8～10	N－21°－E	2.48	1.64	0.39	逆台形	隅丸長方形	青磁同安窯碗・龍泉窯碗　渥美大甕　常滑大甕　青白磁碗　ロクロ土師坏　須恵器坏・壺　土師器甕・台付甕　北宋銭　刀	蓋板あり　上面検出
19号土壙	中世	I－3	SD12	N－16°－E	3.23	2.20	0.47	逆台形	隅丸長方形	常滑大甕　渥美甕　灰釉長頸瓶　須恵器坏・甕　ロクロ土師坏　砥石　北宋銭　釘	
20号土壙	中世	I－3・4	SK13（新）	N－17°－E	2.52	1.02	0.33	逆台形	不整形	青白磁　灰釉碗　ロクロ土師坏　須恵器坏	

遺構名	時期	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
21号土壙	中世	I－４	－	N－84°－E	2.30	1.82	1.48		楕円形	青磁　渥美大甕　かわらけ皿　灰釉長頸瓶　土師器甕　須恵器甕　ロクロ土師坏　土錘	SE２
22号土壙	古代	I－４	－	N－43°－E	1.26	1.00	0.25	皿形	楕円形	灰釉皿　ロクロ土師坏　須恵器坏　土師器甕	
23号土壙	中世	I－４	SK24(旧) I－４－P３	N－75°－W	2.06	0.80	0.47	逆台形	楕円形	渥美大甕　青磁　須恵器坏・甕　内黒　灰釉土師器甕	
24号土壙	古代	I－４	SK23(新) I－４－P３	N－75°－W	2.74	1.30	0.23	逆台形	楕円形		
25号土壙	古代	G－４	－	N－14°－W	0.38	0.34	0.03	皿形	円形	内黒　須恵器甕　土師器甕	
26号土壙	古代	I－４	SJ５(新)	N－90°－E	2.22	1.68	0.39	皿形	不整形		
27号土壙	古代	I－４	SK54(旧)	N－24°－E	0.90	0.70	0.27	皿形	隅丸長方形	ロクロ土師(墨書)　須恵器坏・甕　土師器甕	上面検出
28号土壙	古代	I－４	－	N－13°－E	0.86	0.56	0.18	皿形	不整形	土師器甕	
29号土壙	古代	I－４	SD８(旧)	N－22°－E	1.00	0.70	0.13	皿形	隅丸長方形		
30号土壙	古代	J－４	SK31(旧)	N－15°－W	1.00	0.86	0.16	皿形	円形	土師器甕	
31号土壙	古代	J－４	SK30(新)	N－25°－E	0.96	0.90	0.16	皿形	円形	土師器甕	
32号土壙	古代	J－４	SK33（新） J－４－P11(新)	N－19°－E	1.47	0.74	0.27	皿形	楕円形	土師器甕　内黒	
33号土壙	古代	J･K－４	SJ２（旧） SK32（旧） J－４－P11(新)	N－27°－E	3.50	(1.00)	0.43	皿形	不整楕円形	須恵器甕　土師器甕	北側掘り込みあり
34号土壙	古代	I･J－４	SK35（新）	N－75°－W	1.64	0.76	0.73	皿形	不整形		
35号土壙	古代	I･J－４	SK34･36(旧) J－４－P10	N－11°－E	(2.44)	1.48	0.44	箱形	隅丸長方形	ロクロ土師　須恵器甕（渥美）ロクロ土師坏　土師器甕	
36号土壙	古代	J－４	SK35(新)	N－２°－W	(1.08)	1.60	0.20	皿形	不整形	土師器甕	
37号土壙	古代	J－２･３	－	N－20°－E	(3.00)	1.10	0.44	皿形	楕円形	かわらけ皿･坏　須恵器大甕･坏･蓋　鉄･石製品	底面凹凸
38号土壙	古代	J－４	SK11(新)	N－27°－E	1.00	0.66	0.21		楕円形	ロクロ土師坏	下面検出
39号土壙	古代	I－３	SD12(新)	N－26°－E	(1.76)	1.40	0.32	皿形	楕円形	ロクロ土師坏　土師器甕　須恵器坏	
40号土壙	古代	J－５	－	N－４°－E	2.60	1.90	0.50	逆台形	不整楕円形	内黒(高台付あり)　土師器甕	
41号土壙	中世	I－３	－	N－54°－W	0.92	0.50	0.23	皿形	楕円形		
42号土壙	古代	I－４	－	N－88°－W	1.50	0.98	0.35	逆台形	不整形	ロクロ土師坏　須恵器坏　大土錘	
43号土壙	古代	H－３	SJ４(旧)	N－84°－W	0.90	0.88	0.63	鍋底形	円形	ロクロ土師坏・甕　須恵器甕　土師器甕	

遺構名	時期	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
44号土壙											欠番
45号土壙	古代	G･H－５	－	Ｎ－90° －Ｅ	0.77	0.72	0.21	箱形	円形	土師器甕　須恵器長頸瓶	
46号土壙	不明	G－５	－	Ｎ－68° －Ｗ	0.46	0.36	0.15	皿形	楕円形		
47号土壙	古代	G－５	－	Ｎ－７° －Ｗ	1.40	1.38	1.02	漏斗形	円形	須恵器甕・坏　土師器甕	
48号土壙	古代	G－４	－	Ｎ－81° －Ｗ	0.74	0.68	0.22	皿形	円形		
49号土壙	古代	H･I－４	SJ５(新) H－４－P６ I－４－P８	Ｎ－76° －Ｗ	1.10	(0.86)	0.25	箱形	不整円形	ロクロ土師台付甕　土師器甕	
50号土壙	古代	H－３	SK100　１号畠跡(旧)	Ｎ－75° －Ｗ	4.36	1.42	0.54	逆台形	隅丸長方形	須恵器坏　ロクロ土師坏　土師器甕･鉢	東側
51号土壙	古代	G－３	G－３－P18(新)	Ｎ－45° －Ｅ	0.72	0.62	0.17	逆台形	不整円形	土師器甕　常滑須恵器坏　ロクロ土師坏	
52号土壙	中世	H－３･４	SD５	Ｎ－88° －Ｅ	2.68	2.22	0.71		楕円形	在地産片口鉢　常滑鉢　渥美甕　青磁同安窯　黄瀬戸　土師器甕　ロクロ土師坏・甕	SE３ 大型の礫
53号土壙	中世	G－３	１号畠跡(旧)	Ｎ－12° －Ｅ	1.14	0.72	0.29	鍋底形	楕円形	青磁碗　土師器甕　刀	
54号土壙	古代	I－４	SK27(新)	Ｎ－87° －Ｗ	0.82	0.74	0.23	鍋底形	円形	ロクロ土師･内黒　土師器甕	下面検出
55号土壙	古代	H－４	SJ5 (旧)	Ｎ－82° －Ｗ	0.48	0.35	0.12	鍋底形	楕円形	須恵器甕	
56号土壙	古代	H－３	１号畠跡 (旧)	Ｎ－１° －Ｗ	1.16	0.94	0.18	皿形	楕円形	土師器甕　須恵器甕	
57号土壙	古代	G･H－３	１号畠跡(旧)	Ｎ－９° －Ｅ	1.62	1.36	0.25	箱形	円形	須恵器坏・高台付坏　土師器甕　ロクロ土師坏・甑・内黒　釘	
58号土壙	古代	G－３	１号畠跡(旧)	Ｎ－74° －Ｅ	0.74	0.60	0.31	逆台形	楕円形	ロクロ土師坏	
59号土壙	古代	E－３	－	Ｎ－77° －Ｗ	0.82	0.54	0.13	皿形	楕円形		
60号土壙	古代	H－４		Ｎ－29° －Ｗ	1.04	(0.90)	0.18	皿形	円形	土師器甕	SJ５の床下土壙１
61号土壙	古代	H－４	SD５(新)	Ｎ－28° －Ｗ	1.20	(0.90)	0.27	皿形	円形	土師器甕　灰釉碗　ロクロ土師埦･坏	SJ５の床下土壙２
62号土壙	古代	H－４	SD５(新)	Ｎ－95° －Ｗ	(1.30)	1.30	0.32	皿形	円形	土師器甕　ロクロ土師埦　内黒坏　須恵器坏	SJ５の床下土壙３
63号土壙	古代	H－４	SJ５(新)	Ｎ－17° －Ｅ	0.40	0.34	0.10	逆台形	円形		
64号土壙	古代	G－４	SD５　SK75(旧)	Ｎ－12° －Ｅ	0.70	0.48	－	皿形	楕円形		
65号土壙	中近	E･F－４	－	Ｎ－５° －Ｅ	0.83	0.80	0.33	逆台形	円形		
66号土壙	中近	E･F－４	－	Ｎ－５° －Ｗ	0.98	0.92	0.25	逆台形	円形		
67号土壙	不明	E－４	－	Ｎ－86° －Ｗ	0.94	0.56	0.10	皿形	楕円形	焙烙　瀬戸呉須絵	
68号土壙	中近	D－４	－	Ｎ－42° －Ｗ	1.22	1.02	0.56	逆台形	円形		
69号土壙	中世	D－４	SK79･80	Ｎ－78° －Ｗ	6.84	1.88	0.41	逆台形	隅丸長方形	かわらけ皿　ロクロ土師坏・鉢　土師器台付甕　須恵器甕	
70号土壙	古代	D－４	－	Ｎ－３° －Ｅ	2.64	1.90	0.64	漏斗形	不整形	ロクロ土師坏	SE６
71号土壙	不明	E－４･５	－	Ｎ－82° －Ｅ	0.48	0.48	0.07	皿形	円形		

遺構名	時期	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
72号土壙	不明	E－4	－	N－37° －W	0.86	0.66	0.19	箱形	楕円形		
73号土壙	中世	E－3	SD15	N－82° －W	(2.00)	1.36	0.35	箱形	楕円形	常滑甕　渥美甕	
74号土壙	古代	E－4	SD20(新)	N－33° －E	(0.60)	0.72	0.09	皿形	楕円形	須恵器甕	
75号土壙	古代	G－4	SD５(新) SK64(新)	N－79° －W	1.20	0.80	0.10		楕円形	須恵器坏	
76号土壙	古代	E－4	SD20(新)	N－21° －E	(0.32)	0.52	0.12	皿形	円形		
77号土壙	古代	G･H－3	１号畠跡(旧)	N－85° －W	1.02	0.76	0.11	皿形	楕円形	内黒　ロクロ土師坏・高台付坏　須恵器長頸瓶	
78号土壙	不明	E－4	－	N－36° －E	(0.56)	0.62	0.13	皿形	隅丸長方形		
79号土壙	不明	D－4	SK69	N－77° －W	0.90	(0.50)	0.17	皿形	楕円形		
80号土壙	不明	D－4	SK69	N－14° －E	(0.30)	0.42	0.14	皿形	楕円形		
81号土壙	不明	F－3･4	－	N－74° －W	1.15	0.40	0.15	皿形	楕円形		
82号土壙	古代	I－3	SJ３(新)	N－４° －E	0.88	0.80	0.16	皿形	円形	ロクロ土師坏　土師器甕　須恵器坏	
83号土壙	古代	I－3	SJ３(新)	N－39° －E	1.24	1.14	0.24	箱形	円形	ロクロ土師坏・内黒　土師器台付甕　須恵器甕	
84号土壙											欠番
85号土壙	中世	G－3	SD13	N－ 4° －W	1.54	1.52	0.58		円形	青磁袋物　渥美甕　渥美大甕　在地産鉢	SE４
86号土壙	古代	G－3･4	－	N－ 3° －E	1.02	0.96	0.06	皿形	円形	ロクロ土師坏　土師器甕	
87号土壙	近世	H－4･5	SK88 (新) H－5－P1(旧)	N－69° －W	2.05	0.77	0.37	箱形	隅丸長方形		）一つの墓
88号土壙	近世	H－5	SK87(旧)	N－30° －W	1.00	0.90	0.42	逆台形	円形	土師器大鉢･坏	
89号土壙	古代	H－4･5	SD24	N－72° －W	4.98	1.00	0.63	逆台形	隅丸長方形	ロクロ土師坏　土師器坏･甕	
90号土壙	中世	H－5	SK91	N－0°	1.90	1.88	－		円形	灰釉長頸瓶･焙烙　ロクロ土師坏･鉢　土師器甕　近世摺鉢･染付	SE５
91号土壙	中世	H－5	SK92･93 SK97(新) SE５(新)	N－31° －E	2.50	(1.34)	0.56	逆台形	楕円形	渥美甕　ロクロ土師甕　砥石	
92号土壙	中世	H－5	SK91･93･97(新)	N－48° －E	1.26	0.99	0.52	逆台形	不整円形	渥美大甕　土師器甕　ロクロ土師坏　鉄製品	
93号土壙	中近	H－5	SK91･92(旧) SK97(新)	N－26° －W	(0.98)	1.04	0.17	逆台形	楕円形		
94 号土壙											欠番
95 号土壙	古代	I－ 3	SJ３(新)	N－17° －E	1.70	0.70	0.31	逆台形	隅丸長方形		
96 号土壙	中世	I－ 5	－	N－ 3° －E	2.42	2.22	0.97	逆台形	円形	渥美甕　山茶碗	
97号土壙	近世	H－5	SK91･92･93(旧)	N－51° －W	(0.96)	(0.90)	－	皿形	円形	染付仏飯具　寛永通宝	
98号土壙	中世	G－4	－	N－13° －E	0.76	0.64	0.21	箱形	隅丸長方形	常滑大甕　ロクロ土師坏　土師器甕	
99号土壙	不明	G－4	－	N－82° －E	1.62	0.42	0.15	逆台形	楕円形		
100号土壙	古代	H－3	SK50･101 １号畠跡(旧)	N－70° －W	(1.84)	1.08	0.24	皿形	楕円形		
101号土壙	古代	G･H－3	SK100 １号畠跡(旧)	N－70° －W	(1.00)	0.98	0.34	皿形	楕円形		



ＳＫ９
1　黒褐色土　焼土ブロック（径５～10㎜）・炭化物（径５～20㎜）多量　しまりあり　粘性やや強い　下部に炭化物集中
2　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い
3　暗褐色土　焼土粒（径１～３㎜）少量　しまりあり　粘性強い

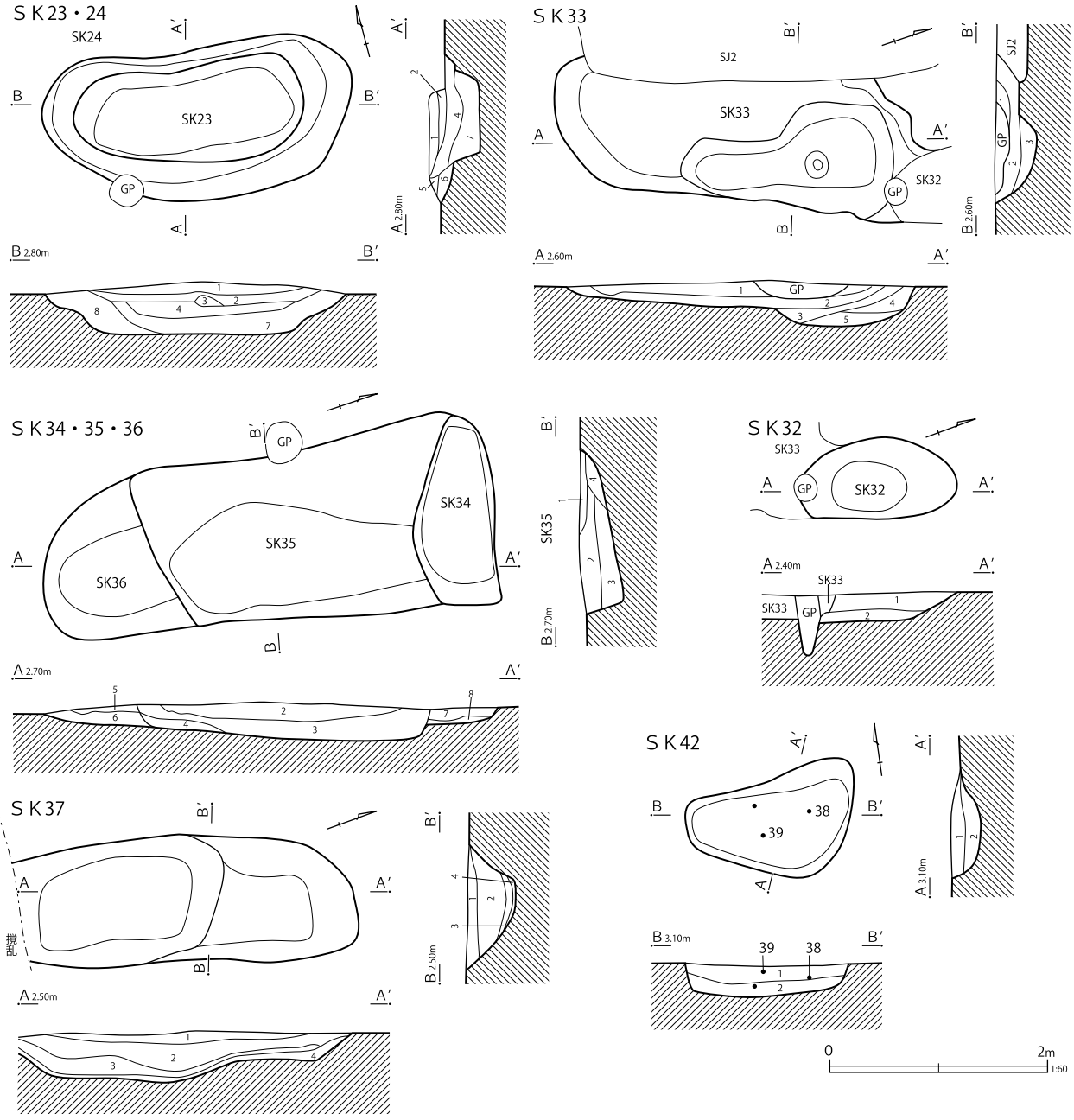
ＳＫ13
1　暗褐色土　黄褐色ブロック（径５～10㎜）少量　しまりあり　粘性強い
2　暗褐色土　黄褐色ブロック（径５～20㎜）多量
焼土ブロック（径５～10㎜）少量　しまりあり　粘性強い
3　黒褐色土　黄褐色ブロック（径５～10㎜）・
焼土ブロック（径５～10㎜）少量　しまりあり　粘性強い
4　黒褐色土　黄褐色ブロック（径５～10㎜）少量　しまりあり　粘性強い
5　暗褐色土　黄褐色ブロック（径５～10㎜）多量　しまりあり　粘性強い
6　黒褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量
7　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）の層
8　黒褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量
9　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）の層
ＳＫ２０
10　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量
11　黒褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量
12　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）の層
13　暗褐色土　黄褐色土ブロック（径５～10㎜）多量

ＳＫ18
1　黒褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物・焼土ブロック（径５～10㎜）多量
銭出土　下面に板状の粘土ブロック
2　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量
3　明黄褐色土　黄褐色粘土ブロック（径５～20㎜）の層　焼土粒（径１～５㎜）・
炭化物少量
4　黒色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量

ＳＫ５
1　黒色土　暗黄褐色粘土粒（径１㎝）少量　焼土粒（径５㎜～１㎝）・
炭化物粒多量　しまりやや強い　粘性ややあり
2　暗灰黄色土　暗黄褐色粘土ブロック（大）・焼土粒子（径５㎜～１㎝）・
炭化物粒多量　しまりやや強い　粘性ややあり
3　暗黄褐色土　マンガン粒多量　しまり強い　粘性あり

ＳＫ19
1　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物・焼土ブロック（径５～10㎜）多量
2　黒色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量
3　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）の層
焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量
4　黒褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量
5　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）の層

第23図　土壙（１）



SK23・24
1　黒褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物・焼土ブロック（径5～10㎜）多量　しまりあり　粘性やや強い
2　暗褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い
3　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック（径5～20㎜）の層　4層より黄褐色土ブロックの密度があらい　しまりあり　粘性強い
4　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック（径5～20㎜）の層　しまりあり　粘性強い
5　黒褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い
6　黒褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い
7　暗褐色土　焼土粒（径1～5㎜）少量　しまりあり　粘性強い
8　暗褐色土　黄褐色土ブロック（径5～20㎜）多量　しまりあり　粘性強い

SK32
1　暗褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物・黄褐色土ブロック（径5～20㎜）少量　しまりあり　粘性やや強い
2　暗褐色土　黄褐色土ブロック（径5～20㎜）多量　しまりあり　粘性強い

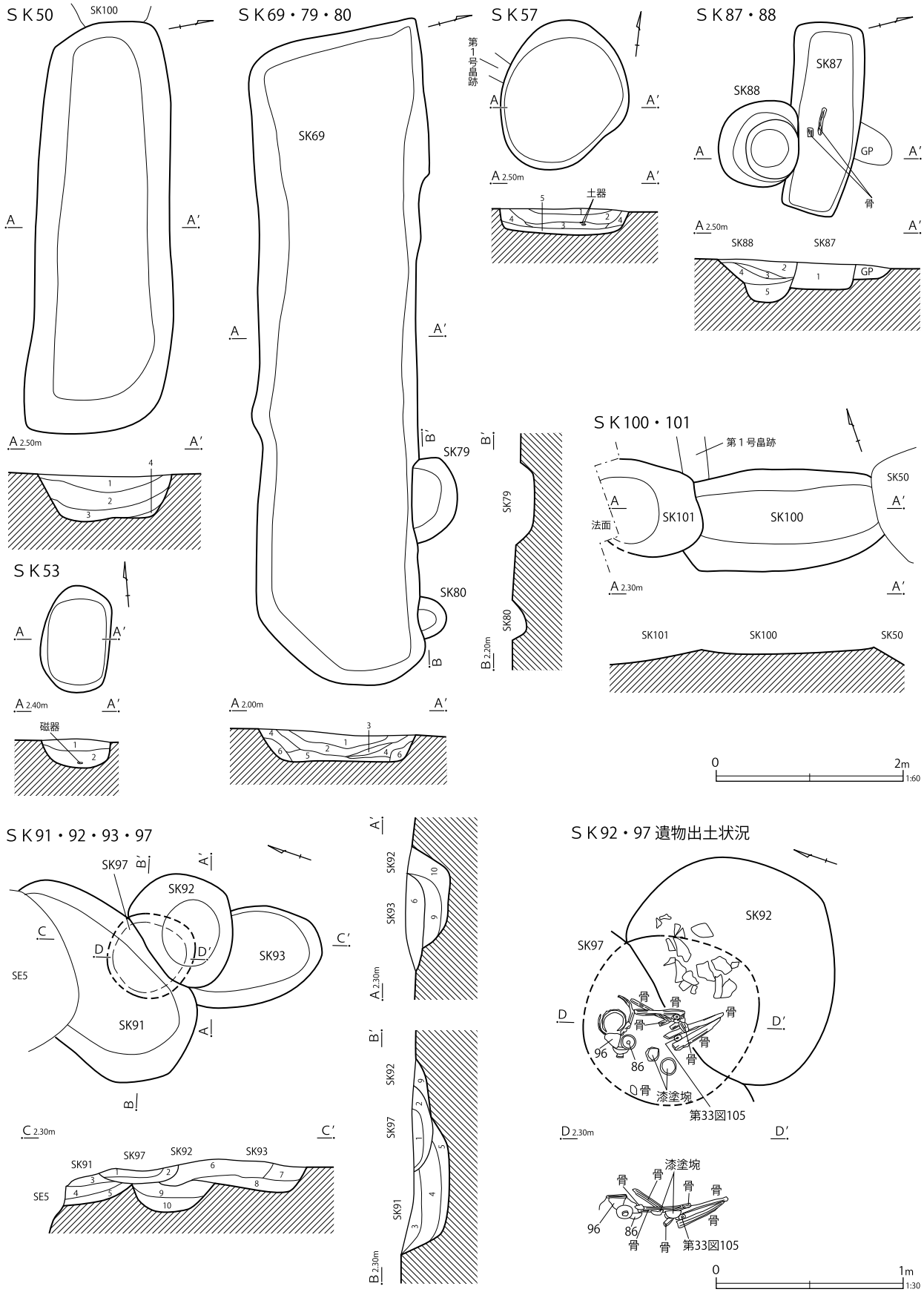
SK33
1　暗褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物多量　しまりあり　粘性弱い
2　黒褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性弱い
3　暗褐色土　黄褐色土粒子（径1～5㎜）多量　しまりあり　粘性弱い
4　黒褐色土　黄褐色土粒子（径1～5㎜）少量　しまりあり　粘性弱い
5　暗褐色土　黄褐色土粒子（径1～5㎜）多量　しまりあり　粘性やや強い

SK34・35・36
1　黒褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物多量　しまりあり　粘性弱い
2　暗褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性弱い
3　黒褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性やや強い
4　暗褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性やや強い
5　暗褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性弱い
6　暗褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性弱い
7　暗褐色土　黄褐色土粒子（径1～5㎜）多量　しまりあり　粘性弱い
8　暗褐色土　黄褐色土粒子（径1～5㎜）少量　しまりあり　粘性弱い

SK37
1　黒褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物非常に多量　しまりあり　粘性やや強い
2　黒褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物多量　しまりあり　粘性強い
3　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック層　しまりあり　粘性強い
4　黒褐色土　しまりあり　粘性強い

SK42
1　暗褐色土　焼土粒（径1～5㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性弱い
2　灰黄褐色土　マンガン少量　しまりあり　粘性強い

第24図　土壙（2）


SK50
SK100
SK69・79・80
SK69
SK79
SK80
SK57
第1号畠跡
土器
SK87・88
SK87
SK88
GP
骨
SK53
磁器
SK100・101
第1号畠跡
SK50
SK101
SK100
法面
SK91・92・93・97
SK97
SK92
SK93
SK91
SE5
SK92・97遺物出土状況
漆塗塊
第33図105
96
86
0
2m
1:60
1m
1:30

第 25 図　土壙（3）

ＳＫ50
1　暗褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性弱い
2　黒褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性やや強い
3　黒褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い
4　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い

ＳＫ53
1　暗黄褐色土　焼土ブロック少量
2　暗褐色土　　暗黄褐色土ブロック含む

ＳＫ57
1　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物非常に多量　しまりあり　粘性弱い
2　黒褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　しまりあり　粘性やや強い
3　黒褐色土　２層とほぼ同じ　炭化物より多く含む　しまりあり　粘性強い
4　暗褐色土　黄褐色土ブロック（径５～10㎜）多量　しまりあり　粘性強い
5　暗褐色土　４層とほぼ同じ　黄褐色土ブロック少量　しまりあり　粘性強い

ＳＫ69
1　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）少量　しまりあり　粘性やや強い
2　褐灰色土　　焼土粒（径１～５㎜）少量　しまりあり　粘性やや強い
3　黒色土　　宝永火山灰層　焼土ブロック（径５～10㎜）少量　しまりなし　粘性やや強い
4　黒褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）少量　しまりあり　粘性やや強い
5　灰黄褐色土　マンガン少量　しまりあり　粘性強い
6　暗黄褐色土　マンガン多量　しまりあり　粘性強い

ＳＫ87
1　暗褐色土　地山ブロック含む

ＳＫ88
2　暗褐色土
3　にぶい黄褐色土　地山ブロック多量
4　黒褐色土　　炭化物少量
5　黒褐色土　　地山ブロック含む

ＳＫ91・92・93・97
1　暗褐色土　　黄褐色土粒子（径１～５㎜）多量　しまりあり　粘性弱い　SK97
2　暗褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　SK97
3　灰黄褐色土　　黄褐色土ブロック（径５～30㎜）多量　しまりあり　粘性やや強い　SK91
4　黒色土　　黄褐色土粒子（径１～５㎜）少量　しまりあり　粘性弱い　SK91
5　暗褐色土　　しまりあり　粘性やや強い　SK91
6　灰黄褐色土　　黄褐色土ブロック（径５～10㎜）多量　しまりあり　粘性強い　SK93
7　灰黄褐色土　　黄褐色土ブロック（径５～10㎜）多量　しまりあり　粘性強い　SK93
8　褐灰色土　　黄褐色土ブロック（径５～10㎜）少量　しまりあり　粘性強い　SK93
9　褐灰色土　　黄褐色土ブロック（径５～10㎜）多量　しまりあり　粘性強い　SK92
10　褐灰色土　　褐色土ブロック（径５～10㎜）少量　しまりあり　粘性強い　SK92

第26図　土壙（４）

第69号土壙（第25図）

調査区の北側、Ｄ－４グリッドで検出した。溝状を呈し、第79・80号土壙と重複するが新旧は不明である。覆土は焼土粒子を含む灰黄褐色土、褐灰色土、黒褐色土で、第３層は宝永スコリアと考えられる火山灰層、下層は地山由来の灰黄褐色土である。

第87号土壙（第25図）

調査区の中央東側、Ｈ－４・５グリッドで検出した。覆土は暗褐色の単層で埋め戻されており、その後近世以降の第88号土壙が掘り込まれている。床面近くの北側から歯が、中央付近から骨が出土している。近世に帰属すると考えられる。

第91～93・97号土壙（第25図）

調査区の中央東側、Ｈ－５グリッドで検出した。中世の第91・92号土壙、中近世の第93号土壙が重複して造られ、その埋没後に近世の第97号土壙が掘り込まれている。層位的な前後関係は92・91→93→97号の順である。第91・92号の前後関係は不明だが、同一個体の渥美焼の大甕が出土しており、同時併存の可能性が高い。

第97号土壙は横臥屈葬で、頭部に鉄鍋が被せられた所謂「鍋被り葬」の状態で人骨が出土した近世墓である。頭部にかけられた鍋は既に口縁端部の破片のみで、取り上げの際に細片化してしまい、図化できなかった。高台付碗２点、漆椀２点、寛永通宝６枚が副葬品として出土している。漆椀は脆弱で取り上げられなかった。下層の第92号土壙からは同一個体と考えられる渥美焼の大甕が出土しているが、接点がない。

覆土は第97号土壙が暗褐色土、灰黄褐色土で埋め戻されている。その他は第91号土壙が黄褐色土ブロックを多く含む灰黄褐色土、黒色土で埋め戻されている。

（２）土壙出土遺物（第27～30図）

第３号土壙出土遺物　１は下総産ロクロ土師器の坏である。外面にヘラ磨きが認められる。

第４号土壙出土遺物　２は南比企産の須恵器坏、３～５は下総産のロクロ土師器坏である。４・５は内面黒色処理されている。５は底部外周と底面にヘラケズリが施されている。６は縄文時代後期の深鉢胴部の破片である。ほとんど磨滅しておらず、洪水等で流されたものとは考え難い。

第５号土壙出土遺物　７は南比企産の須恵器坏である。鳩山Ⅷ期で、底面は回転糸切りである。８・９は下総産のロクロ土師器である。８の坏は底面周辺ヘラケズリである。９は甑である。口縁部は複合口縁を呈し、胴部は外面平行タタキ後ナデ、内面はヘラナデである。

第 11 号土壙出土遺物　10 はロクロ土師器坏である。胎土に角閃石を多く含み、利根川流域産と考えられる。

第 13 号土壙出土遺物　11 はロクロ土師器坏である。下総産で内面黒色処理されている。

第 14 号土壙出土遺物　12 は南比企産の須恵器坏で、鳩山Ⅷ期である。

第 17 号土壙出土遺物　13・14 は下総産のロクロ土師器坏である。13 はやや大振りで、底部外周と底面周辺にヘラケズリが施されている。15 は南比企産の須恵器甕である。胴部の外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。底部外周ヘラケズリ、底面は無調整でやや上げ底気味である。

第 18 号土壙出土遺物　16・17 は龍泉窯青磁の碗である。16 は鎬蓮弁、17 は太いヘラ状の工具で鎬のない蓮弁が描かれている。

第 19 号土壙出土遺物　19 は南比企産の須恵器坏である。20 ～ 22 は転用砥具である。20 は渥美焼の口縁部、21 は常滑焼の胴部、22 は在地産土器の胴部である。使用痕の範囲を矢印で示した。

第 20 号土壙出土遺物　18 は灰釉陶器碗である。ハケ塗りで内面に釉薬が掛けられている。黒笹 14 ～ 90 号窯段階で、猿投窯産である。

第 23 号土壙出土遺物　23 ～ 25 は南比企産の須恵器である。23・24 は須恵器坏で鳩山Ⅷ期と考えられる。25 は大甕である。口縁部の内面に厚く灰が掛る。26 は角閃石を多く含む利根川流域産のロクロ土師器甑である。27 は非ロクロ整形の手捏ねかわらけで、底部はヘラケズリである。28 は龍泉窯系青磁碗である。ほとんど見えないが、外面に鎬のない蓮弁が認められる。29 は渥美焼甕の胴部の破片を用いた転用砥具である。

第 27 号土壙出土遺物　30・31 は下総産のロクロ土師器坏である。31 は外面下位に墨書で「乙」が描かれている。

第 37 号土壙出土遺物　32 は南比企産須恵器甑の把手である。ボタン状を呈し、強いナデによって貼付されている。33 はロクロ整形のかわらけである。口縁端部は摘み上げられている。上半はロクロナデである。下半は外面ヘラケズリ後部分的なヘラ磨きが施されている。内面の見込み部分は全面横位のナデである。

第 38 号土壙出土遺物　34 はロクロ土師器坏である。胎土に角閃石を多く含み、利根川流域が産地と考えられる。

第 39 号土壙出土遺物　35 は南比企産の須恵器坏である。底面は回転糸切りである。

第 42 号土壙出土遺物　36・37・39 は南比企産の須恵器である。36・39 は坏である。39 の底面は回転糸切りである。37 は高台付坏である。底径が小さく鳩山Ⅷ期と考えられる。38・40 ～ 42 はロクロ土師器である。40 は胎土に角閃石を多く含み、利根川流域産と考えられる。その他は下総産である。38・40 は坏である。底面は回転糸切りである。41 は高台付坏である。低い高台が貼付され、底部周辺は強くナデられている。内面は黒色処理され、ヘラ磨きが施されている。43 は大型の土錘である。外周のほとんどが欠けている。外面全体ナデが施されている。

第 45 号土壙出土遺物　44 は東金子産の須恵器長頸瓶胴部である。

第 50 号土壙出土遺物　45 はロクロ土師器の甕もしくは鉢の底部である。外面ヘラケズリ、内面指オサエ後ヘラナデが施されている。底面は無調整である。

第 53 号土壙出土遺物　46 は同安窯青磁の皿である。見込み部分にヘラの片彫りと櫛描きによるジグザグの文様が描かれている。底面は無釉である。

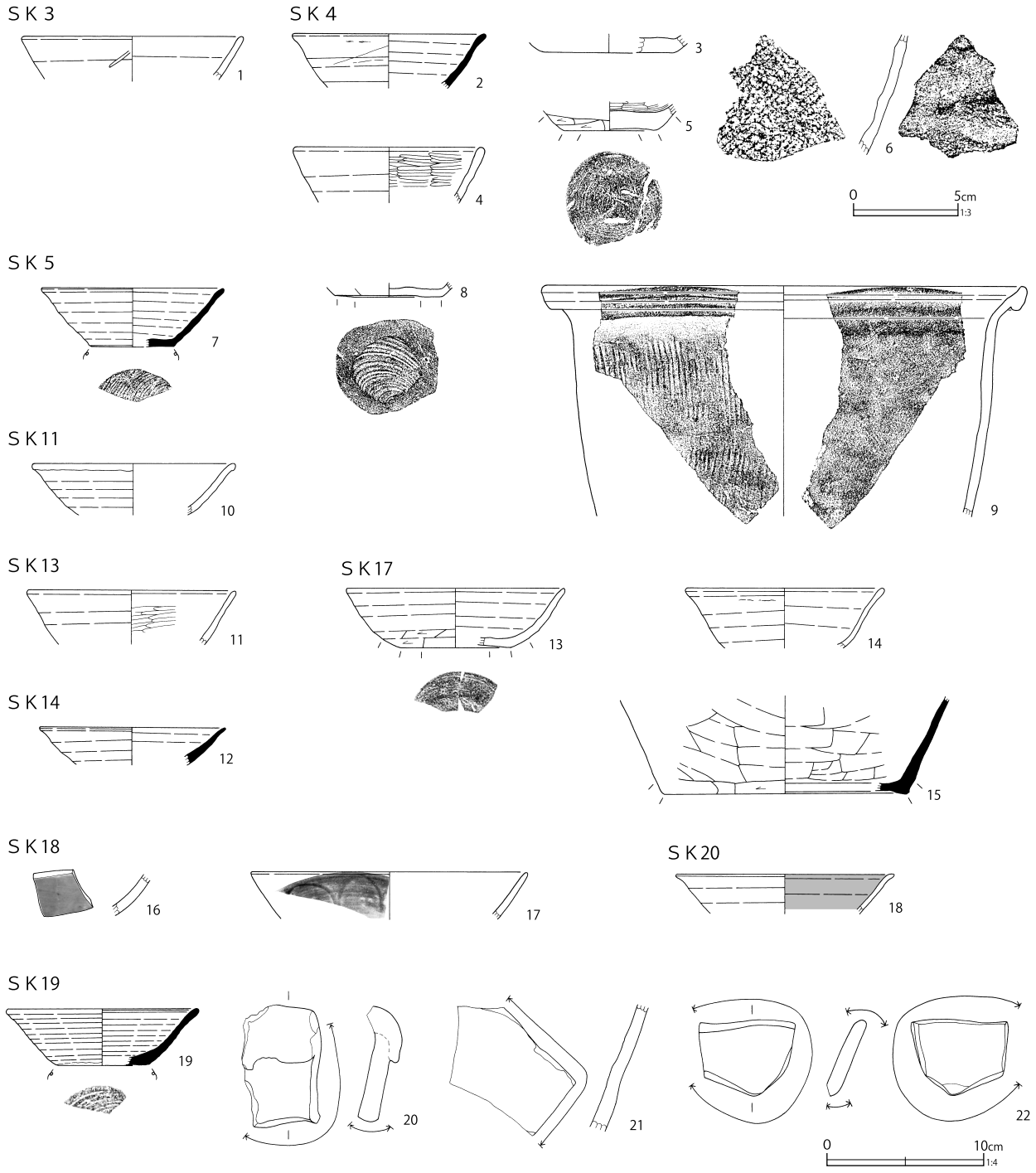
第 54 号土壙出土遺物　47・48 はロクロ土師器坏である。47 は胎土に角閃石を多く含む利根川流域産、48 は下総産である。双方とも底部外周ヘラケズリである。底面は 47 が回転ヘラケズリ、48 は回転糸切後周辺ヘラケズリが加えられている。48 は外面下位に「乙」が墨書で書かれている。

48 は内面黒色処理、ヘラ磨きが施されている。

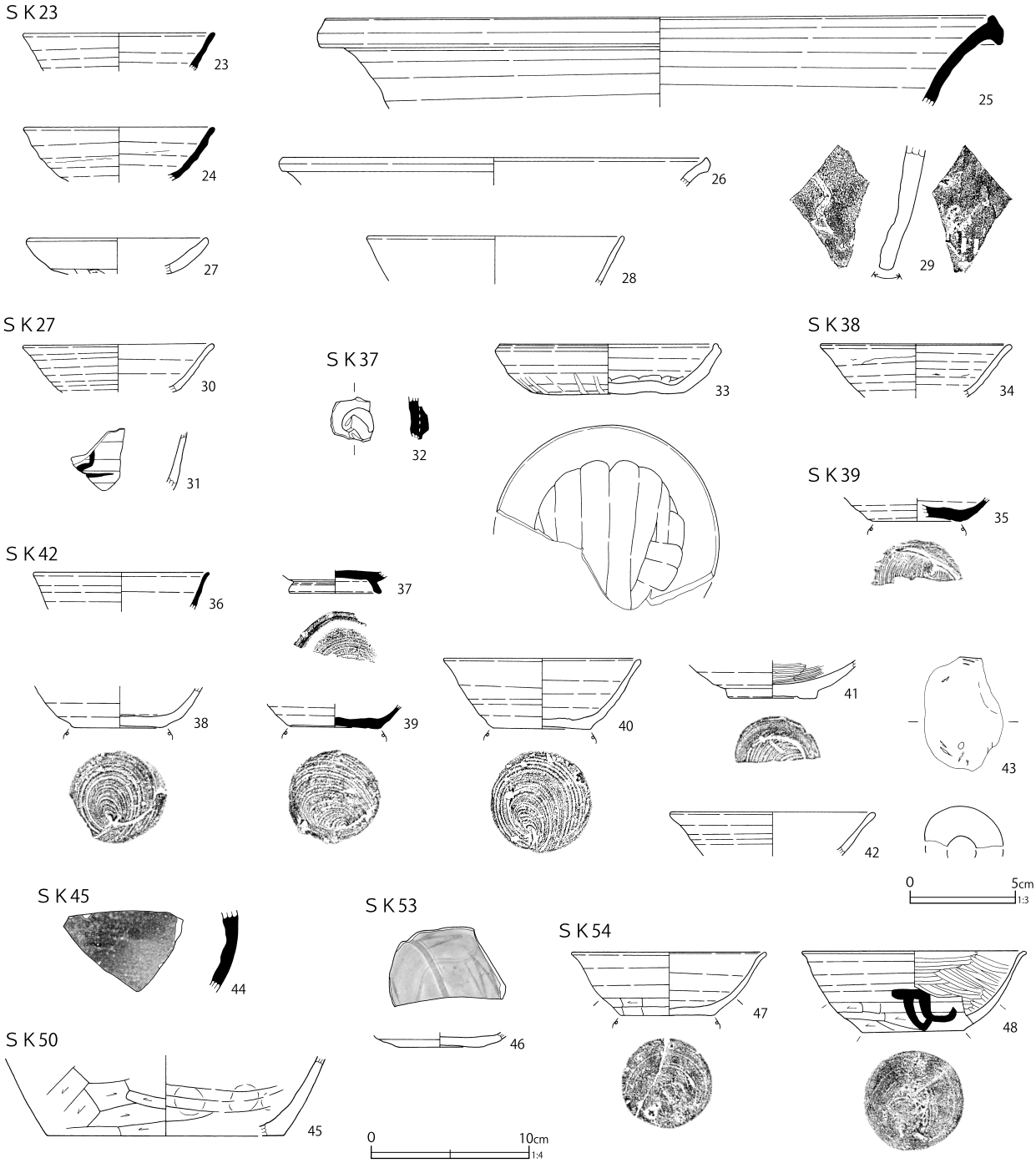
第 57 号土壙出土遺物 49 ～ 51 は須恵器である。49・51 は南比企産、鳩山Ⅷ期である。50 は末野産である。いずれも口縁端部が外反する。

52 ～ 56 は下総産のロクロ土師器坏である。53・55・56 は底部外周ヘラケズリである。55 は色調が褐色を呈し、胎土に白色針状物質を含む。内面黒色処理、ヘラ磨きが施されている。56 は見込み部分に「正金」の刻書が見られる。

57 は下総産のロクロ土師器甕の胴部である。外面は平行タタキ後横位ナデ、内面はヘラナデが施されている。



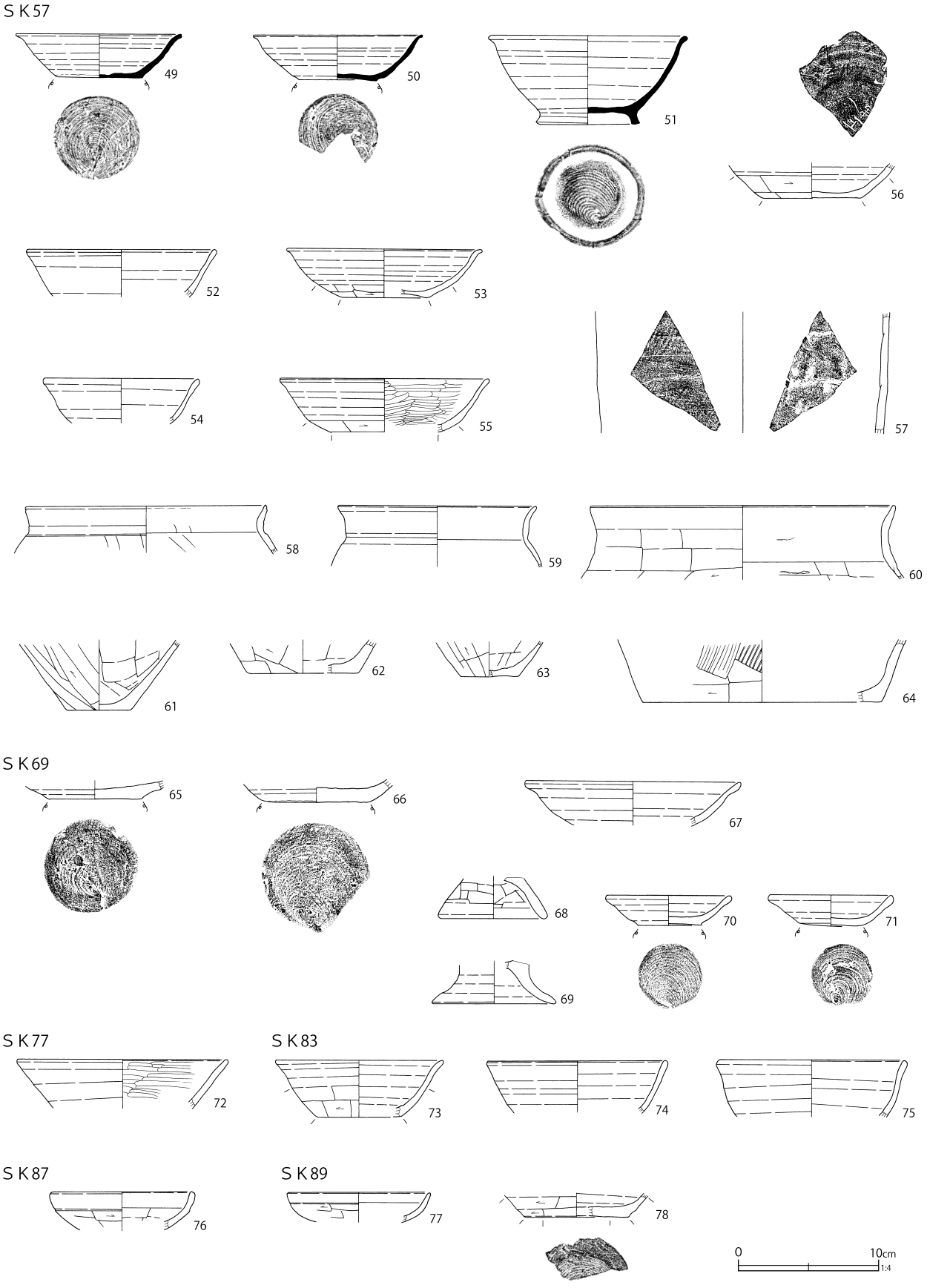
第 27 図　土壙出土遺物（1）



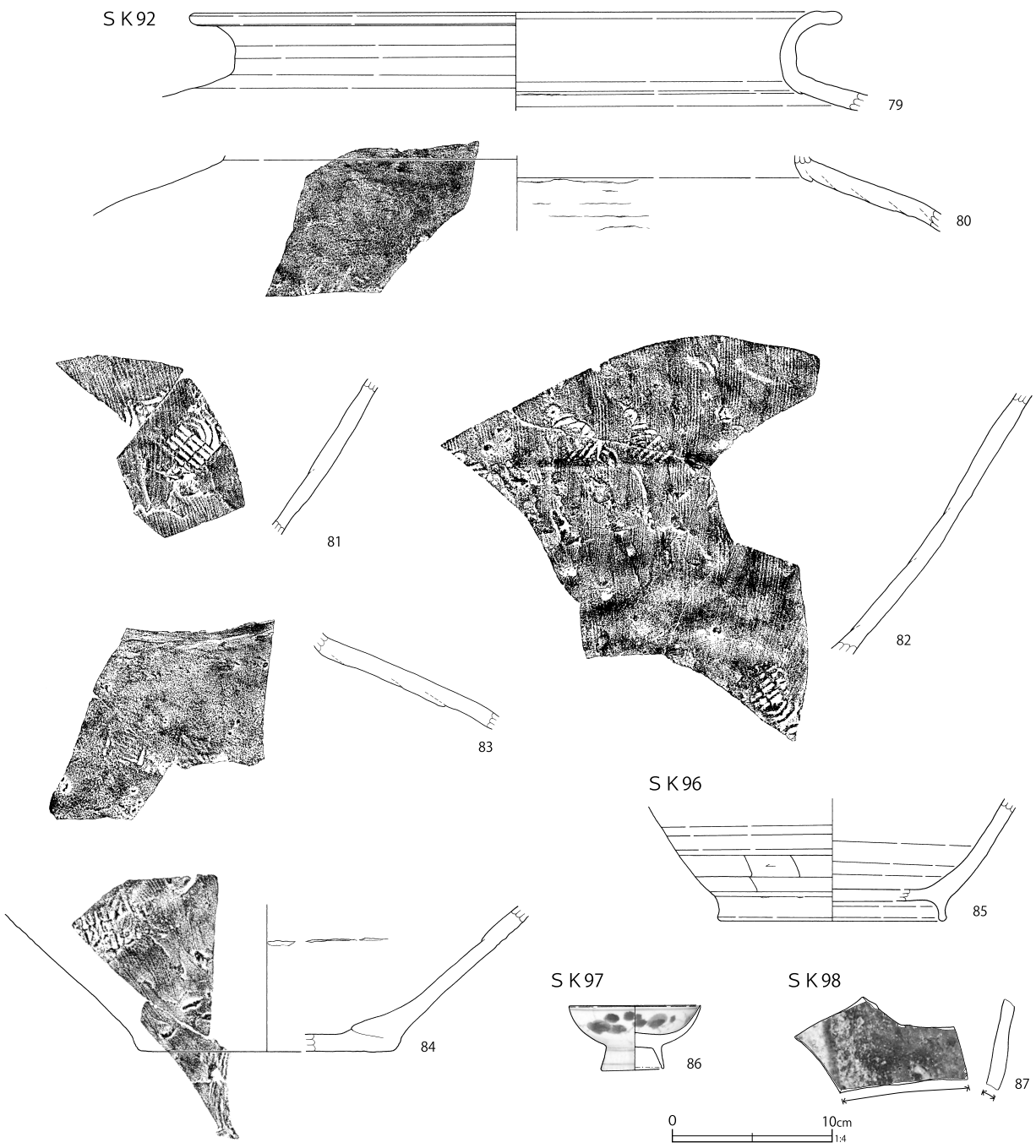
第 28 図　土壙出土遺物（2）

58 ～ 63 は土師器甕である。58 は口縁部が短く、端部が摘まれている。59・60 は所謂コの字甕である。器肉が厚く、上半の屈曲は弱い。60 は下半のヘラケズリが明瞭に残る。風化が進んでいる。61 ～ 63 は底部である。62 は大型、硬質でロクロ土師器の可能性がある。胎土に針状物質を含む。64 は須恵器甕の底部である。外面ヘラケズリ後平行タタキ、内面ヘラナデが施されている。底面無調整である。粘土が粗い印象を受ける。新治産の甕である。

第 69 号土壙出土遺物　65 ～ 67 は下総産ロクロ土師器の坏である。65・66 は回転糸切りの底部である。風化著しい。67 は口径は大きいがやや浅めのものである。68・69 は土師器の台付甕脚台



第 29 図　土壙出土遺物（3）



第 30 図　土壙出土遺物（4）

部である。68 は内外面ヘラナデ後端部のみ横ナデ、69 は全体に横ナデが施されている。

70・71 はロクロ成形のかわらけ皿である。両者とも底面回転糸切である。70 は底面に鬆が開く部分がある。部分的に煤が付着する。

第 77 号土壙出土遺物 72 は下総産ロクロ土師器の坏である。内面黒色処理され、ヘラ磨きが施されている。

第 83 号土壙出土遺物 73 ～ 75 は下総産ロクロ土師器坏である。73 は底部外周ヘラケズリが施されている。74 は外面に煤が付着する。

第 87 号土壙出土遺物　76 は土師器坏である。口縁部内外面横ナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。

第 89 号土壙出土遺物　77 は土師器坏である。口縁部内外面横ナデ、体部外面ヘラケズリ、内面は風化のため不明である。78 は下総産ロクロ土師器の坏である。外面は底部外周ヘラケズリ、底面は回転糸切り後周辺ヘラケズリである。

第 92 号土壙出土遺物　79 ～ 84 は渥美焼の大甕である。他にも破片があり、同一個体と考えられるが、接点がなく復元できなかった。79 は口縁部である。大きく外反し、端部は水平に引き延ばされている。内外面の全体に灰が掛り、一部は自然釉となっている。肩部（80・83）には格子状タタキ目､円形タタキ目が印判状に施されている。胴部（81・82）は外面に円形タタキ→格子状タタキ→縦方向の刷毛目の順で調整が観察できる。底部周辺は更にその刷毛目にナデを加えている。内面は当て具痕は判然とせず、中位はヘラナデによって平滑に仕上げられ、下位には刷毛目が認められる。

第 96 号土壙出土遺物　85 は山茶碗である。底部外周回転ヘラケズリが施されている。

第 97 号土壙出土遺物　86 は肥前系磁器の碗である。外面に圏線と草花文が呉須で描かれている。同様のものがもう一点出土しており、副葬品として対になっていたと考えられる。

第 98 号土壙出土遺物　87 は常滑焼の甕胴部を使った転用砥具である。使用範囲を矢印で示した。

第 10 表　土壙出土遺物観察表（第 27 ～ 30 図）

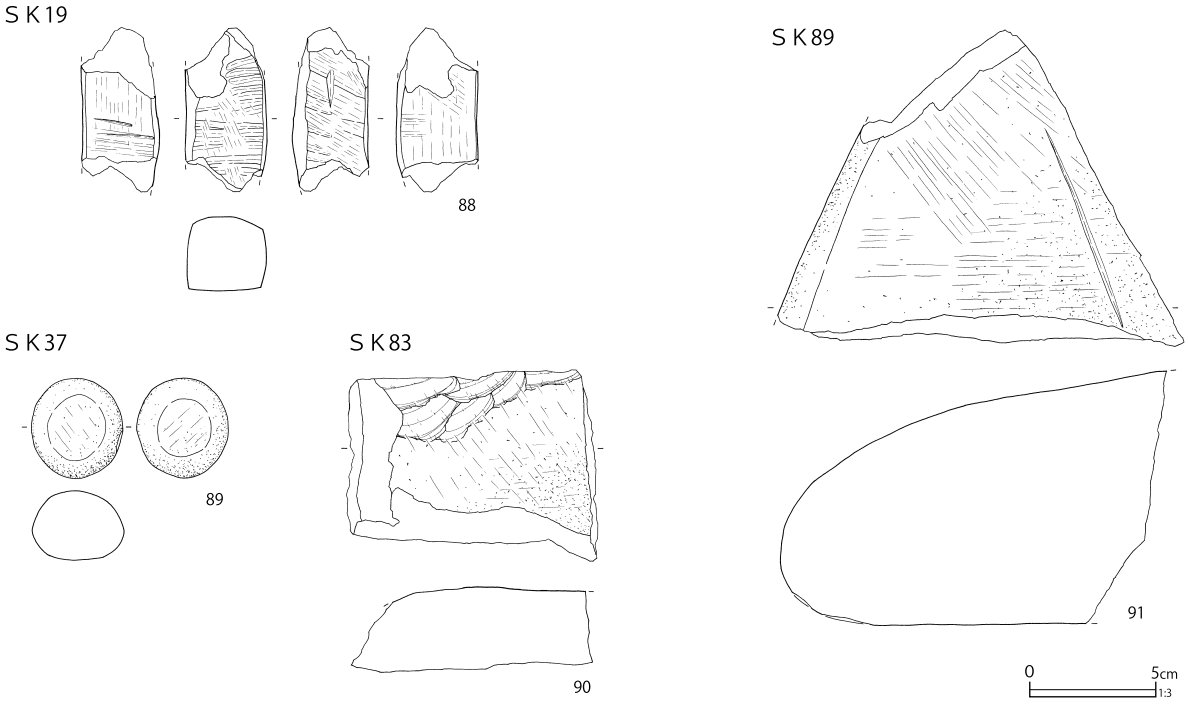
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	坏	(13.9)	2.7	－	ＡＨＩＪ	10	普通	にぶい橙	SK３　下総	20-1
2	須恵器	坏	(12.2)	3.5	－	ＨＩＪＫ	20	良好	灰	SK４　南比企	20-1
3	ロクロ土師	坏	－	1.0	(8.2)	ＡＨＪＫ	20	普通	橙	SK４　下総	20-1
4	ロクロ土師	坏	(11.9)	3.5	－	ＡＣＨＩ	25	普通	にぶい赤褐	SK4　下総　内面黒色　5と同一個体か	20-1
5	ロクロ土師	坏	－	1.7	5.9	ＡＥＨＩＪ	80	不良	褐灰	SK4　下総　内面黒色　4と同一個体か	
6	縄文土器	不明	－	5.7	－	ＣＩＫ	5	普通	にぶい赤褐	SK４	20-1
7	須恵器	坏	(11.6)	3.7	(5.6)	ＥＩＪ	25	良好	黄灰	SK５　南比企　鳩山Ⅷ期	11-5
8	ロクロ土師	坏	－	0.9	(6.5)	ＡＢＥＨＩ	70	普通	にぶい橙	SK５　下総	20-1
9	ロクロ土師	甑	(30.6)	14.6	－	ＡＣＨＩＪ	10	良好	褐灰	SK５　下総	20-1
10	ロクロ土師	坏	(12.7)	3.3	－	ＡＣＨＩ	10	普通	にぶい橙	SK11　利根川流域	20-1
11	ロクロ土師	坏	(13.2)	3.4	－	ＡＣＫ	10	普通	にぶい黄橙	SK13　下総　内面黒色	20-1
12	須恵器	坏	(12.0)	2.3	－	ＥＩＪＫ	5	普通	灰	SK14　南比企　鳩山Ⅷ期	20-1
13	ロクロ土師	坏	(14.0)	3.7	(7.0)	ＡＨＩ	25	良好	灰黄褐	SK17　下総	11-6
14	ロクロ土師	坏	(12.6)	3.8	－	ＡＥＩ	40	普通	灰黄褐	SK17　下総	20-1
15	須恵器	甕	－	6.2	(15.6)	ＥＨＩＪ	15	普通	灰	SK17　南比企	11-7
16	磁器	碗	－	2.6	－	Ｋ	5	良好	灰	SK18　青磁　龍泉窯　№３	16-4
17	磁器	碗	(17.6)	3.0	－	Ｉ	10	良好	灰	SK18　青磁　龍泉窯　外面劃花文　№2	16-5
18	灰釉陶器	碗	(14.0)	2.5	－	ＥＨＩＫ	10	良好	灰白	SK20　猿投窯　K-14	23-1
19	須恵器	坏	(12.0)	3.6	(6.1)	ＤＥＨＩＪ	10	良好	灰	SK19　南比企	
20	陶器	甕	－	7.3	－	ＩＫ	－	普通	灰	SK19　渥美　転用研具	20-2
21	陶器	甕	－	8.0	－	ＥＨＩＫ	5	良好	灰白	SK19　常滑　転用研具	20-2
22	中世土器	鉢	－	4.8	－	ＥＨＩＫ	－	普通	灰白	SK19　在地産瓦質土器　転用研具	20-2
23	須恵器	坏	(12.0)	2.4	－	ＥＪ	10	良好	灰	SK23　南比企　鳩山Ⅷ期	20-2
24	須恵器	坏	(12.0)	3.4	－	ＡＥＩＪＫ	20	良好	灰	SK23　南比企　鳩山Ⅷ期	20-2
25	須恵器	甕	(42.0)	5.7	－	ＥＨＩＬ	10	良好	灰	SK23　南比企	20-2
26	ロクロ土師	甑	(27.0)	1.7	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	良好	にぶい褐	SK23　利根川流域	20-2
27	かわらけ	皿	(11.2)	2.2	－	ＡＨＩ	20	普通	にぶい橙	SK23　下総　非ロクロ成形手捏ね	20-2
28	磁器	埦	(16.2)	3.0	－	Ｋ	5	良好	灰	SK23　青磁　龍泉窯　外面劃花文　№1	16-6
29	陶器	甕	－	7.8	－	ＥＩ	5	普通	灰	SK23　渥美　転用研具	20-2
30	ロクロ土師	坏	(12.0)	3.0	－	ＡＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	SK27　下総	20-1
31	ロクロ土師	坏	－	3.5	－	ＡＨＩＫ	5	良好	にぶい橙	SK27　下総　外面墨書「乙」	16-7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
32	須恵器	甑	－	2.7	－	ＩＪ	－	普通	灰	SK37　南比企	20-1
33	かわらけ	皿	(13.8)	3.1	(9.8)	ＡＨＩＫ	60	普通	橙	SK37　ロクロ成形	11-8
34	ロクロ土師	坏	(11.9)	3.3	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	SK38　利根川流域　外面煤付着	20-2
35	須恵器	坏	－	1.3	(5.6)	ＨＩＪ	45	普通	灰	SK39　南比企	
36	須恵器	坏	(9.9)	2.5	－	ＡＩＪＫ	10	良好	灰	SK42　南比企　鳩山Ⅷ期	20-2
37	須恵器	高台付坏	－	1.9	(6.0)	ＥＩＪＫ	50	良好	灰	SK42　南比企　鳩山Ⅷ期	20-2
38	ロクロ土師	坏	－	3.6	6.2	ＡＣＨＩＪＫ	50	普通	にぶい黄橙	SK42　下総　№３	
39	須恵器	坏	－	1.5	5.9	ＢＥＩＪＫＬ	90	良好	灰	SK42　南比企　№２	
40	ロクロ土師	坏	12.5	4.4	6.3	ＡＣＨＩＪＫ	100	普通	にぶい橙	SK42　利根川流域	11-9
41	ロクロ土師	高台付坏	－	2.4	(5.7)	ＣＨＩＪＫ	50	普通	にぶい黄橙	SK42　下総	20-2
42	ロクロ土師	埦	(12.5)	2.8	－	ＡＣＨＩＪＫ	5	普通	にぶい黄橙	SK42　下総	20-2
43	土製品	土錘	長さ5.3㎝　径3.7㎝　孔径1.4㎝　重さ24.7ｇ　残存100%						にぶい橙	SK42	20-2
44	須恵器	長頸瓶	－	3.8	－	ＩＫ	5	良好	灰白	SK45　東金子	
45	ロクロ土師	甕	－	5.0	(15.0)	ＡＨＩ	15	良好	にぶい褐	SK50	11-10
46	磁器	皿	－	1.0	(5.0)	ＩＫ	50	良好	灰白	SK53　同安窯　青磁　劃花文	16-8
47	ロクロ土師	坏	12.5	4.0	6.0	ＡＣＨＩＪＫ	60	普通	灰褐	SK54　利根川流域	12-1
48	ロクロ土師	坏	(14.4)	5.0	6.6	ＡＥＨＩＫ	70	普通	にぶい褐	SK54　下総　内面黒色　墨書「兀」	12-2
49	須恵器	坏	11.8	3.1	6.2	ＩＪＫ	100	普通	灰	SK57　南比企　鳩山Ⅷ期	12-3
50	須恵器	坏	12.0	3.1	5.6	ＢＥＨＩＫ	50	普通	灰	SK57　末野	12-4
51	須恵器	高台付埦	(13.8)	6.3	7.4	ＡＥＩＪＫ	50	良好	灰白	SK57　南比企　鳩山Ⅷ期	12-5
52	ロクロ土師	坏	(13.3)	3.3	－	ＡＨＫ	10	普通	にぶい橙	SK57　下総	20-3
53	ロクロ土師	坏	14.0	3.45	6.2	ＨＩＪＫ	40	良好	橙	SK57　下総	12-6
54	ロクロ土師	坏	(10.9)	3.2	－	ＡＣＩ	20	普通	にぶい黄橙	SK57　下総	20-3
55	ロクロ土師	坏	(14.9)	3.8	－	ＡＥＩＪＫ	20	良好	にぶい赤褐	SK57　下総　内面黒色	20-3
56	ロクロ土師	坏	－	2.5	(6.8)	ＡＣＨ	30	普通	橙	SK57　下総　「正金」刻書	12-7
57	ロクロ土師	甕	－	8.6	－	ＡＣＨＩ	5	良好	にぶい黄橙	SK57　下総	20-3
58	土師器	甕	(17.0)	3.4	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	橙	SK57	20-3
59	土師器	甕	(14.0)	4.3	－	ＡＨＩ	15	普通	橙	SK57	20-3
60	土師器	甕	(22.0)	5.3	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	明赤褐	SK57　利根川流域	
61	土師器	甕	－	5.0	(4.6)	ＡＨＩＫ	40	普通	灰褐	SK57　下総　外面煤付着	12-8
62	土師器	甕	－	2.4	(8.0)	ＥＩＪＫ	20	普通	にぶい黄橙	SK57　南比企か　外面煤付着	
63	土師器	甕	－	2.4	(4.2)	ＡＢＥＨＩ	30	普通	暗褐	SK57	
64	須恵器	甕	－	4.4	(17.0)	ＥＨＩＫ	5	普通	橙	SK57　新治	
65	ロクロ土師	坏	－	1.3	6.6	ＡＨＩＫ	75	普通	にぶい橙	SK69　下総	
66	ロクロ土師	坏	－	1.6	7.7	ＡＥＨＩＫ	60	普通	橙	SK69　下総	
67	ロクロ土師	坏	(15.2)	3.1	－	ＡＨＩ	10	普通	灰黄褐	SK69　下総	20-3
68	土師器	台付甕	－	3.0	7.8	ＡＨＫ	100	普通	橙	SK69　下総	13-1
69	土師器	台付甕	－	3.0	(8.8)	ＡＣＨＩＫ	35	普通	にぶい橙	SK69　外面２次加熱赤変	13-2
70	かわらけ	皿	(9.0)	2.1	4.6	ＡＥＨＩＫ	70	普通	橙	SK69　ロクロ成形	13-3
71	かわらけ	皿	8.6	2.2	4.7	ＡＨＩＫ	85	普通	にぶい橙	SK69　ロクロ成形	13-4
72	ロクロ土師	坏	(15.0)	4.0	－	ＡＥＨＩＫ	10	良好	にぶい橙	SK77　下総　内面黒色	20-3
73	ロクロ土師	坏	(12.0)	4.0	(6.0)	ＡＨＩＪＫ	10	良好	にぶい橙	SK83　下総	20-3
74	ロクロ土師	坏	(12.6)	3.6	－	ＡＥＨＩＫ	15	普通	浅黄橙	SK83　下総　外面煤付着	20-3
75	ロクロ土師	坏	(13.2)	4.0	－	ＡＢＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	SK83　下総	20-3
76	土師器	坏	(9.8)	2.7	－	ＥＨＩ	10	普通	灰褐	SK87	
77	土師器	坏	(10.0)	2.1	－	ＢＥＨＫ	10	普通	橙	SK89　非ロクロ成形	
78	ロクロ土師	坏	－	1.7	(7.6)	ＡＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	SK89　下総	
79	陶器	甕	(40.0)	6.2	－	ＡＩＫ	30	良好	灰	SK92　渥美	13-5
80	陶器	甕	－	4.8	－	ＩＫ	5	良好	灰	SK92　渥美	22-3
81	陶器	甕	－	11.7	－	ＩＫ	5	良好	灰	SK92　渥美	22-3

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
82	陶器	甕	－	16.2	－	ＩＫ	5	良好	灰	SK92　渥美	22-３
83	陶器	甕	－	5.9	－	ＩＫ	5	良好	灰	SK92　渥美	22-３
84	陶器	甕	－	9.1	(16.0)	ＩＫ	15	普通	灰	SK92　渥美	13-６
85	陶器	碗	－	7.6	(14.4)	ＤＥＩＫ	15	普通	灰	SK96　山茶碗	13-７
86	磁器	碗	8.2	4.0	3.9	K	95	普通	灰白	SK97　肥前系磁器　草花文　№４	13-８
87	陶器	甕	－	5.6	－	ＩＫ	－	良好	灰白	SK98　常滑　転用研具	20-３

（3）土壙出土石製品（第 31 図）

88 は凝灰岩製の砥石である。使用面は四面である。二面には異なる工具による削痕が認められる。上下端を欠失する。89 は用途不明の丸石である。上下に不明瞭だが擦痕が認められる。90・91 は砥石である。90 は相当の大型品だが、全体に欠失している。一面のみ使用面が残る。91 は安山岩製で上面に広く使用痕が認められる。



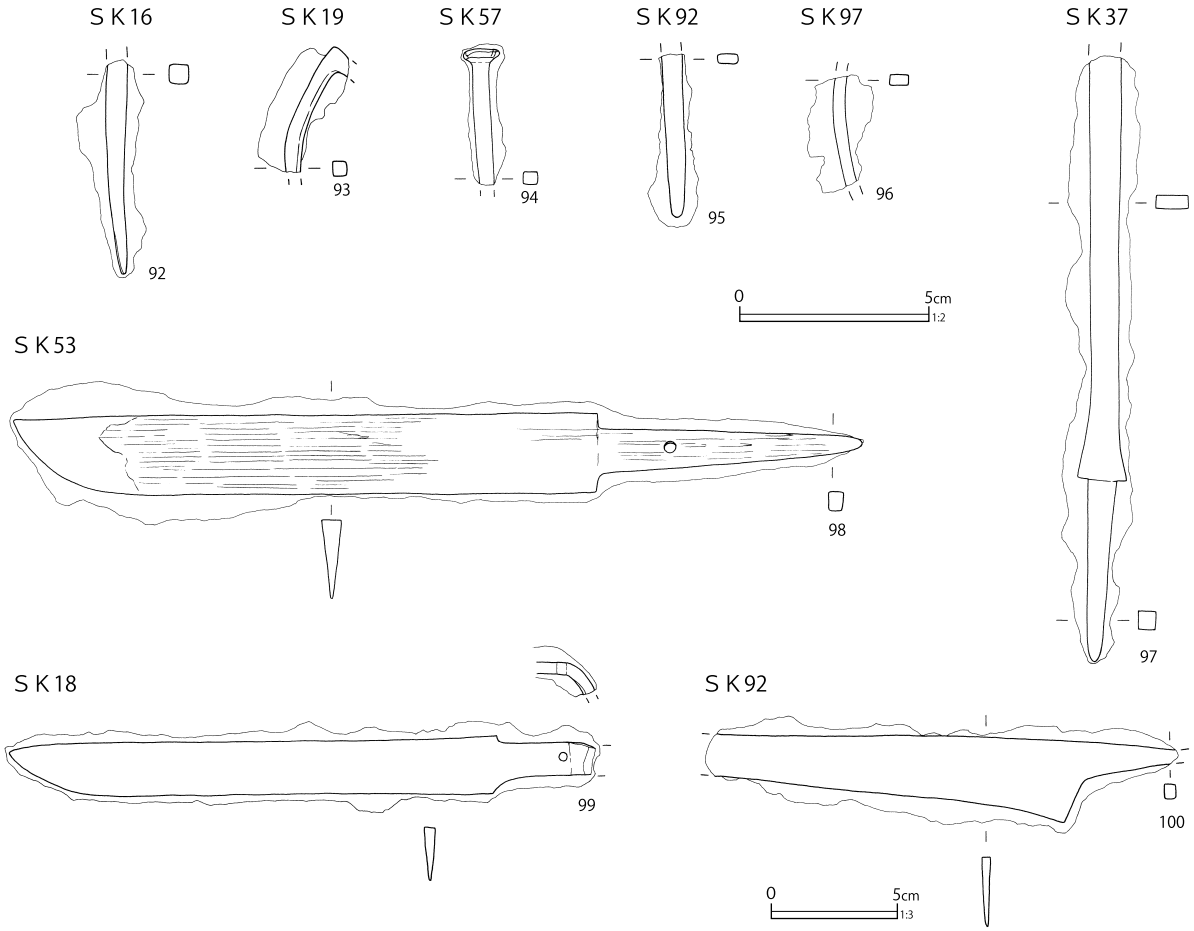
第 31 図　土壙出土石製品

第 11 表　土壙出土石製品観察表（第 31 図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考	図版
88	砥石	凝灰岩	(6.5)	3.3	3.1	79.80	SK19	16-９
89	丸石	安山岩	3.9	3.6	2.7	55.30	SK37	16-10
90	砥石	砂岩	(7.6)	9.9	3.8	396.00	SK83	
91	砥石	安山岩	(13.5)	(16.1)	(10.0)	1847.80	SK89	

（4）土壙出土鉄製品（第 32 図）

92 ～ 94 は釘である。92 は頭部を、94 は脚部を欠失する。93 は上部で折れ、両側を欠失する。94 の頭部は張出す部分が欠けている。95・96 は棒状品である。95 は上部を、96 は上下端を欠失している。96 は大きく曲げられている。断面形は長方形である。97 は不明品である。下部が茎になり、棒状の柄に装着したと考えられる。98・99 は刀である。いずれも両関である。98 は両側とも段を持ち、99 は刃関がなだらかである。98 は全体に木質が遺存している。99 は茎尻が曲がっている。100 は背関がなく、刃関が広くなっている。茎も短く細い。包丁の可能性が大きい。



第 32 図　土壙出土鉄製品

第 12 表　土壙出土鉄製品観察表（第 32 図）

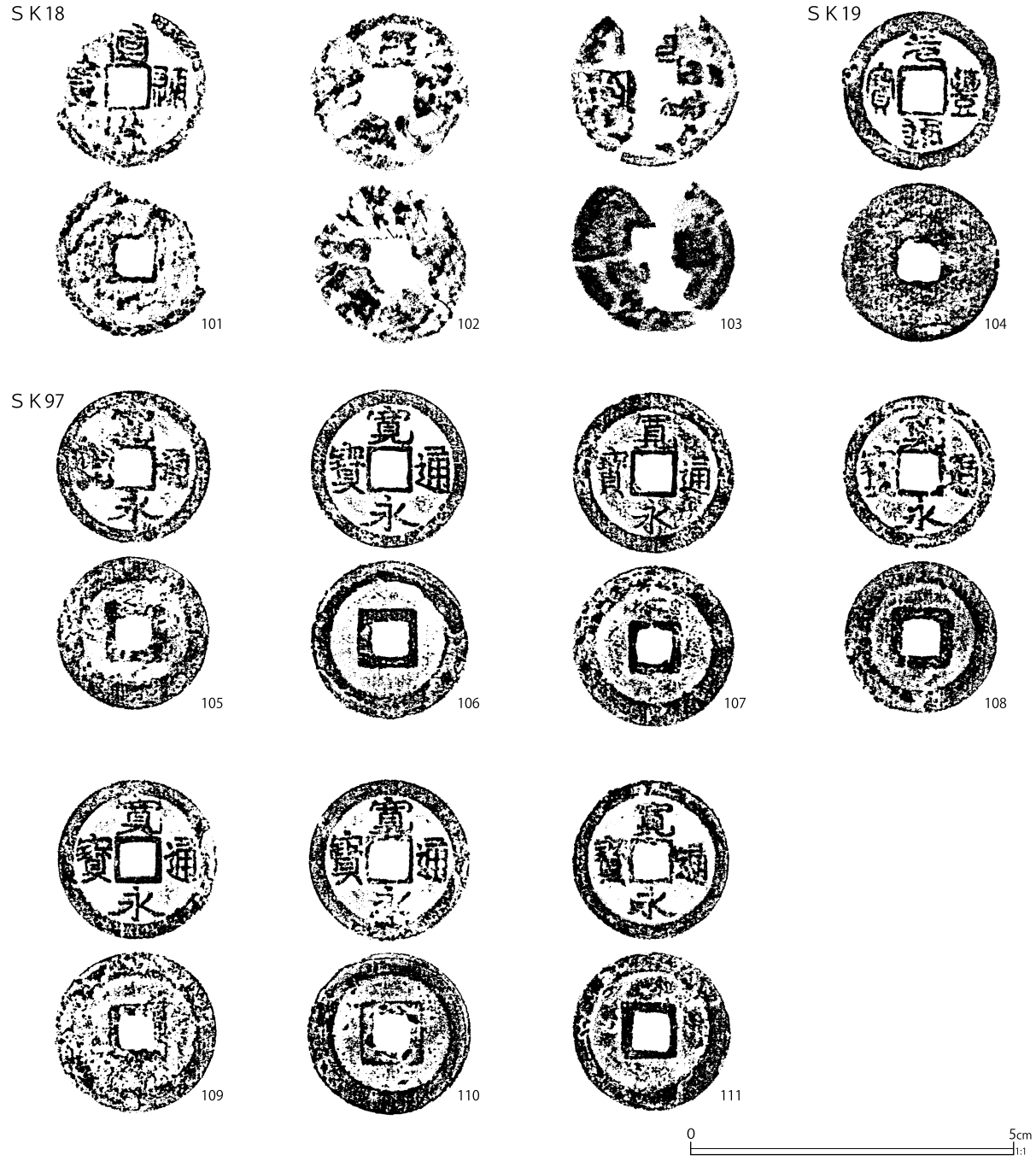
番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
92	釘	[5.6]	0.5	0.5	11.4	SK16	24-3
93	釘	[3.5]	0.4	0.4	6.2	SK19	24-3
94	釘	[3.6]	0.35	0.3	5.8	SK57	24-3
95	棒状品	[4.3]	0.55	0.25	4.4	SK92	24-3
96	棒状品	[2.8]	0.3	0.5	4.8	SK97　№ 5	24-3
97	不明	[15.9]	0.85	0.35	42.1	SK37	24-3
98	刀	長さ 33.6 cm 背幅 0.8 cm	刃長 23.2 cm	刃幅 3.1 cm	353.0	SK53	16-11
99	刀	長さ [23.1] cm 背幅 0.4 cm	刃長 19.2 cm	刃幅 2.1 cm	137.4	SK18　№ 4	16-12
100	包丁	長さ [18.5] cm 背幅 0.4 cm	刃長 [14.8] cm	刃幅 2.8 cm	150.3	SK92	16-13

（5）土壙出土古銭（第 33 図）

墓壙と考えられる第 18・19・97 号土壙からは古銭が出土している。

第 18 号土壙からは 101 ～ 103 の３枚の古銭が出土している。102･103 は細かく割れた状態だが、いずれも北宋銭の宣和通宝と考えられる。宣和元年（1119）初鋳。小平銭で字体は篆書体である。各古銭の銭径は 24.0mm、25.0mm、26.0mm で、銭厚は 1.2mm、1.2mm、1.0mm である。重量は 1.2 g、1.6 g、0.9g である。第 19 号土壙からは北宋銭の元豊通宝（104）が出土している。元豊元年 (1078) 初鋳。小平銭で字体は篆書体である。

銭径 24.0mm、銭厚 0.9mm、重量 2.8g である。第 97 号土壙からは寛永通宝が 7 枚出土している。106・108 ～ 110 は古寛永、107・111 は新寛永である。105 は錆で字が潰れており、新旧は判断できない。各古銭の銭径は 24.0mm、23.5mm、24.0mm、24.5mm、25.0mm、23.0mm、24.5mm で銭厚は 0.9 mm、1.1 mm、1.0 mm、0.9 mm、0.8 mm、0.8 mm、0.9mm である。重量は 2.7g、4.4g、3.6g、3.0g、2.8g、3.4g、3.5g である。



第 33 図　土壙出土銭

３．井戸跡

（１）概要

井戸跡は、第１号井戸跡を除いて調査区中央の最も遺構が集中するＨ・Ｉ列に分布している。第１・６号井戸跡が古代、第２～４号井戸跡が中世、第５号井戸跡が近世に帰属する。

確認面から1.0ｍ程度まで掘削したが底面には達せず、さらに１ｍのピンポールを刺し込んだが底面には至らなかった。地山が砂質であることから、安全上この時点で下層の調査を断念した。

第１号井戸跡（第34図）

調査区の中央やや北側、Ｇ・Ｈ－５グリッドに位置する。長径1.90ｍ、短径1.55ｍの楕円形で、断面形は筒形である。長軸方位はＮ－81°－Ｅである。覆土は自然堆積で、上層は灰黄褐色土、下層は焼土、炭化物を含む黒褐色土、暗褐色土である。

上層から灰釉陶器皿、ロクロ土師器坏、鉢、土師器台付甕が出土している。

第２号井戸跡（第34図）

調査区のほぼ中央、Ｉ－４・５グリッドに位置する。調査時は第21号土壙として調査したが、土層堆積、断面形の状況から井戸跡と判断した。長径2.30ｍ、短径1.82ｍの不整楕円形で、断面形は漏斗形である。長軸方位はＮ－84°－Ｅである。覆土の上層は焼土粒・炭化物を多く含み、下層は７層を除いて黄褐色土ブロックを多く含む。埋め戻しである。遺物は青磁、渥美焼大甕、かわらけ、須恵器長頸瓶、甕、ロクロ土師器坏、土錘が出土している。

第３号井戸跡（第34図）

調査区のほぼ中央、Ｈ－３・４グリッドに位置する。調査時は第52号土壙として調査したが、底面が検出されず、土層堆積の状況と合わせて井戸跡と判断した。古代の第５号溝跡埋没後に掘り込まれている。長径2.68ｍ、短径2.22ｍの若干東西方向が長い楕円形である。長軸の方位はＮ－84°－Ｅである。上方は斜めに開くが、規模が大きく全体の断面形は不明である。覆土は自然堆積の炭化物を含む暗褐色土、黒色土である。覆土中に大型の礫（５～10cm）を多く含み、当時の地表面に何らかの施設が設けられていた可能性がある。

遺物は青磁碗、常滑焼鉢、渥美焼甕、在地産土器鉢、黄瀬戸皿、ロクロ土師器坏、甕、土師器甕が出土している。

第４号井戸跡（第34図）

調査区の中央北側、Ｇ－３グリッドに位置する。調査時は第85号土壙として調査したが、底面が検出されず、断面形と合わせて井戸跡と判断した。本井戸跡埋没後に近世の第13号溝跡が掘り込まれている。長径1.54ｍ、短径1.52ｍの若干南北方向が長い不整な円形である。長軸の方位はＮ－４°－Ｗである。断面形は漏斗形である。覆土は自然堆積の黄褐色土ブロックを少量含む暗褐色土、黒褐色土である。

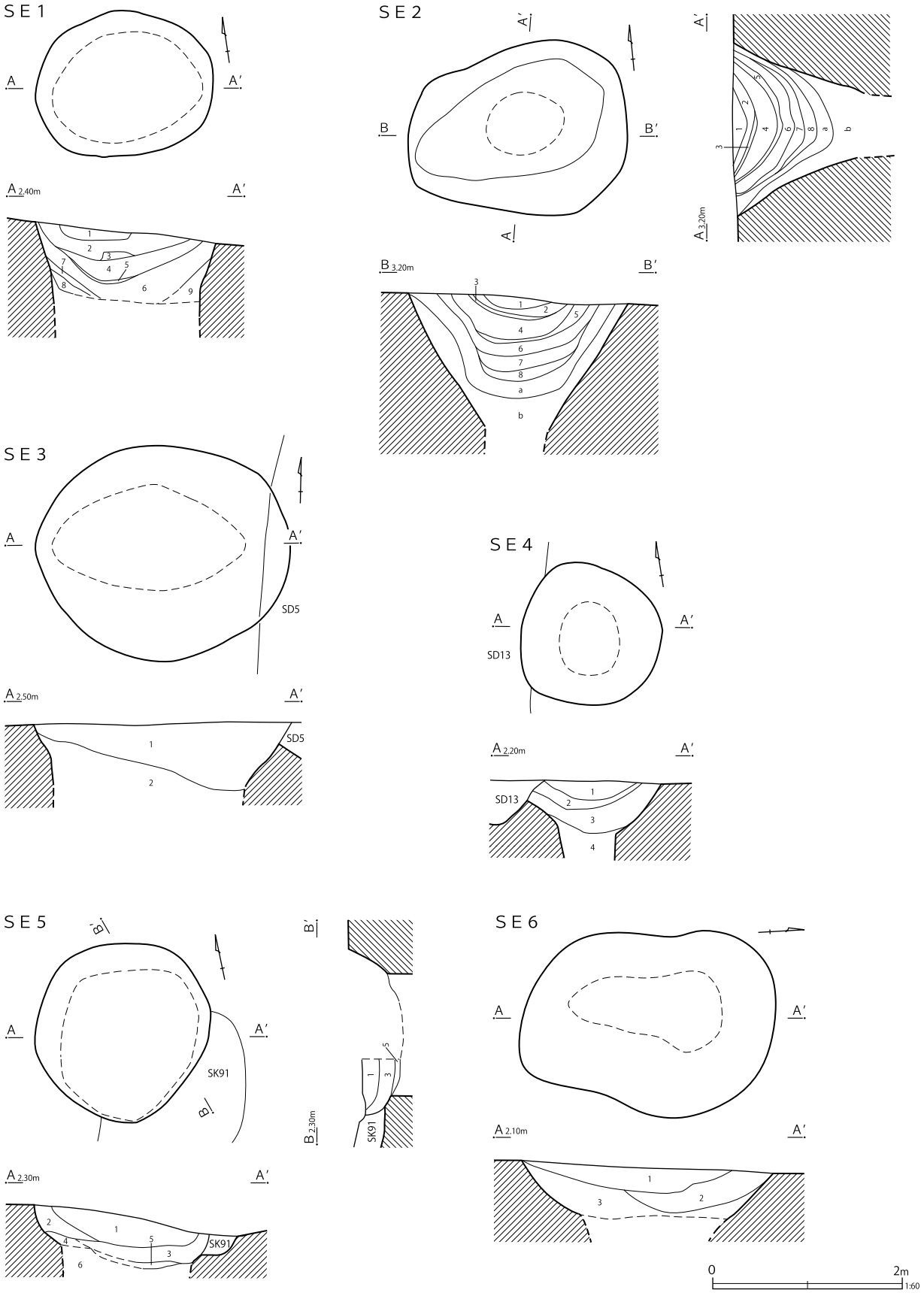
遺物は青磁碗、渥美焼甕、在地産土器鉢が出土している。

第５号井戸跡（第34図）

調査区の中央西寄りＨ－５グリッドに位置する。調査時は第90号土壙として調査したが、底面が検出されず、６層が下方に連続していく状況と合わせて井戸跡と判断した。中世の第91号土壙の覆土を本井戸跡が掘り込んでいる。長径1.90ｍ、短径1.88ｍの若干南北方向が長い不整な円形である。長軸の方位は南北方向である。断面形は上方が大きく開く。下位は垂直である。覆土は上層が黒褐色土、灰黄褐色土の互層で埋め戻し、６層以下は自然堆積の褐灰色土である。

遺物は肥前系磁器、瀬戸美濃擂鉢、焙烙、灰釉陶器長頸瓶、ロクロ土師器坏、鉢、土師器甕が出土している。

第６号井戸跡（第34図）


SE1
A
A′
A 2.40m
SE2
B
B′
B 3.20m
A 3.20m
SE3
SD5
A 2.50m
SE4
SD13
A 2.20m
SE5
SK91
B 2.30m
SE6
A 2.10m
0
2m
1:60

第 34 図　井戸跡（1）

ＳＥ１
1　灰黄褐色土　黄褐色土粒子（径１～５㎜）多量　しまりあり　粘性弱い
2　暗褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性やや強い
3　黒褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性やや強い
4　黒褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　しまりあり　粘性強い
5　黒色土　　炭化物層　しまりあり　粘性強い
6　黒褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い
7　黒褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量　しまりあり　粘性強い
8　黒褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い
9　暗褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性強い

ＳＥ２
1　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量
2　黒褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物非常に多量
3　黒褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量
4　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物多量
　　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）少量
5　黒色土　　炭化物層　焼土粒（径１～５㎜）少量
6　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量
　　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）多量
7　黒色土　　炭化物層　焼土粒（径１～５㎜）少量
8　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量
　　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）非常に多量
a　暗褐色土　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量
　　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）多量
b　暗褐色土　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）少量

ＳＥ３
1　暗褐色土　炭化物（径10㎜）含む　焼土ブロック少量
2　黒色土　　炭化物多量　やわらかい

ＳＥ４
1　黒褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）・炭化物少量　しまりあり　粘性やや強い
2　暗褐色土　　黄褐色土ブロック（径５～10㎜）少量　しまりあり　粘性強い
3　暗褐色土　　黄褐色土ブロック（径５～10㎜）多量　しまりあり　粘性強い
4　黒褐色土　　黄褐色土ブロック（径５～10㎜）少量　しまりあり　粘性強い

ＳＥ５
1　黒褐色土　　焼土粒（径１～５㎜）少量　しまりあり　粘性やや強い
2　灰黄褐色土　　灰黄褐色土ブロック層　しまりあり　粘性強い
3　黒色土　　炭化物層　しまり弱い　粘性弱い
4　にぶい黄褐色土　黄褐色土ブロック層　しまりあり　粘性強い
5　にぶい黄褐色土　黄褐色土ブロック層　しまりあり　粘性やや強い
6　褐灰色土　　マンガン少量　しまりあり　粘性強い

ＳＥ６
1　灰黄褐色土　焼土粒（径１～５㎜）少量　しまりあり　粘性強い
2　暗黄褐色土　黄褐色土ブロック層　しまりあり　粘性強い
3　灰黄褐色土　黄褐色土ブロック（径５～20㎜）多量　しまりあり　粘性強い

第35図　井戸跡（２）

調査区の北側Ｄ－４グリッドに位置する。調査時は第70号土壙として調査したが、底面が検出されず、断面形態と合わせて井戸跡と判断した。長径2.64ｍ、短径1.90ｍの南北方向が長い不整楕円形である。長軸の方位はＮ－３°－Ｅである。断面形は漏斗型になると考えられる。覆土は灰黄褐色土の埋め戻し土で、黄褐色土ブロックを多く含む。

遺物はロクロ土師器坏が出土している。

（２）井戸跡出土遺物（第36図）

第１号井戸跡出土遺物　１は灰釉陶器の皿である。見込み部分は重ね焼きのため無釉である。猿投窯産、黒笹14号窯段階である。２は非ロクロ成形の手捏ねかわらけである。下半にヘラケズリが施されている。

第２号井戸跡出土遺物　３は龍泉窯系青磁の碗である。外面に太いヘラ描きにより蓮弁が描かれている。４は蓋である。５はロクロ土師器の坏である。底部外周は回転ヘラケズリが施されている。角閃石を含み利根川流域生産と考えられる。６は土師器の小型の甕である。内外面横ナデが施されている。７は土錘である。

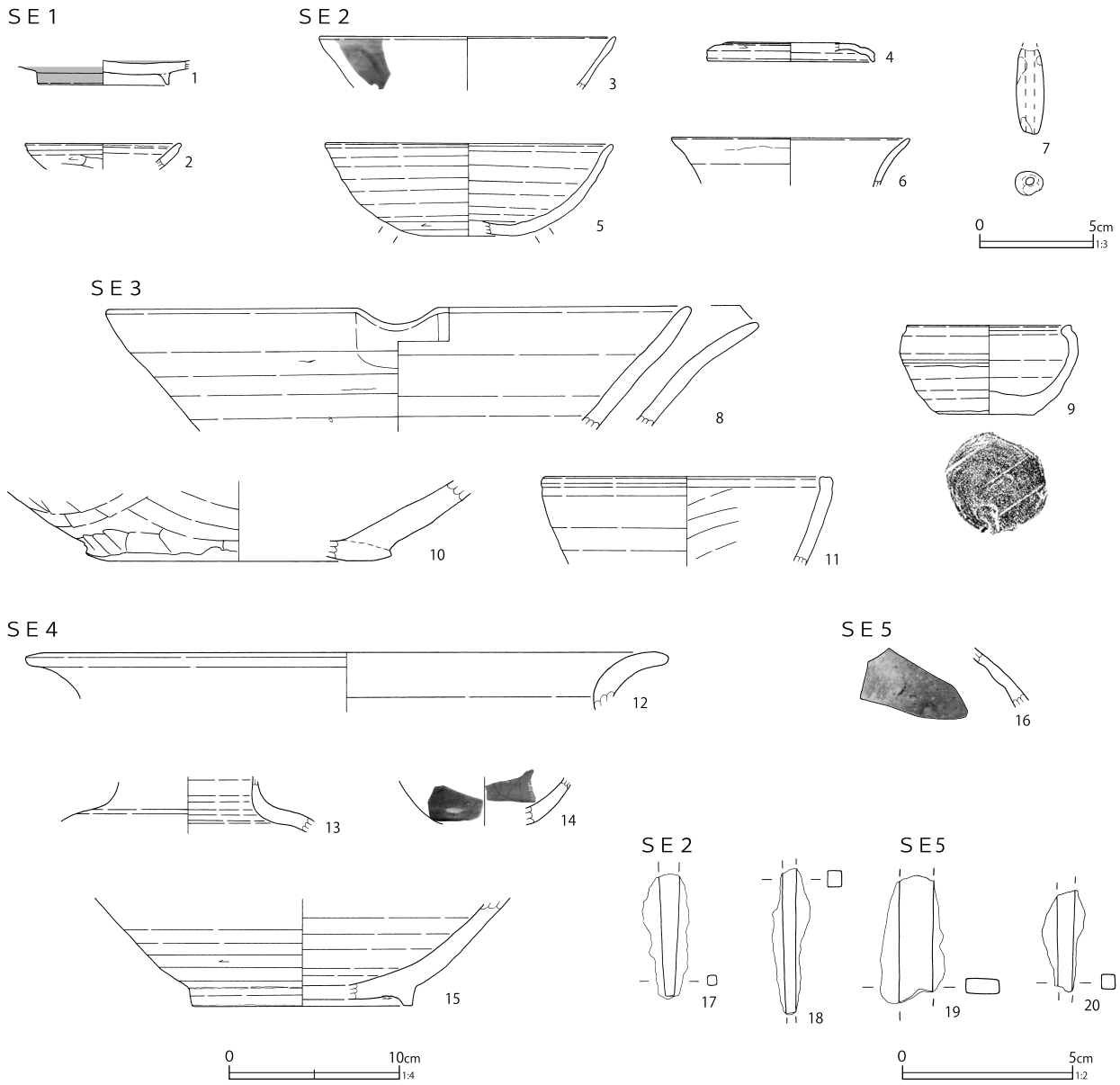
第３号井戸跡出土遺物　８は在地産の瓦質土器の大型片口鉢である。内面に煤が付着する。９は常滑焼の小型の鉢である。灰が多く掛り、口縁部では発泡して薄い青色になっている。10は渥美焼の大甕の底部である。見込み部分に灰が掛る。外面はナデ調整、底面は無調整である。起こすために棒を差し込んだ痕跡がある。11は常滑焼の鉢である。口縁端部を直立させている。いずれも中世に帰属する。

第４号井戸跡出土遺物　12は渥美焼の大甕である。大きく外反し、内面に灰が掛る。13は渥美焼の壺である。外面に自然釉が掛る。14は龍泉窯系青磁の小型の碗である。貫入が多く入る。15は山茶碗である。高台から底部外周はヘラケズリが施され、内面は非常に平滑である。他の用途に転用した可能性がある。

第５号井戸跡出土遺物　16は灰釉陶器の長頸瓶である。中世の壺の可能性がある。

（３）井戸跡出土鉄製品（第36図）

17～20は棒状品である。17以外は上下端を欠失している。断面形は19が長方形、他は方形である。



第 36 図　井戸跡出土遺物

第 13 表　井戸跡出土遺物観察表（第 36 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	皿	－	1.4	(7.8)	ＡＤＩＫ	30	普通	灰白	SE１　猿投窯　見込部重ね焼き無釉	16-14
2	かわらけ	皿	(9.0)	1.5	－	ＡＨ	15	良好	にぶい黄橙	SE１　非ロクロ成形　手捏ね	21-1
3	磁器	碗	(17.4)	3.0	－	Ｉ	5	普通	灰	SE2 SK21　青磁　龍泉窯　外面輪花文	16-15
4	かわらけ	蓋	(10.0)	1.1	－	ＨＩ	5	良好	橙	SE２ SK21	21-1
5	ロクロ土師	坏	(16.8)	5.3	(5.4)	ＡＣＥＨＩＫ	25	良好	橙	SE２ SK21　利根川流域	13-9
6	土師器	甕	(14.1)	2.8	－	ＥＩＫ	10	普通	橙	SE２ SK21	21-1
7	土製品	土錘	長さ 3.7 ㎝　径 1.2 ㎝　孔径 0.3 ㎝　重さ 3.4 ｇ　残存 75%						にぶい黄橙	SE２ SK21	21-1
8	中世土器	片口鉢	(33.8)	7.3	－	Ｉ	20	普通	灰	SE3 SK52　在地産瓦質土器　内面煤付着	21-1
9	陶器	鉢	(9.5)	5.2	5.6	ＩＫ	55	普通	灰白	SE３ SK52　常滑	13-10
10	陶器	甕	－	4.7	(18.0)	ＥＩ	30	普通	灰白	SE３ SK52　渥美	14-1
11	陶器	鉢	(16.6)	5.1	－	ＧＨＩＫ	10	普通	灰褐	SE３ SK52　常滑	21-1
12	陶器	甕	(35.6)	3.4	－	ＥＩ	5	良好	灰	SE４ SK85　渥美	21-1
13	陶器	壺	－	3.2	－	ＤＩＫ	20	良好	灰白	SE４ SK85　渥美	
14	磁器	碗	－	2.7	－	Ｋ	5	良好	灰白	SE４ SK85　龍泉窯　青磁	17-1
15	陶器	鉢	－	6.3	(13.0)	ＥＩＪ	30	普通	灰白	SE４ SK85　山茶碗	14-2
16	灰釉陶器	長頸瓶	－	4.5	－	ＩＫ	10	良好	灰白	SE５ SK90	23-1
17	鉄製品	棒状品	長さ [3.3] ㎝　幅 0.3 ㎝　厚さ 0.3 ㎝　重さ 3.9 ｇ							SE2 SK21	24-5
18	鉄製品	棒状品	長さ [4.2] ㎝　幅 0.4 ㎝　厚さ 0.45 ㎝　重さ 4.1 ｇ							SE２ SK21	24-5
19	鉄製品	棒状品	長さ [3.7] ㎝　幅 1.0 ㎝　厚さ 0.45 ㎝　重さ 7.1 ｇ							SE５ SK90	24-5
20	鉄製品	棒状品	長さ [3.0] ㎝　幅 0.4 ㎝　厚さ 0.45 ㎝　重さ 3.0 ｇ							SE５ SK90	24-5

４．溝跡

（1）概要

今回の調査では、溝跡を 22 条検出した。各溝跡の概要は第 14 表に示した。調査区の全体に分布するが、他の遺構同様にＧ～Ｊ列に集中している。時期の異なる第５号溝跡は軸方向を違えて独立しているが、その他のものは軸方向が共通している。

古代の溝跡（第２・４・８～11･15･18 ～ 20 号）は調査区南側の第２・４号溝跡が東西方向、それ以外は東南東－西北西の軸方向である。いずれも９世紀のロクロ土師器が出土しており、限定された時期に造られたものと考えられる。規則的な配置を持ち、13 ～ 15 ｍ間隔の区画を形成していると推定される。

中世の溝跡（１・７・12・13 号）は第１号溝跡が調査区南側にあるのみで、その他はＩ列より北側に主に分布する。第１号溝跡は幅が４ｍ近くあり、主要な水路であったと考えられる。

近世の溝跡はＧ～Ｉ列の第５号溝跡、Ｌ列の第３号溝跡に限定される。軸方向は南北方向に近く、幅２ｍ前後である。いずれも何らかの区画溝と考えられる。

第 14 号溝跡は重複関係、遺構の分布から中近世と考えられる。

第１号溝跡（第 37 図）

調査区の南側、Ｍ・Ｎ－３・４、Ｎ－５グリッドに位置する。上端の凹凸は上層の撹乱が著しく確認面が一様でなかったことによる。本来の溝幅は中央付近の約４ｍ前後と考えられる。覆土は白色粒子、炭化物を含む黄灰色シルト、粘土で自然堆積である。中世に帰属する。

第２号溝跡（第 37 図）

調査区の南側、Ｍ－３～５グリッドに位置する。上端の凹凸は第１号溝跡と同様の理由による。本来の溝幅は中央付近の約 2.7 ｍ前後と考えられるが、東西両側の上端は判然としなかったため、法量の計測は２箇所で行った。覆土は自然堆積で、粘土を含む黄灰色シルトである。下層はグライ化している。古代に帰属する。

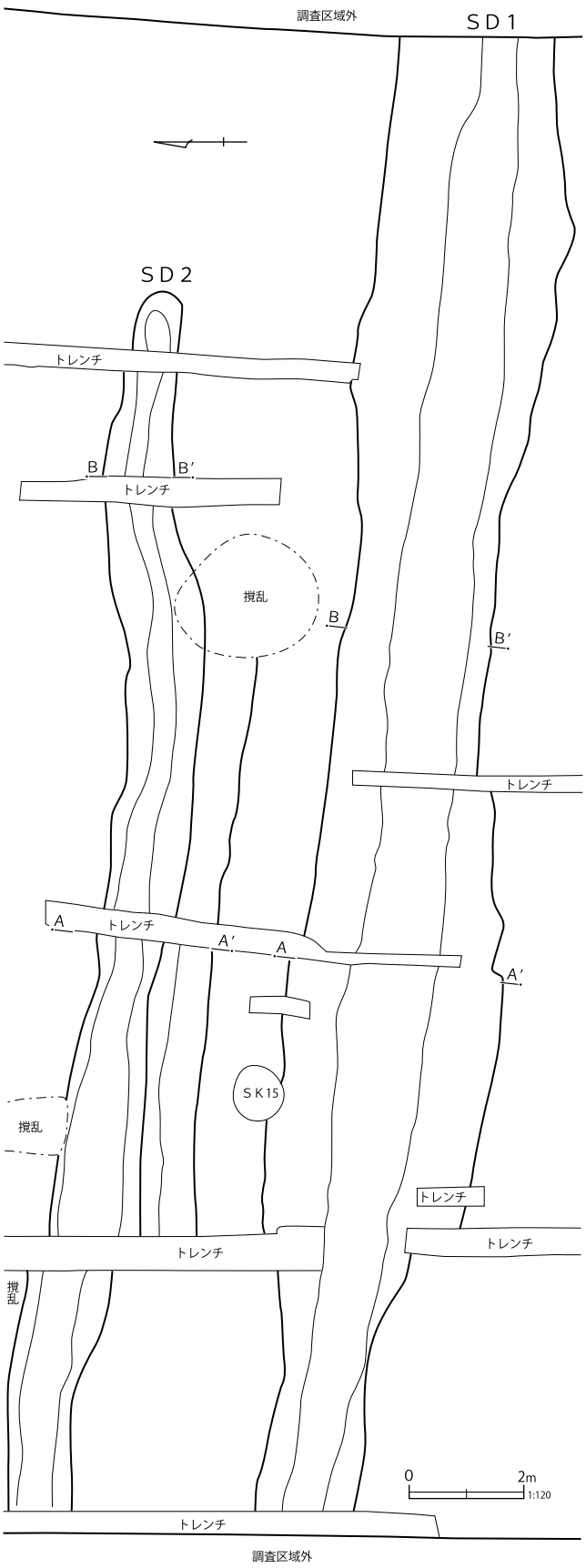
第３号溝跡（第 38 図）

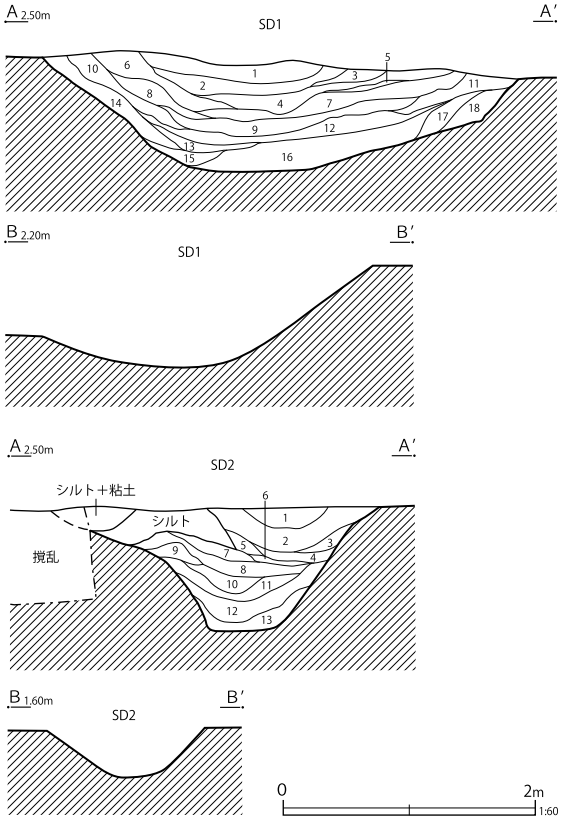
調査区の南側、Ｌ－３～５グリッドに位置する。古代の第 14・17 号土壙を切って造られている。覆土は黄褐色土の単層に近い。古代から近世の遺物が多く出土した。近世に帰属する。

第 14 表　溝跡一覧表（第 37 ～ 41 図）

遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	遺物	備考
１号溝	中世	M･N－３･４､N－５	SK15(旧)	N－80° －W	25.96	1.40～3.77	0.27～0.96	逆台形	灰釉長頸瓶　土師器甕　須恵器坏･甕　ロクロ土師坏　常滑大甕･鉢　山茶碗　青磁碗　銭貨　鉄製品	
２号溝	古代	M－２～５	－	①N－84° －W	21.40	0.78～1.44	0.11～0.56	逆台形	須恵器坏･甕 土師器甕　銭貨	
				②N－82° －W	10.20	2.34～2.70	0.73～0.93	逆台形		
３号溝	近世	L－３～５	SK14･17(旧) I－４－P１	N－89° －W	25.30	0.44～1.79	0.20～0.62	鍋底形	不明把手　かわらけ　志野皿　肥前磁器　瀬戸美濃灰釉皿　須恵器多孔甑･高台付坏･甕　常滑甕	
４号溝	古代	Ｌ－３～５	SK14（旧）	Ｎ－89° －Ｗ	22.50	0.59 ～2.06	0.06 ～0.38	逆台形	須恵器坏　土師器甕	

遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	遺物	備考
5号溝	近世	G·H·I－4、G－5	SJ5(旧) SK61·62(旧) SK64·75 H－4－P9	N－5°－E N－90°	31.60	1.50～1.99	0.43～1.36	箱薬研	陶磁器(明治～昭和) 焙烙 渥美甕 須恵器坏 ロクロ土師坏 内黒 須恵器甕 砥石 火打石 鉄製品	
6号溝	不明	J·K－4·5、L－4	－	N－3°－E N－87°－E	21.10	0.93～1.84	0.20～0.49	皿形		近世の可能性あり
7号溝	中世	I·J－3	－	N－11°－E	6.30	0.54～0.78	0.21～0.41	箱形	渥美甕 かわらけ 土師器甕 須恵器甕 ロクロ土師坏 刀	
8号溝	古代	I－4	SK29(新)	N－75°－W	2.48	0.43～0.58	0.16～0.26	逆台形	土師器甕 須恵器坏 ロクロ土師坏 青磁か?	
9号溝	古代	I－4	I－4－P1·2	N－78°－E N－31°－E	4.02	0.67～1.25	0.05～0.07	皿形	ロクロ土師坏 須恵器坏 土師器甕	
10号溝	古代	J－2·3、K－2	－	N－17°－E	6.35	0.18～0.38	0.05～0.22	皿形	内黒 ロクロ土師坏 須恵器坏	
11号溝	古代	I·J－4·5.	SK12（新）	N－20°－E	9.78	1.25～1.60	0.62～2.35	皿形		
12号溝	中世	I－2·3	SK19 SK39(旧)	N－68°－W	4.68	0.56～0.84	3.38～3.81	逆台形	常滑甕 渥美大甕 羽釜 かわらけ ロクロ土師坏 土師器甕 須恵器坏・高台坏	
13号溝	中世	E～G－3	SD18 SE4(旧)	N－15°－E	27.94	0.62～1.13	0.29～0.74	箱薬研	渥美甕 ロクロ土師坏 土師器甕 須恵器坏	
14号溝	中 近世	D－3·E－3·4	SD16	N－61°－W N－8°－E	17.37	0.32～1.60	0.09～0.52	皿形		
15号溝	古代	D·E－3	SK73 E－3－P2	N－25°－E	10.08	0.28～0.84	0.08～0.25	逆台形	須恵器皿 ロクロ土師坏・高台付坏 土師器坏	
16号溝		E－3	SD14	N－11°－E	4.42	0.27～0.48	0.36～1.07	皿形		近世の可能性あり
17号溝										欠番
18号溝	古代	F－3·4、G－4	SD13（新）	N－65°－W	13.00	0.65～1.59	0.17～0.28	逆台形	須恵器甕 内黒 ロクロ土師坏 土師器甕	
19号溝	古代	G－3·4	－	N－35°－E	5.30	0.40～0.76	0.16～0.20	鍋底形	土師器甕・坏 ロクロ土師坏	
20号溝	古代	E－4	SK74·76(旧) E－4－P1·2	N－68°－W	4.62	0.20～0.52	0.06～0.24	逆台形	須恵器甕 ロクロ土師坏 土師器甕	
21号溝		E－4	－	N－55°－W N－33°－E	2.89	0.19～0.41	0.02～0.10	逆台形		近世の可能性あり
22号溝										第1号畠跡へ変更
23号溝		H·I－4	I－4－P12·13·15	N－10°－E N－47°－E	1.99	0.25～0.41	0.10～0.16	逆台形		近世の可能性あり
24号溝		H－4	SK89 H－4－P11	N－3°－W	1.91	0.17～0.22	0.05～0.10	逆台形		近世の可能性あり





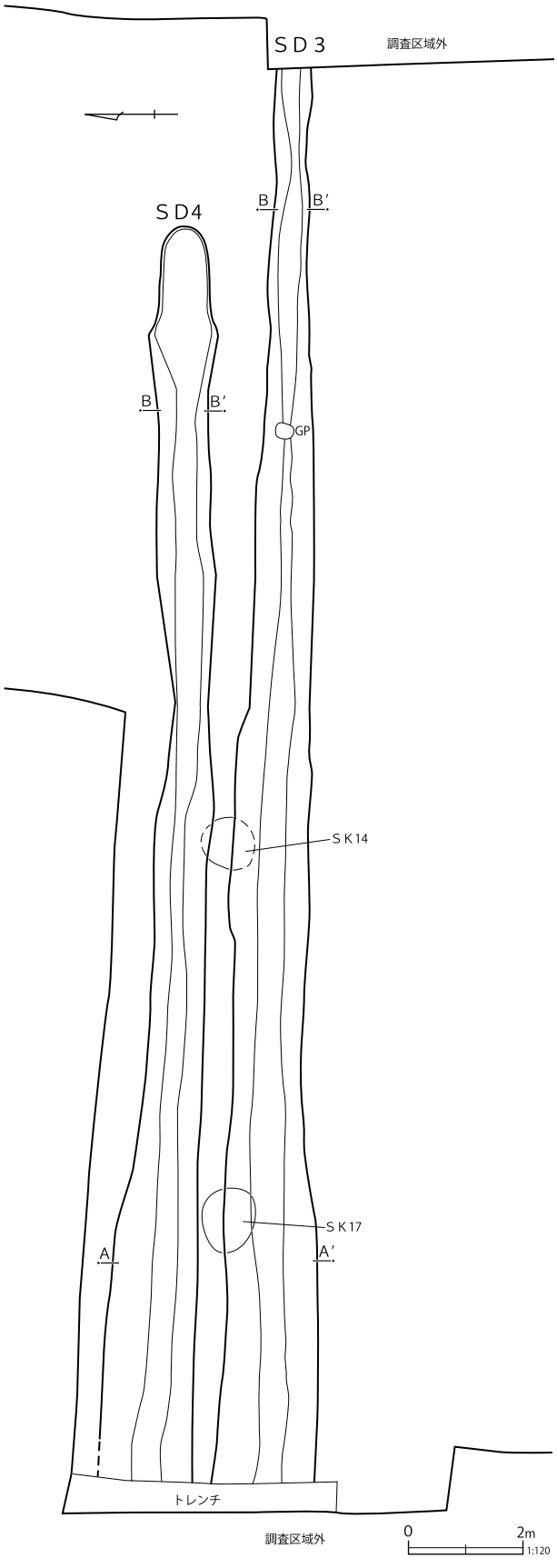
ＳＤ１

1	暗黄褐色土	砂　白色粒子微量　しまり弱い　粘性なし
2	暗灰黄色土	シルト　白色粒子・マンガン粒（小）微量 しまりやや強い　粘性ややあり
3	暗黄灰色土	シルト　白色粒子・炭化物粒子（小）・ マンガン粒（小）微量　しまりやや強い　粘性ややあり
4	黄灰色土	シルト　白色粒子多量　焼土粒子（小）・ 炭化物粒子（小）微量　しまりやや強い　粘性ややあり
5	黄灰色土	シルト　炭化物・焼土粒子多量　粘性ややあり しまり弱い
6	黄灰色土	シルト　白色粒子・炭化物粒・焼土粒子・ マンガン粒（小）微量　しまりやや強い　粘性ややあり
7	黄灰色土	６層と同じ　マンガン粒等の流れ方で分層
8	黄灰色土	６層と同じ　マンガン粒等の流れ方で分層
9		黒色粘土・黄褐色粘土・黄灰色粘土の互層 炭化物粒子（小）微量　しまり強い　粘性あり
10	黄灰色土	シルト　黄灰色粘土多量　しまりやや強い　粘性ややあり
11	黄灰色土	シルト　黄灰色粘土多量　しまりやや強い　粘性ややあり
12	黄灰色土	シルト　黄灰色粘土多量　しまりやや強い　粘性ややあり
13	黄灰色土	粘土　しまりやや強い　粘性あり　土の流れで分層
14	黄灰色土	粘土　しまりやや強い　粘性あり　土の流れで分層
15	黄灰色土	粘土　しまりやや強い　粘性あり　土の流れで分層
16	オリーブ褐色土	砂　しまり弱い　粘性なし
17	黄灰色土	粘土　マンガン粒（小）多量　しまり弱い　粘性あり 土の流れ方で分層
18	黄灰色土	粘土　マンガン粒（小）多量　しまり弱い　粘性あり 土の流れ方で分層

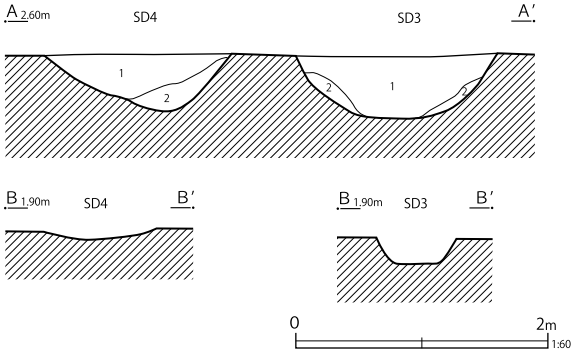
ＳＤ２

1	暗黄褐色土	砂　しまり弱い　粘性なし
2	暗灰黄色土	シルト　褐灰色粘土・砂多量　黄褐色粘土少量 しまりやや強い　粘性ややあり
3	暗黄灰色土	シルト　２層に加えマンガン粒（小）多量
4	暗黄灰色土	シルト　褐灰色粘土・黄褐色粘土多量　しまりやや強い 粘性ややあり
5	暗黄灰色土	シルト　４層よりも黄褐色粘土少量 マンガン粒（小）少量
6	暗黄灰色土	シルト　５層と同じ　土の流れで分層
7	黄灰色土	粘土　黒色粘土少量　黄褐色粘土多量　炭化物粒少量 しまり強い　粘性あり
8	暗黄灰色土	シルト　黄褐色粘土多量　暗灰褐色粘土少量　砂少量 しまり強い　粘性ややあり
9	暗黄灰色土	シルト　８層より砂多量
10	暗黄灰色土	シルト　８層より砂少量　マンガン粒（小）多量
11	暗青灰色土	粘土　青灰色粘土多量　しまり強い　粘性あり
12	暗青灰色土	粘土　焼土粒子微量　しまり強い　粘性あり
13	暗青灰色土	粘土　黄褐色粘土ブロック少量　しまり強い　粘性あり

第 37 図　第１・２号溝跡



第 38 図　第３・４号溝跡（１）



ＳＤ３
1　黄褐色土　シルト　黒褐色土微量　黄灰色粘土粒少量　マンガン粒（径５㎜）・白色粒子微量　しまりやや強い　粘性なし
2　黄褐色土　シルト　黄灰色粘土多量　地山と２層の中間　しまりやや強い　粘性ややあり

ＳＤ４
1　黄褐色土　シルト　黒褐色土ブロック（大）・黄灰色粘土ブロック（大）多量　しまりやや強い　粘性ややあり
2　黄褐色土　シルト　黒褐色土微量　黄灰色粘土粒少量　マンガン粒（径５㎜）・白色粒子微量　しまりやや強い　粘性なし

第 39 図　第３・４号溝跡（２）

第４号溝跡（第 38 図）

調査区の南側、Ｌ－３～５グリッドに位置する。古代の第 14 号土壙を切って造られている。覆土は黒褐色土ブロックを含む黄褐色土で、埋め戻しである。古代に帰属する。

第５号溝跡（第 40・42・43・45 図）

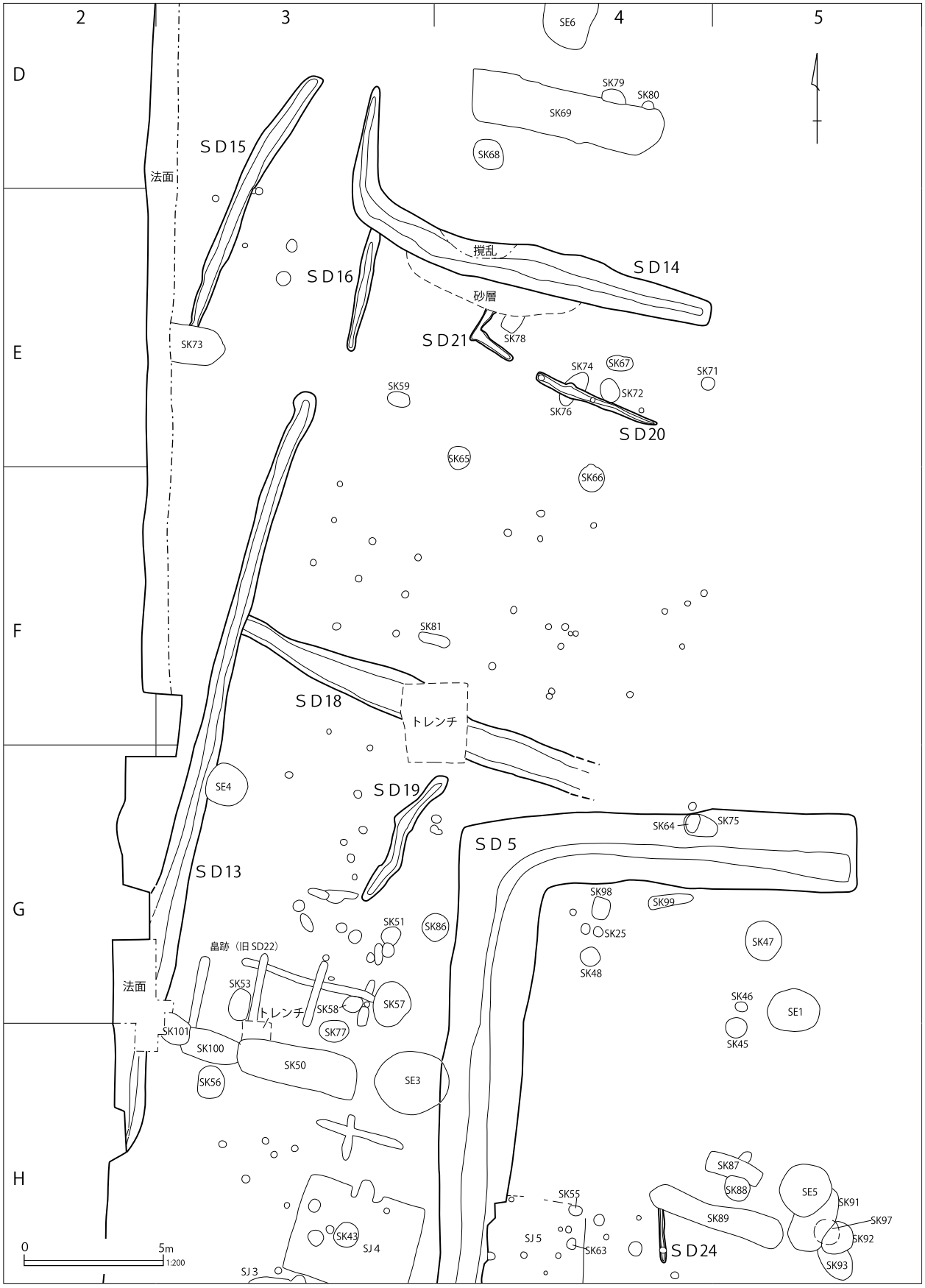
調査区の中央、Ｇ・Ｈ・Ｉ－４、Ｇ－５グリッドに位置する。古代の第５号住居跡、第 64・74 号土壙を切って造られている。覆土は暗褐色土、褐灰色土、黒褐色土で、全体に砂質が強い。古代から近世の多くの遺物が出土した。近世に帰属する。

第６号溝跡（第 41 図）

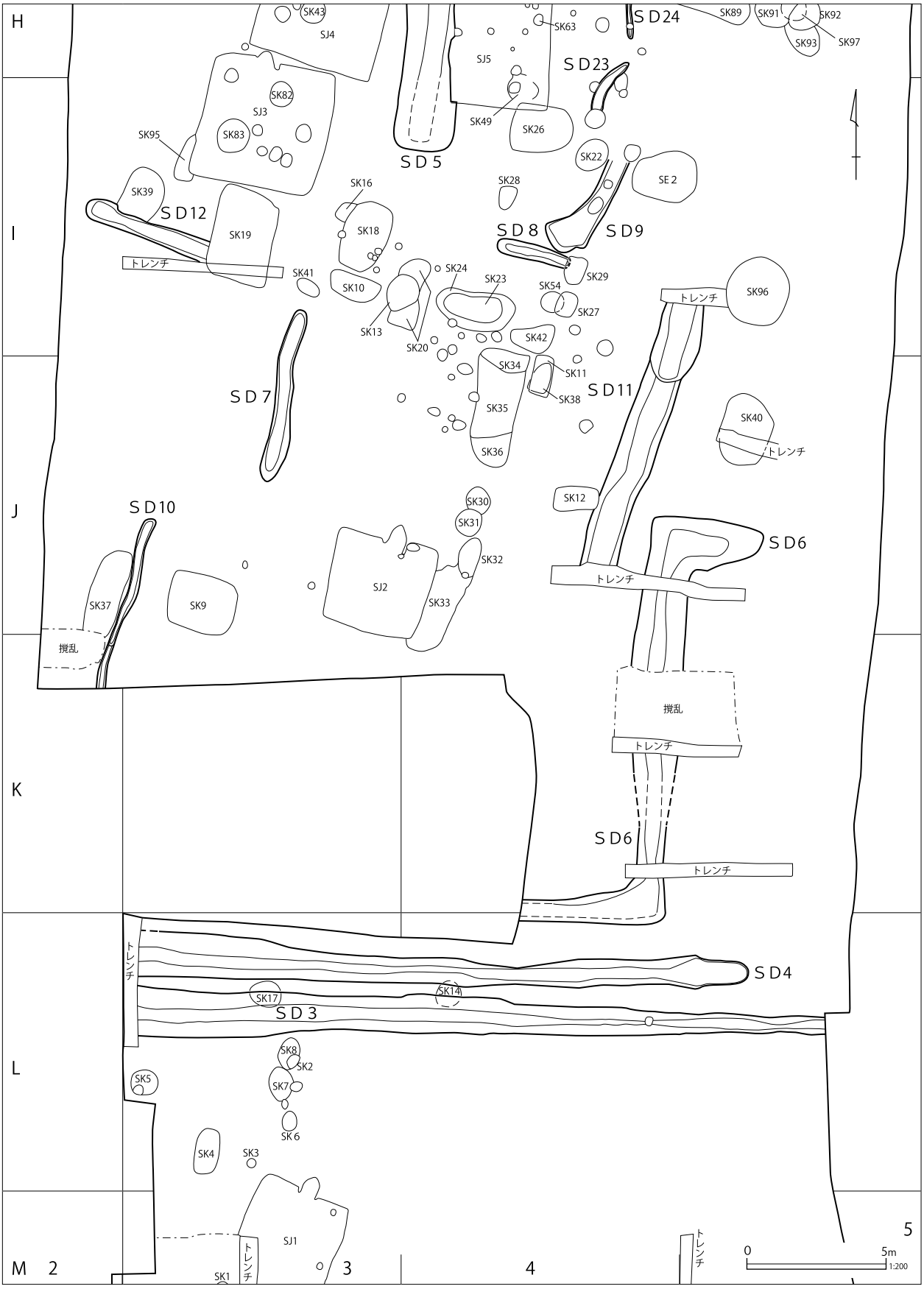
調査区の中央やや南側、Ｊ・Ｋ－４・５、Ｌ－４グリッドに位置する。平面形は鍵の手状である。規模は大きいが出土遺物がなく時期は不明である。覆土は暗褐色シルトの単層である。

第 11 号溝跡（第 41 図）

調査区の中央、Ｉ・Ｊ－４・５グリッドに位置する。古代の第 12 号土壙が、本溝跡埋没後に掘り込まれており、出土遺物はないが古代に帰属すると考えられる。覆土は焼土、炭化物を含む黒褐色土の単層である。



第 40 図　調査区北部溝跡分布図



第 41 図　調査区南部溝跡分布図

第 13 号溝跡（第 40・42 図）

調査区の中央から北側、Ｅ～Ｇ－３、Ｇ・Ｈ－２グリッドに位置する。南北方向に長く延び、北側の延長上に第 14・16 号溝跡が存在する。古代の第 18 号溝跡、中世の第４号井戸跡の埋没後に掘り込まれており、渥美の大甕が出土していることから中世に帰属すると考えられる。覆土は自然堆積で、黄褐色土を含む灰黄褐色土、褐灰色土である。

第 14 号溝跡（第 40 図）

調査区の北側、Ｄ－３、Ｅ－３・４グリッドに位置する。Ｌ字状の平面形である。規模は大きいが出土遺物がなく時期は不明だが、中世の第 13 号溝跡と遺構の西側が同一の軸方向であることから中近世に帰属すると考えられる。

（２）溝跡出土遺物（第 42 図）

第１号溝跡出土遺物　１は龍泉窯系青磁の碗である。外面は鎬蓮弁が半肉彫りされている。２は山茶碗の片口鉢で、内面に自然釉が掛る。３は常滑焼の鉢で、端部に段がある。内面に隙間なく灰が付着している。４は渥美焼の大甕の胴部下位の破片である。外面には丁寧な縦方向のナデが施され、印判状に格子目タタキが施されている。５は灰釉陶器の長頸瓶である。猿投窯産である。６はロクロ土師器の甑である。複合口縁を呈する。７は用途不明の土製品である。下面に砂が付着している。

第２号溝跡出土遺物　８は下総産のロクロ土師器の坏、９は南比企産の須恵器甕である。

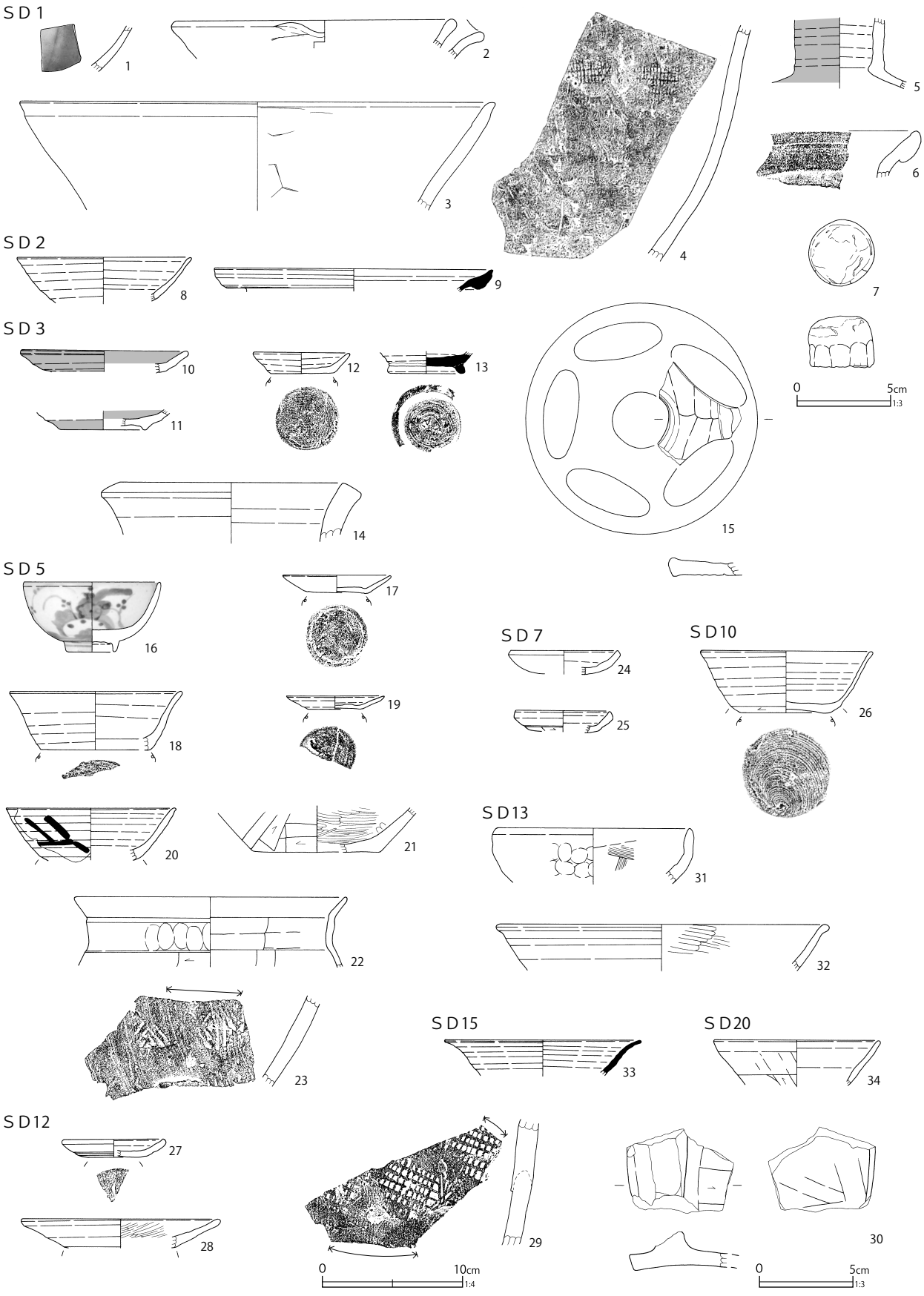
第３号溝跡出土遺物　10 は志野皿である。11 は瀬戸美濃の菊皿である。灰釉が掛けられている。12 はごく小型のロクロ成形のかわらけである。底面は回転糸切である。下総産である。13 は南比企産の須恵器高台付埦である。底面にはヘラナデが加えられている。14 は常滑焼の壺である。口縁端部が分厚い。三筋壺の口縁の可能性がある。15 はロクロ土師器の孔甑の底部である。中央と外周の２孔が確認できる。内面ヘラナデ、底面無調整である。

第５号溝跡出土遺物　16 は肥前系磁器の所謂くらわんか碗である。外面に草花文、高台には圏線が描かれている。17・19 はロクロ成形のかわらけである。底面は回転糸切りである。17 は内面の引き上げ痕が明瞭である。18・20 は下総産のロクロ土師器の坏である。18 は風化著しく、20 は外面下半に「𠂉」の墨書が描かれている。22 は土師器のコの字甕である。胎土は角閃石を多く含む。21 は下総産のロクロ土師器の鉢である。外面と底面はヘラケズリ、内面はヘラ磨きである。23 は渥美焼の大甕の破片を用いた転用砥具である。使用箇所を矢印で示した。外面はタタキ目を刷毛目でナデ消している。内面はナデである。

第７号溝跡出土遺物　24・25 は非ロクロ成形の手捏ねかわらけである。24 は下半にヘラケズリとヘラナデが加えられている。

第 12 号溝跡出土遺物　27 は非ロクロ成形の手捏ねかわらけである。底面はヘラケズリである。28 は下総産のロクロ土師器の坏である。底面にはヘラケズリが、内面にはヘラ磨きが施されている。29 は常滑焼大甕を用いた転用砥具である。使用箇所を矢印で示した。接合箇所には印判が見られる。30 は置きカマドである。これ以外にも同一個体と考えられる破片が第４号住居跡、Ｈ－３グリッドから出土している。いずれも調整、胎土、色調が共通しており、同一個体の可能性がある。焚口部横の直立する部分の破片である。残存高 5.2cm である。器面の調整は第４号住居跡 33 と同様である。ロクロ土師質で、下総産と考えられる。

第 13 号溝跡出土遺物　31 は非ロクロ成形の手捏ねかわらけである。体部は指オサエ痕が顕著である。内面は刷毛目である。口縁部には横ナデが加えられている。32 は下総産のロクロ土師器の鉢である。内面はヘラ磨きが施されている。


SD1
SD2
SD3
SD5
SD7
SD10
SD13
SD15
SD20
SD12
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0 5cm 1:3
0 10cm 1:4
0 5cm 1:3

第 42 図　溝跡出土遺物

第 15 表　溝跡出土遺物観察表（第 42 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	－	3.1	－	ＩＫ	5	良好	灰白	SD１　青磁　龍泉窯	17-２
2	陶器	片口鉢	(19.8)	2.6	－	ＥＪＫ	10	良好	灰白	SD１　山茶碗	21-２
3	陶器	鉢	(33.9)	8.2	－	ＡＥＨＩＪ	5	普通	にぶい橙	SD1　常滑	21-２
4	陶器	甕	－	16.3	－	ＥＨＩＫ	5	普通	灰	SD1　渥美	21-２
5	灰釉陶器	長頸瓶	－	5.0	－	ＩＫ	40	良好	灰白	SD1　猿投産	14-３
6	ロクロ土師	甑	－	2.6	－	ＡＥＩＪＫ	5	普通	灰黄褐	SD１	21-２
7	土製品	不明	3.5	2.7	－	ＥＧＨＩ	95	普通	浅黄橙	SD１	14-４
8	ロクロ土師	坏	(12.4)	3.1	－	ＥＩＪ	10	普通	にぶい橙	SD２　下総	21-２
9	須恵器	甕	(20.0)	1.6	－	ＩＪＫ	5	良好	灰	SD２　南比企	21-２
10	陶器	皿	(11.6)	1.5	－	ＩＫ	10	普通	灰白	SD３　志野皿	21-２
11	陶器	皿	－	1.4	(6.0)	Ｋ	20	普通	灰	SD３　瀬戸美濃菊皿　灰釉	
12	かわらけ	皿	6.8	1.5	4.5	ＡＥＨＩＫ	95	普通	橙	SD３　下総	14-５
13	須恵器	埦	－	1.5	(5.6)	ＡＨＩＪＫ	70	良好	灰	SD３　南比企	
14	陶器	壺	(16.0)	4.2	－	ＥＩ	10	普通	灰	SD３　常滑	21-２
15	ロクロ土師	甑	－	1.3	－	ＡＨ	15	普通	灰黄褐	SD３　多孔甑	21-２
16	磁器	碗	9.7	4.9	3.7	ＩＫ	95	良好	灰白	SD５　肥前系磁器　草花文	14-６
17	かわらけ	皿	7.8	1.3	4.2	ＥＨＪＫ	95	普通	橙	SD５　ロクロ成形　18 ～ 19 Ｃ	14-７
18	ロクロ土師	坏	(12.2)	5.1	(7.8)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	SD５　下総	14-８
19	かわらけ	皿	(7.0)	0.9	(3.8)	ＡＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	SD５　ロクロ成形　18 ～ 19 Ｃ	14-９
20	ロクロ土師	坏	(12.0)	3.7	－	ＡＨＩ	20	普通	にぶい橙	SD５　下総　外面墨書　「〒」	17-３
21	ロクロ土師	鉢	－	3.2	(9.0)	ＡＣＥＨＪ	20	普通	橙	SD５　下総	
22	土師器	甕	(19.4)	5.0	－	ＣＨＩＪＫ	10	普通	にぶい橙	SD５　利根川流域	21-２
23	陶器	甕	－	6.5	－	ＥＩＫ	5	良好	灰	SD５　渥美　転用砥具	21-２
24	かわらけ	皿	(7.6)	1.7	－	ＥＨＫ	20	普通	にぶい橙	SD7 非ロクロ成形 手捏ね 12C 後～ 13 C前	21-３
25	かわらけ	皿	(6.6)	1.4	－	ＡＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	SD７　非ロクロ成形　手捏ね　12～13Ｃ	21-３
26	ロクロ土師	坏	(12.2)	4.3	6.4	ＡＥＩＪ	40	普通	にぶい黄橙	SD10　下総　内黒	
27	かわらけ	皿	(7.1)	1.2	(4.7)	ＥＩＫ	15	普通	橙	SD12　非ロクロ成形　手捏ね　12C後~13C前	
28	ロクロ土師	坏	(14.0)	2.0	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	SD12　下総	21-３
29	陶器	甕	－	9.0	－	ＥＩ	5	普通	灰黄褐	SD12　常滑　12 ～ 13 Ｃ　転用砥具	21-３
30	土製品	置きカマド	幅 [5.2] ㎝　高 さ [4.5] ㎝　厚さ [1.7] ㎝			ＡＥＨＩＫ	－	良好	にぶい橙	SD12　下総	22-２
31	かわらけ	鉢	(13.7)	3.9	－	ＣＩＫ	10	不良	灰黄褐	SD13 非ロクロ成形 手捏ね 12C後~13C前	21-３
32	ロクロ土師	鉢	(23.3)	3.3	－	ＡＨＩ	10	普通	にぶい橙	SD13　下総	21-３
33	須恵器	皿	(14.0)	2.5	－	ＡＩＪＫ	10	良好	灰	SD15　南比企	21-３
34	ロクロ土師	坏	(11.9)	3.2	－	ＣＥＨＩＫ	10	普通	橙	SD20　利根川流域	21-３

第 20 号溝跡出土遺物　34 は利根川流域産のロクロ土師器の坏である。外面はヘラケズリが全体に施され上半は横ナデが加えられている。

（3）溝跡出土石製品（第 43 図）

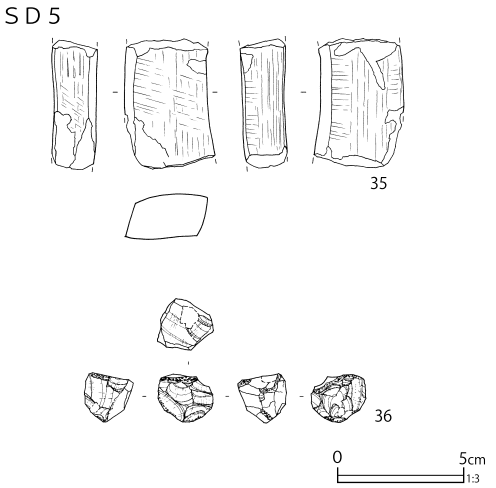
35 は凝灰岩製の砥石である。使用面は四面である。上下端を欠失する。36 は玉髄製の火打石である。全体的に稜が摩耗しており、部分的に褐色に変色している。

（4）溝跡出土鉄製品（第 45 図）

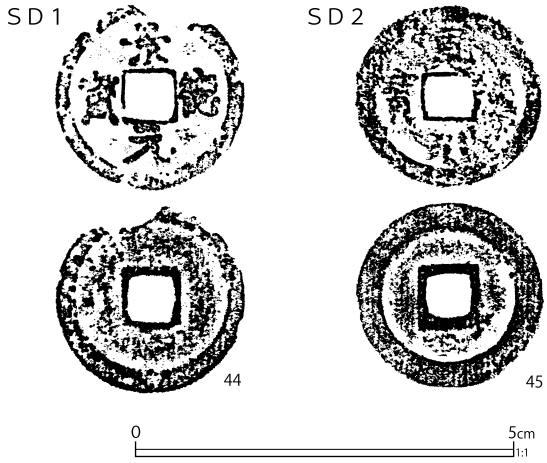
37・39 は棒状品である。断面形は方形で、上下端を欠失している。40 は釘である。脚部を欠失する。断面形は長方形である。38 は延べ板状の銅製品である。Ｌ字状になると思われるが用途は不明である。両端を欠失する。41・43 は用途不明の延べ板状の鉄製品である。43 は側縁が２面残存している。42 は刀である。両関で両側とも段を持つ。

（5）溝跡出土古銭（第 44 図）

44 は景徳元寶（景徳元年（1004）初鋳）で、銭径 25.0mm、銭厚 1.0mm、重量 2.4 g。45 は新寛永で銭径 24.0mm、銭厚 1.0mm、重量 3.4 g。



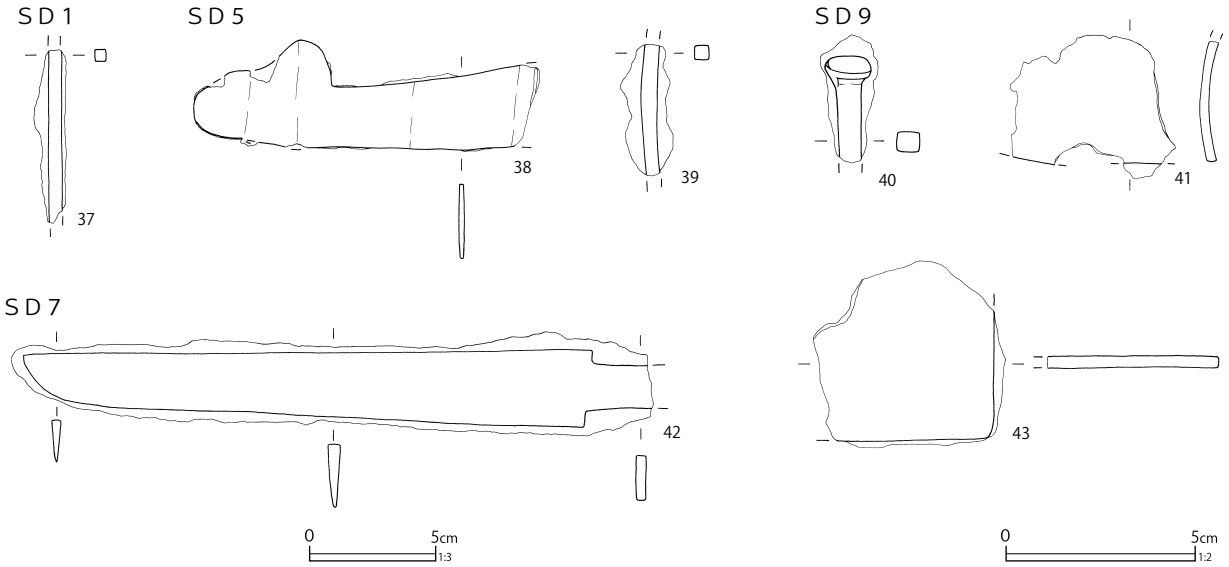
第 43 図　溝跡出土石製品



第 44 図　溝跡出土銭

第 16 表　溝跡出土石製品観察表（第 43 図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
35	砥石	凝灰岩	(5.1)	(3.6)	(1.9)	47.60	SD５	
36	火打石	玉髄	1.9	2.2	1.9	7.90	SD５	17-4



第 45 図　溝跡出土鉄製品

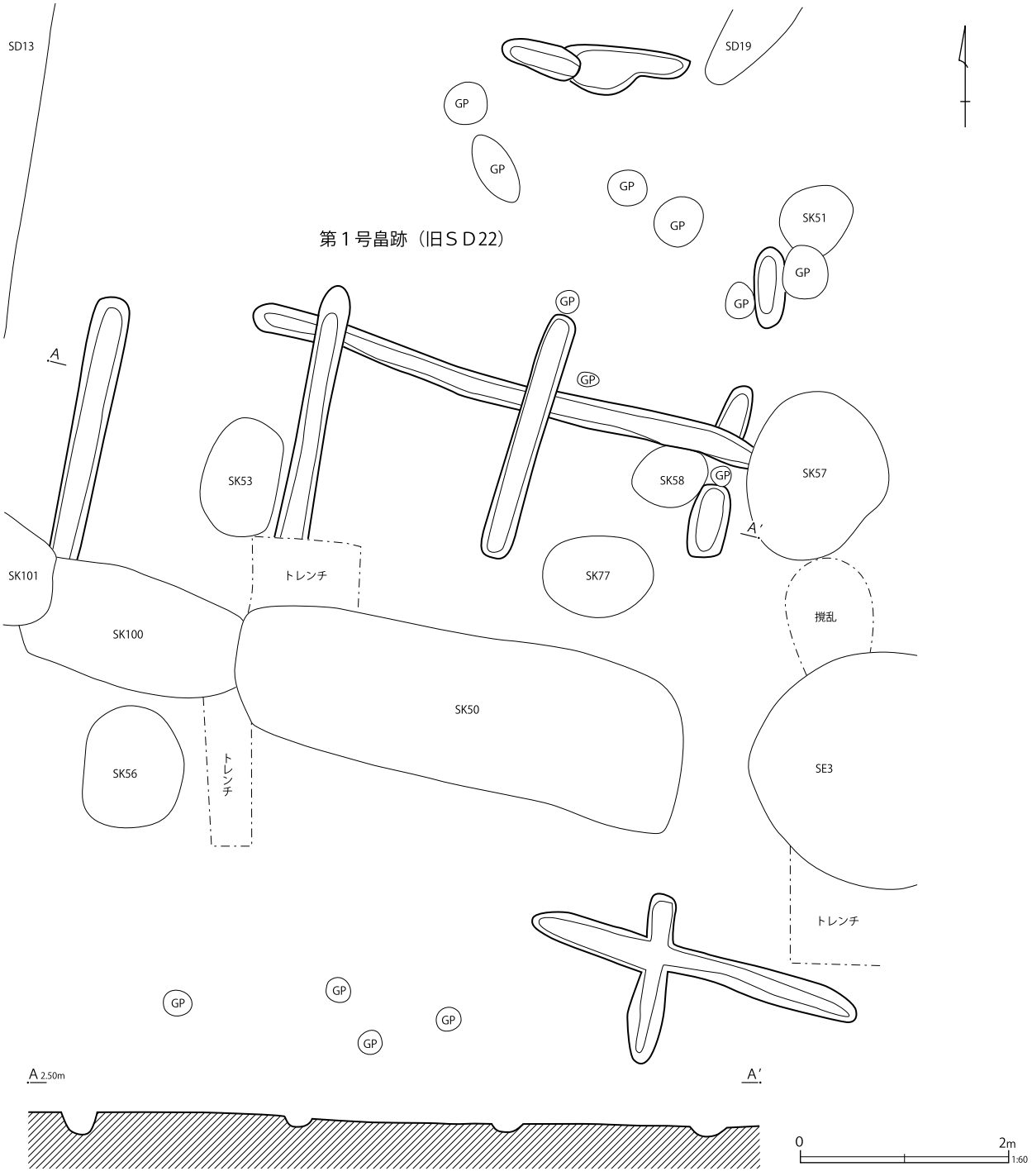
第 17 表　溝跡出土鉄製品観察表（第 45 図）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
37	棒状品	[4.5]	0.3	0.3	4.0	SD１	24-4
38	延べ板状品	[9.2]	[2.9]	0.1	12.5	SD５　銅製品	24-4
39	棒状品	[3.4]	0.4	0.4	5.3	SD５	24-4
40	釘	[2.8]	0.6	0.5	8.2	SD９	24-4
41	延べ板状品	[3.4]	[4.3]	0.2	17.2	SD９	24-4
42	刀	長さ [24.5] cm　刃長 22.2 cm　刃幅 2.5 cm 背幅 0.45 cm			243.5	SD７　№ 1	17-5
43	延べ板状品	[4.7]	[4.7]	0.3	44.9	SD９	24-4

５．畠跡

第１号畠跡（第 46 図）

調査区の中央西側、G・H－３グリッドで検出した。さく跡の走行方向はＮ－ 17° －Ｅで、約 1.8 ｍの間隔で掘り込まれている。幅 0.30 ～ 0.40 ｍ、長さは短く 2.5 ｍほどである。深さは 0.1 ～ 0.3 ｍである。直交する方向に長さ５ｍの別の単位のさく跡が認められる。覆土は確認できなかった。遺物は出土していないが、古代の第 57・58 号土壙が本遺構埋没後に掘り込まれていることから、古代に帰属すると考えられる。



第 46 図　第 1 号畠跡

6．ピット

調査区全体からピットを137基検出した。F・G－3・4グリッドに集中して分布する。建物跡や柵列のような配置と考えられる部分もあるが、間隔、深度等に規則性を欠いており、確定するには至らなかった。

平面形は円形もしくは楕円形で、径0.30～0.50ｍのものが大部分である。深さは0.10～1.20ｍと幅があるが、0.25～0.50ｍのものが大部分である。

出土遺物がなく、時期区分は行えなかった。これらの位置、規模、重複関係については第18表に示した。

第18表　ピット一覧表（第47・48図）　　単位：m

グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
M－3	P1	0.23	0.19	0.08	SJ1
M－3	P2	0.26	0.21	0.13	SJ1
L－3	P1	0.34	0.23	0.10	SK7
L－3	P2	0.43	0.36	0.11	SK7
L－3	P3	0.36	0.34	0.36	SK5
L－4	P1	0.33	0.28	0.23	SD3
J－3	P1	0.26	0.26	0.26	
J－3	P2	0.26	0.18	0.27	
J－3	P3	0.30	0.29	0.17	
J－4	P4	0.21	0.17	0.08	SJ2
J－4	P1	0.41	0.32	0.18	
J－4	P2	0.57	0.40	0.18	
J－4	P3	0.24	0.20	0.27	
J－4	P4	0.45	0.39	0.19	
J－4	P5	0.26	0.25	0.09	
J－4	P6	0.48	0.36	0.11	
J－4	P7	0.23	0.20	0.17	
J－4	P8	0.47	0.42	0.19	
J－4	P9	0.31	0.27	0.25	
J－4	P10	0.40	0.36	0.31	SK35
J－4	P11	0.24	0.21	0.30	SK32･33
J－4	P12	0.46	0.27	0.35	SJ2
J－4	P13	－	－	－	断面のみ　SK33
I－3	P1	0.51	0.50	0.14	SJ3
I－3	P2	0.28	0.27	－	SK18
I－3	P3	0.62	0.54	0.26	SJ3
I－3	P4	0.50	0.40	0.36	SJ3
I－3	P5	0.54	0.42	0.33	SJ3
I－3	P6	0.37	0.33	0.19	SJ3
I－3	P7	0.40	0.36	0.15	SJ3
I－3	P8	0.23	0.20	－	SK18
I－3	P9	0.26	0.24	－	SK18
I－3	P10	0.27	0.26	0.36	
I－3	P11	0.22	0.21	－	
I－3	P12	0.20	0.18	0.27	SK18
I－4	P1	0.22	0.22	0.29	SD9
I－4	P2	0.68	0.40	0.20	SD9
I－4	P3	0.32	0.29	0.21	SK24
I－4	P4	0.22	0.22	0.12	
I－4	P5	0.38	0.28	0.11	
I－4	P6	0.42	0.31	0.21	
I－4	P7	0.35	0.33	0.25	
I－4	P8	0.47	0.38	0.35	SK49(SJ5内)
I－4	P9	0.40	0.36	0.16	
I－4	P10	0.59	0.57	0.20	
I－4	P11	0.26	0.24	0.16	
I－4	P12	0.38	0.28	0.14	SD23
I－4	P13	0.68	0.46	0.18	SD23　P14
I－4	P14	0.32	0.29	0.23	P13
I－4	P15	0.69	0.52	0.13	SD23
I－4	P16	0.64	0.56	0.17	
I－4	P17	0.20	0.18	0.12	
H－3	P1	0.48	0.43	0.07	SJ4
H－3	P2	0.29	0.28	0.10	SJ4
H－3	P3	0.56	0.54	0.46	SJ4
H－3	P4	0.20	0.20	0.08	SJ4
H－3	P5	0.26	0.25	0.36	
H－3	P6	0.24	0.23	0.22	
H－3	P7	0.24	0.23	0.32	
H－3	P8	0.23	0.23	0.29	
H－3	P9	0.30	0.27	0.25	
H－3	P10	0.22	0.19	0.21	
H－3	P11	0.25	0.23	－	
H－4	P1	0.18	0.17	0.08	SJ5
H－4	P2	0.16	0.16	－	SJ5
H－4	P3	0.24	0.21	0.09	SJ5
H－4	P4	0.20	0.18	－	SJ5
H－4	P5	0.14	0.13	－	SJ5
H－4	P6	0.39	0.34	0.21	SJ5
H－4	P7	0.23	0.23	－	SJ5
H－4	P8	0.53	0.48	0.35	
H－4	P9	0.26	0.28	0.10	SJ5
H－4	P10	0.16	0.15	－	
H－4	P11	0.25	0.21	0.19	SD24
H－4	P12	0.28	0.26	－	
H－4	P13	0.43	0.40	0.15	SJ5
H－4	P14	0.20	0.19	－	SJ5
H－5	P1	0.40	0.36	0.15	SK87(新)
G－3	P1	0.27	0.24	0.24	
G－3	P2	0.22	0.21	0.28	
G－3	P3	0.30	0.27	0.24	
G－3	P4	0.30	0.27	0.27	
G－3	P5	0.24	0.22	0.15	
G－3	P6	0.31	0.16	0.13	
G－3	P7	0.21	0.17	0.14	
G－3	P8	0.22	0.23	0.25	
G－3	P9	0.38	0.34	0.16	
G－3	P10	0.50	0.45	0.14	
G－3	P11	0.23	0.22	0.19	
G－3	P12	0.22	0.14	0.31	
G－3	P13	0.34	0.28	0.03	
G－3	P14	－	-	－	欠番
G－3	P15	0.20	0.19	0.12	第1号畠跡
G－3	P16	0.34	0.30	0.21	
G－3	P17	0.46	0.28	0.16	
G－3	P18	0.51	0.44	0.20	SK51
G－3	P19	0.71	0.35	0.11	
G－4	P1	0.23	0.23	0.23	
G－4	P2	0.38	0.31	0.07	
G－4	P3	0.28	0.28	0.19	
F－3	P1	0.20	0.19	0.20	
F－3	P2	0.20	0.17	0.17	
F－3	P3	0.25	0.26	0.24	
F－3	P4	0.25	0.23	0.23	
F－3	P5	0.24	0.22	0.20	
F－3	P6	0.25	0.23	0.20	
F－3	P7	0.26	0.24	0.16	
F－3	P8	0.30	0.28	0.11	
F－3	P9	0.24	0.22	0.17	
F－3	P10	0.20	0.17	0.22	
F－4	P1	0.27	0.26	0.19	
F－4	P2	0.29	0.24	0.22	
F－4	P3	0.22	0.20	0.23	
F－4	P4	0.20	0.19	0.21	
F－4	P5	0.26	0.22	0.21	
F－4	P6	0.22	0.19	0.17	
F－4	P7	0.27	0.25	0.13	
F－4	P8	0.17	0.15	0.08	P9
F－4	P9	0.19	0.19	0.05	P8
F－4	P10	0.23	0.20	0.14	
F－4	P11	0.21	0.20	0.21	
F－4	P12	0.21	0.17	0.11	
F－4	P13	0.25	0.22	0.22	
F－4	P14	0.19	0.18	0.21	
F－4	P15	0.24	0.23	0.22	
F－4	P16	0.22	0.21	0.19	P17
F－4	P17	0.22	0.22	0.20	P16
F－4	P18	0.28	0.25	0.22	
E－3	P1	0.24	0.24	0.07	
E－3	P2	0.19	0.14	0.19	SD15　P3
E－3	P3	0.27	0.26	0.22	P2
E－3	P4	0.20	0.18	0.25	
E－3	P5	0.45	0.38	0.29	
E－3	P6	0.53	0.40	0.13	
E－4	P1	0.22	0.20	0.13	SD20
E－4	P2	0.18	0.15	0.19	SD20
E－4	P3	0.20	0.19	0.27	

第 47 図　グリッドピット（1）

第 48 図　グリッドピット（2）

７．グリッド出土遺物

調査区全体の表土掘削から遺構確認において古代から近世の多量の遺物が出土した。特にＨ・Ｉグリッド列から集中して出土した。

４・５は同安窯系青磁である。やや黄色身の強い釉薬で、見込みに花文を施している。５は外面にヘラにより縦方向に片彫りの文様が入れられている。６は置きカマドである。開口部の下端で底面がある。鍔から分岐した突帯が底面のやや上位を巡っている。タタキ目後ヘラナデで、胎土、焼成が共通することから、第４号住居跡出土資料と同一個体の可能性が高い。７～９・11・18～21は龍泉窯系青磁である。７・９・21は皿、その他は碗である。８は無文で貫入が多く入る。９・13は見込みに花文が、14は外面に鎬の無い蓮弁が描かれている。11は高台が剥がれている。22は常滑焼の胴部破片で印判が認められる。24は南比企産の大型甑である。酸化焔焼成である。25は常滑焼の壺である。26は東金子産の瓶類の胴部下半で「十」の線刻が施されている。27は利根川流域産のロクロ土師器で底面に「兀」の墨書が描かれている。28は口縁部の外面に「丌」が書かれている。34は支脚である。全体にヘラナデが加えられている。風化が著しい。35は大型の土錘である。全体に欠けているが、径４cm、長さ10cmほどになると考えられる。36～55は土錘である。36は粘土を棒に巻き付けた斜めのナデの痕跡が明瞭に認められる。

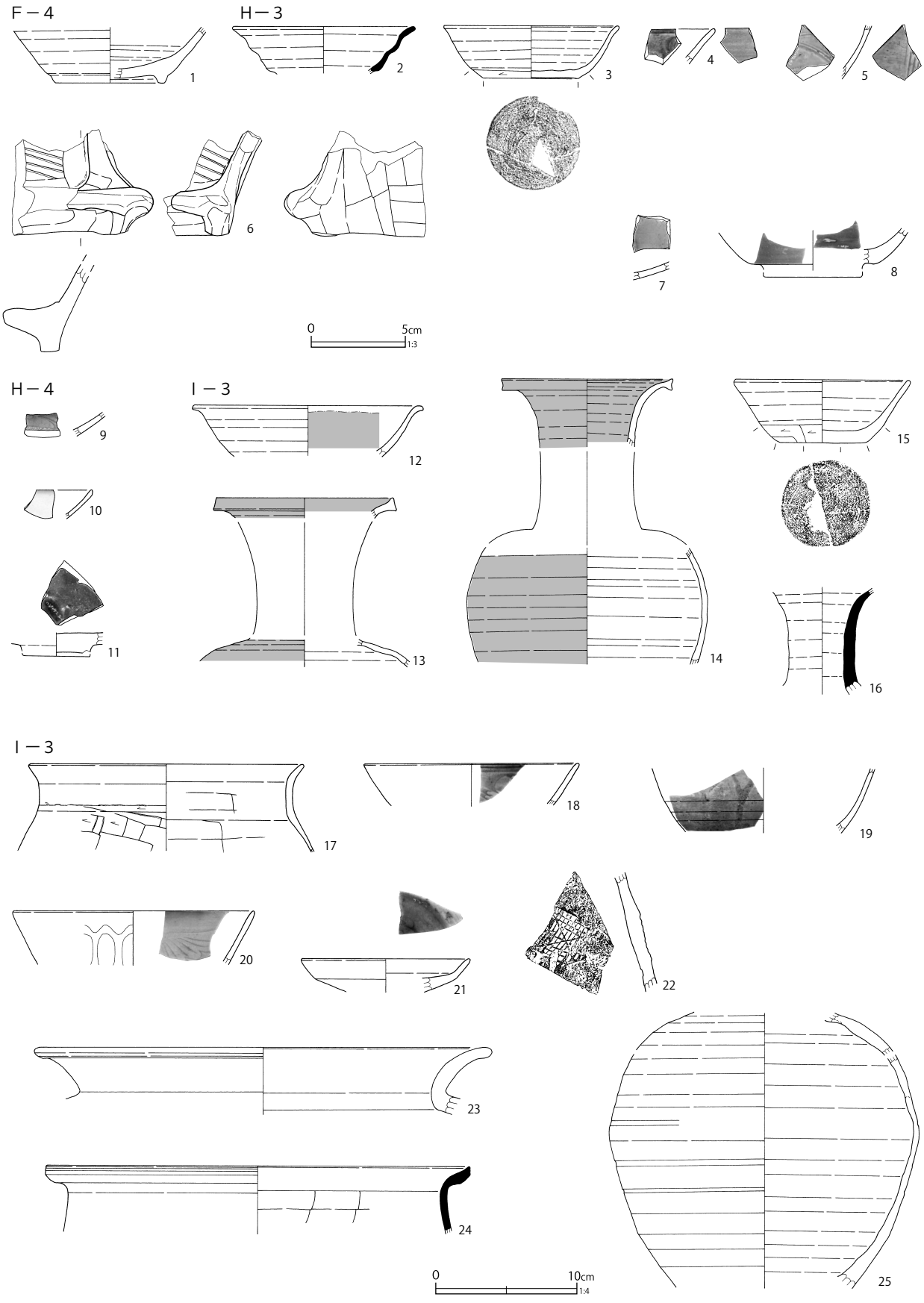
56は紡錘車である。葉ろう石製で全体に細かい傷が多く付いている。57・58は近世の硯である。使いこまれており、海の部分が凹んでいる。58は裏面に人の顔が線刻されている。

59～62は鉄製品である。59は袋状鉄斧で完形である。肩部は丸みを持ち刃部に向かって広がっている。袋部の横断面は長方形である。刃先は太く丸みを持っている。古代と考えられる。61は馬具である。轡の立聞部の上端である。壺部は横断面長方形で、立聞部は直線的である。錆が進み壺部と一体であるかは不明である。

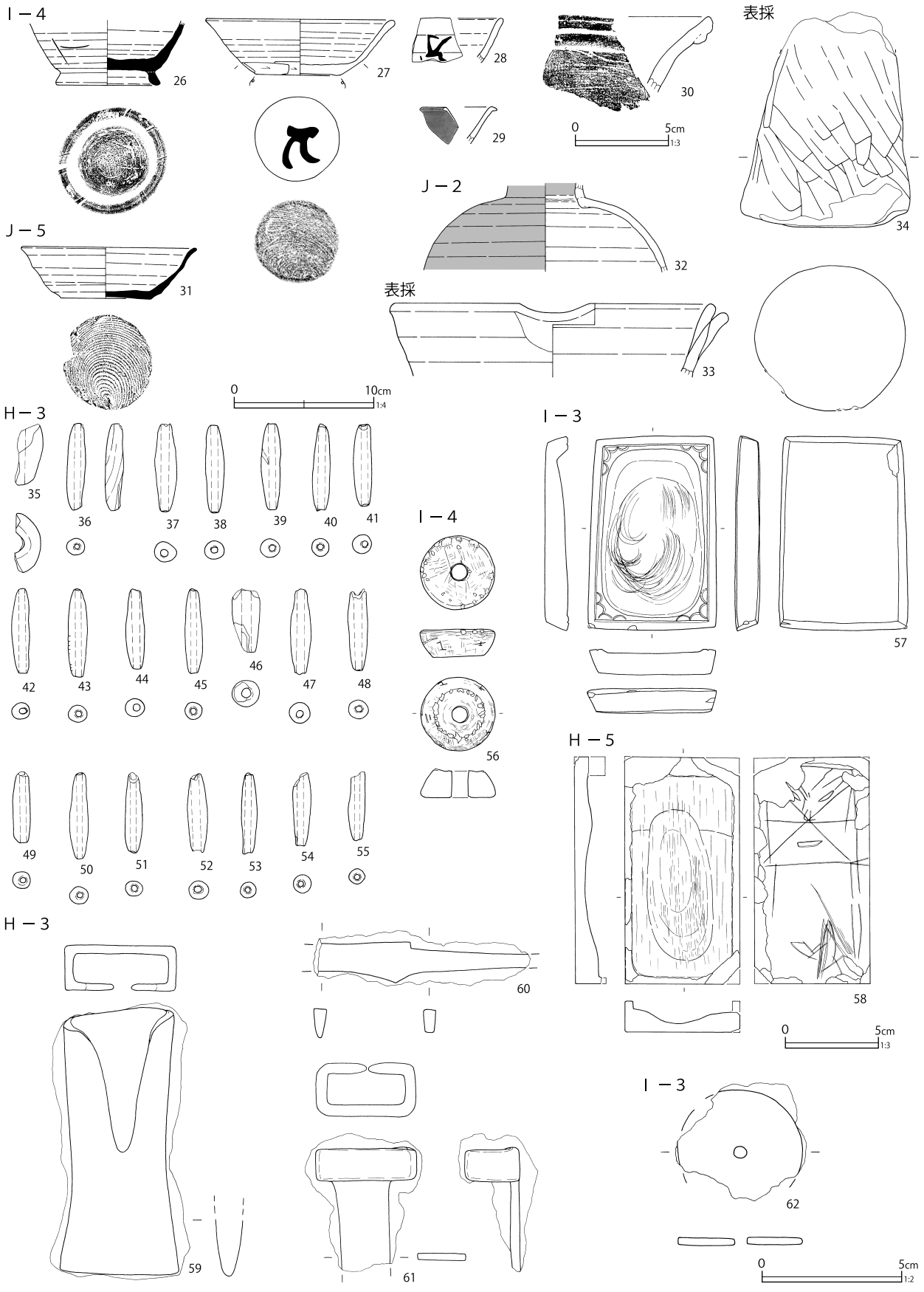
第19表　グリッド出土遺物観察表（第49・50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	鉢	－	3.95	(7.8)	ＡＥＩＫ	20	普通	黄灰	F-４Ｇ　山茶碗	14-10
2	須恵器	坏	12.7	3.3	－	ＡＩＫ	25	普通	灰	H-３Ｇ　南比企　鳩山Ⅷ期	22-１
3	ロクロ土師	坏	12.4	3.7	6.7	ＣＨＩＫ	50	普通	橙	H-３Ｇ　利根川流域	15-１
4	磁器	碗	－	2.4	－	Ｋ	5	良好	灰白	H-３Ｇ　青磁　同安窯	17-７
5	磁器	碗	－	3.8	－	Ｋ	5	良好	灰白	H-３Ｇ　青磁　同安窯	17-６
6	土製品	置きカマド	幅[7.5]㎝　高さ[5.5]㎝ 厚さ3.2㎝			ＡＥＨＩＫ	－	良好	にぶい橙	H-３Ｇ	22-２
7	磁器	皿	－	1.2	－	ＩＫ	5	良好	灰白	H-３Ｇ　青磁　龍泉窯	17-８
8	磁器	碗	－	3.3	－	ＩＫ	10	良好	灰白	H-３Ｇ　青磁　龍泉窯	17-９
9	磁器	皿	－	1.7	－	Ｋ	5	良好	灰	H-４Ｇ　青磁　龍泉窯　見込劃花文	17-10
10	磁器	皿	－	2.0	－	Ｋ	5	良好	灰白	H-４Ｇ　白磁	17-11
11	磁器	碗	－	1.4	－	ＩＫ	20	良好	灰白	I-２Ｇ　青磁　龍泉窯か	17-12
12	灰釉陶器	碗	(16.0)	3.6	－	ＩＫ	10	良好	灰白	I-３Ｇ　黒笹14号窯段階	22-１
13	灰釉陶器	長頸瓶	(12.6)	11.8	－	ＩＫ	5	良好	灰	I-３Ｇ　美濃産　花文	
14	灰釉陶器	長頸瓶	(12.0)	20.2	－	ＩＫ	15	良好	灰白	I-３Ｇ	23-１
15	ロクロ土師	坏	(12.2)	4.4	6.2	ＡＨＩＫ	60	普通	にぶい橙	I-３Ｇ　下総	15-３
16	須恵器	長頸瓶	－	6.5	－	ＩＫ	90	普通	灰	I-３GP９ J-５Ｇ　南比企	15-２
17	土師器	甕	(19.2)	6.1	－	ＡＣＨＩＫ	15	不良	にぶい赤褐	I-３Ｇ　利根川流域　２次加熱	22-１
18	磁器	碗	(15.0)	3.0	－	Ｋ	10	良好	灰白	I-３Ｇ　青磁　龍泉窯　内面劃花文	17-13
19	磁器	碗	－	4.5	－	ＩＫ	15	良好	灰	I-３Ｇ　青磁　龍泉窯	17-14

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
20	磁器	碗	(16.8)	3.8	－	K	10	良好	灰白	I-３G　青磁　龍泉窯　内面劃花文	17-15
21	磁器	皿	(11.8)	2.3	－	ＩK	5	良好	灰白	I-３G　青磁　龍泉窯　見込劃花文か	17-16
22	陶器	甕	－	8.4	－	ＩK	5	良好	灰褐	I-３G　常滑　印判あり	17-17
23	陶器	甕	(31.8)	4.7	－	ＨＩK	10	普通	灰	I-３G　渥美	22-１
24	須恵器	甑	(30.0)	4.8	－	ＡＨＩK	10	普通	にぶい赤褐	I-3G　南比企　鳩山Ⅷ期　酸化焔焼成	22-１
25	陶器	壺	－	19.4	－	ＩK	20	良好	灰	I-３G　常滑　外面鉄釉	15-４
26	須恵器	高台付瓶	－	4.6	7.5	ＥＩK	80	良好	灰	I-４G　東金子　線刻	15-５
27	ロクロ土師	坏	13.2	3.9	6.1	ＳＣＨＩK	70	普通	にぶい橙	I-４G　利根川流域　墨書底面「兀」	15-６
28	土師器	坏	－	3.1	－	ＨＩＪK	5	普通	にぶい橙	I-４G　下総　墨書「冂」	17-18
29	磁器	碗	－	2.6	－	K	5	良好	灰白	I-４G　白磁	
30	ロクロ土師	甕	－	4.0	－	ＡＣＨＩＪK	5	普通	にぶい黄褐	I-４G	22-１
31	須恵器	坏	12.4	3.6	6.4	ＥＨＩＪK	70	普通	灰	J-５G　南比企　鳩山Ⅷ期	15-７
32	灰釉陶器	長頸瓶	－	6.3	－	ＩK	15	良好	灰	J-２G	23-１
33	陶器	片口鉢	(22.6)	5.2	－	ＩK	10	良好	灰褐	常滑　13Ｃ後半　南トレンチ　表採	22-１
34	土製品	支脚	長さ[15.3]㎝　幅12.1㎝ 重さ1403.5ｇ			ＡＣＨＩK	70	不良	にぶい黄橙	表採	15-８
35	土製品	土錘	長さ[3.3]㎝　径[3.1]㎝　孔径[1.1]㎝　重さ10.8ｇ　残存20%						にぶい橙	H-３G	23-14
36	土製品	土錘	長さ4.6㎝　径1.0㎝　孔径0.3㎝　重さ3.5ｇ　残存100%						にぶい橙	H-３G	23-14
37	土製品	土錘	長さ4.7㎝　径1.15㎝　孔径0.4㎝　重さ4.3ｇ　残存100%						明黄褐	H-３G	23-14
38	土製品	土錘	長さ4.7㎝　径1.05㎝　孔径0.35㎝　重さ3.7ｇ　残存100%						橙	H-３G	23-14
39	土製品	土錘	長さ4.6㎝　径1.0㎝　孔径0.3㎝　重さ3.9ｇ　残存100%						橙	H-３G	23-14
40	土製品	土錘	長さ4.6㎝　径0.9㎝　孔径0.3㎝　重さ2.9ｇ　残存100%						にぶい橙	H-３G	23-14
41	土製品	土錘	長さ4.4㎝　径1.0㎝　孔径0.3㎝　重さ3.4ｇ　残存95%						にぶい橙	H-３G	23-14
42	土製品	土錘	長さ4.5㎝　径0.9㎝　孔径0.4㎝　重さ3.0ｇ　残存100%						橙	H-３G	23-14
43	土製品	土錘	長さ4.7㎝　径1.0㎝　孔径0.3㎝　重さ3.8ｇ　残存100%						にぶい黄橙	H-３G	23-14
44	土製品	土錘	長さ4.2㎝　径1.0㎝　孔径0.4㎝　重さ2.7ｇ　残存100%						橙	H-３G	23-14
45	土製品	土錘	長さ4.5㎝　径0.9㎝　孔径0.3㎝　重さ3.1ｇ　残存100%						橙	H-３G	23-15
46	土製品	土錘	長さ[3.4]㎝　径1.4㎝　孔径0.5㎝　重さ5.4ｇ　残存40%						にぶい黄橙	H-３G	23-15
47	土製品	土錘	長さ4.5㎝　径1.1㎝　孔径0.4㎝　重さ4.4ｇ　残存100%						にぶい黄橙	H-３G	23-15
48	土製品	土錘	長さ4.1㎝　径1.1㎝　孔径0.4㎝　重さ3.2ｇ　残存90%						にぶい橙	H-３G	23-15
49	土製品	土錘	長さ3.8㎝　径0.9㎝　孔径0.3㎝　重さ2.9ｇ　残存80%						橙	H-３G	23-15
50	土製品	土錘	長さ4.6㎝　径1.0㎝　孔径0.3㎝　重さ3.3ｇ　残存100%						橙	H-３G	23-15
51	土製品	土錘	長さ[4.2]㎝　径0.9㎝　孔径0.3㎝　重さ2.6ｇ　残存90%						にぶい橙	H-３G	23-15
52	土製品	土錘	長さ4.2㎝　径1.1㎝　孔径0.4㎝　重さ3.4ｇ　残存95%						橙	H-３G	23-15
53	土製品	土錘	長さ4.2㎝　径0.8㎝　孔径0.3㎝　重さ2.5ｇ　残存100%						橙	H-３G	23-15
54	土製品	土錘	長さ[3.9]㎝　径1.0㎝　孔径0.3㎝　重さ3.1ｇ　残存90%						にぶい黄橙	H-３G	23-15
55	土製品	土錘	長さ[3.7]㎝　径0.8㎝　孔径0.3㎝　重さ2.3ｇ　残存90%						橙	H-３G	23-15
56	石製品	紡錘車	上径4.0㎝　下径2.6㎝　厚さ1.5㎝　重さ38.30ｇ							I-４G　№１	18-１
57	石製品	硯	長さ10.5㎝　幅7.0㎝　厚さ1.4㎝　重さ177.70ｇ							I-３G	18-２
58	石製品	硯	長さ12.1㎝　幅6.2㎝　厚さ1.7㎝　重さ147.80ｇ							H-５G	18-３
59	鉄製品	斧	長さ[9.6]㎝　幅4.3㎝　重さ215.6ｇ							H-３G　袋状鉄斧	24-５
60	鉄製品	刀子	長さ[7.8]㎝　幅1.0㎝　厚さ0.5㎝　重さ19.2ｇ							H-３G	24-５
61	鉄製品	轡	長さ[4.4]㎝　立聞　　幅1.75㎝　厚さ0.2㎝ 立聞壺　横3.6㎝　縦1.1㎝　幅1.9㎝　厚さ0.4㎝							H-３G	24-５
62	鉄製品	紡錘車	径4.4㎝　厚さ0.25㎝　重さ17.0ｇ							I-３G	24-５



第 49 図　グリッド出土遺物（1）



第 50 図　グリッド出土遺物（2）

Ⅴ　調査のまとめ

１．調査の成果

調査では平安時代の住居跡５軒、土壙 62 基、井戸跡２基、溝跡 10 条、畠跡１箇所、中世の土壙 11 基、井戸跡３基、溝跡４条、近世の土壙３基、井戸跡１基、溝跡２条、重複関係、遺構の分布から中近世と考えられる土壙が４基、溝跡１条、時期不詳の土壙 10 基、溝跡５条、ピット 137 基を検出した。時代不詳のものは近世に帰属するものと推定される。

遺構・遺物は、大きく平安時代と中世に分かれる。ここでは平安時代の様相をまとめておきたい。

住居跡は分布が大きく３箇所に分かれるが、いずれも北カマドで軸方向が揃っており、計画的な配置を窺わせる。南側と中央の第１・２号住居跡は規模がやや小さく長軸が４ｍ未満であるのに対して、北側の第３～５号住居跡は長軸が 4.5 ｍとやや大型である。

第３・４号住居跡は接した位置関係にあり、重複はしないものの新旧関係にあると考えられる。第２～５号住居跡は壁周溝が二重に回ることから、建て替えが行われたと推測される。こうした分布状況からみて、集落には少なくとも二時期の展開が想定される。

いずれの住居跡のカマドも燃焼部は奥壁から突出して設けられていた。第４号住居跡ではカマド周辺に多くの遺物が認められたが、燃焼部からではなく上層から出土するものがほとんどで、カマドの機能停止後にもたらされた可能性が高い。このような出土状況は、後述する置きカマドとの関係で注目される。

第２・３・５号住居跡には床下土壙が認められた。特に第５号住居跡のものは別遺構として調査したが、位置関係と遺物に接合関係が認められることから床下土壙としたものである。いずれの例でも竪穴本体の覆土が床下土壙の覆土を被覆していることから、住居跡の掘り方もしくは廃絶時に掘り込まれたかのどちらかである。第３号住居跡は暗黄褐色土の単層なので前者、第２・５号住居跡のものは炭化物、焼土、遺物を多く含むので後者と考えられる。

溝跡と土壙は、調査区の南側と中央部分で様相を異にする。調査区南側の第２・４号溝跡は規模が大きく東西方向軸で、水路的な性格が窺える。Ｋグリッド列より北側では北北東もしくは北東とそれに直交する軸方向で規模も小さい。Ｆ列からＫ列の間に集中した分布が見られる。重複関係はほとんど認められず、土壙と溝跡が同一の軸線状に並ぶ場合が多いため、何らかの区画を形成していると考えられる。住居跡も同一の軸線上にあり、全体に計画性の強い分布である。特にＨ・Ｉ－３～５グリッドではその傾向が強い。

第 57 号土壙は遺物量が多く、覆土上層に焼土･炭化物を多く含む。同様の例としては草加市蜻蛉遺跡第 16 号土壙（鈴木 1985）、鳩ヶ谷市三ツ和遺跡第３次第 15 号土壙（浅野 2004）があり、両者とも火を用いた祭祀との関係が推定されている。本例も同様の性格を持つ可能性がある。

遺物は灰釉陶器、下総産、利根川流域産のロクロ土師器、南比企、東金子、三和、新治窯産の須恵器、土師器、土錘、刀子、釘が出土している。グリッドではあるが鉄斧、鉄製紡錘車も古代のものと考えられる。

出土土器における本遺跡の最大の特徴は、ロクロ土師器が大部分を占める点であろう。器種は大きく坏、高台付坏、皿、甑がある。坏類には口径、底径ともに大きなもの（第２・３号住居跡）と、口径がやや小さく、口径に対して底径が小さいもの（第１・４・５号住居跡）の二者があり、両者の差異は時期差によるものと考えられる。坏類の底面調整には回転ヘラ切りや手持ちのヘラケズリ

が認められ、新治窯などの東関東の影響が強く感じられる。甑は大型でタタキ後ヘラナデ調整が施されるもので多孔と考えられる。第４・５号住居跡で出土している。

須恵器の出土は、ロクロ土師器に比してごく少ない。南比企、東金子、末野、新治、三和の各窯跡の製品が認められるものの、後三者は数点のみの出土である。坏、甕があり、南比企窯跡産のものは鳩山Ⅷ期にほぼ限定される。甑は多孔甑と考えられる南比企窯跡産の破片が数点出土している。

土師器は甕、台付甕で、ごく少数ながら鉢と推定されるものがある。甕類の大部分は典型的なコの字甕で、その崩れた形態のものは少数である。

灰釉陶器は第２号住居跡から黒笹 14 号段階、第４号住居跡から黒笹 90 号窯段階の碗が出土している。

本遺跡の土器様相に近い春日部市八木崎遺跡は奈良時代から平安時代前半まで継続する集落で、供膳具の主体はやはり下総産ロクロ土師器である。出土土器はⅠ～Ⅶ期に編年されている。本遺跡の上述した特徴から、坏類に見られる二段階は八木崎遺跡のⅤ・Ⅵ及びⅥ・Ⅶ期に相当する。実年代としては前者が９世紀中葉～後半、後者を９世紀後半と位置付けておきたい。古段階は第２・３号住居跡、新段階は第１・４・５号住居跡である。近接する第４・５号住居跡の存在や壁周溝の示す建て替えなどから、更なる細分が可能と思われるが、資料の限られた現時点では新旧二段階の時期分けに留めたい。

同様にロクロ土師器についても多くの研究（昼間 2006 など）があるが、それらとの対比については今後の課題としたい。

平安時代の遺物では墨書、刻書土器、丸鞆、鉈尾の腰帯具、置きカマドが注目される。

墨書土器　墨書土器は５点認められる。いずれも坏である。第３号住居跡 12（反転）、第 54 号土壙 48、グリッド 27 には「兀」の墨書が認められる。12・48 は体部下半に、27 は底面に記されている。12 は上下逆である。「兀」字については神川町皂樹原・檜下遺跡で、黒笹 14 号段階とされるⅨ期の溝跡から多く出土している。集落終末期における主要水路への大量廃棄であり、水に関係する祭祀遺物とされている（篠崎 1992）。

本遺跡では、遺構との関係性は不明だが、河川の至近という立地を考えると、水の祭祀に関係する可能性がある。

第５号溝跡 23 は「兀」の崩れた字体とも見えるが、不明確である。グリッド 28 は文字の下半であり判読できない。第 57 号土壙 56 の見込み部分の刻字は「正金」と判読でき、人名の可能性がある。しかし、同様の墨書や刻書は出土しておらず、現時点では断定するに至らない。

腰帯具　特筆されるものとして、第２号住居跡から蛇紋岩製の丸鞆、第３号住居跡から同じ石材の鉈尾の腰帯具があげられる。埼玉県内では石製無孔の丸鞆は上里町中堀遺跡 115･122 号住居跡（田中・末木 1997）、幸手市槙野地北遺跡５・６号住居跡（浜野 1992）、美里町烏森遺跡遺構外（長滝 2011）からの出土が知られている。鉈尾については、美里町宮ヶ谷戸遺跡（長滝・池田・中沢 2012）18 号住居跡から出土している。時期はいずれも９世紀から 10 世紀である。

田中広明氏による詳細な研究を参照すると、これらの例は出土遺跡の性格から、腰帯具の二通りの保有形態を反映していると考えられる。第一は中堀遺跡や烏森遺跡のような官人層に直接関係がある遺跡からの場合、もう一つは官人層から分与されたと考えられる集落出土の場合である。本遺跡を含む後者の例については、ほぼ単数出土であることが指摘されている。本遺跡における腰帯具の出土は、何らかの形での官人層との関係を示していると考えられる。

置きカマド　第４号住居跡、第５号溝跡、グリッ

ドからは置きカマドが出土している。胎土、焼成がよく似ており、同一個体の可能性が高い。埼玉県内では器形全体の知れる置きカマドの例はなく、近隣でも千葉県、群馬県、山梨県などで各一例が知られるのみである。平安時代の例である千葉県佐倉市内田端山遺跡出土品（松田ほか 2008）を参考にすると、本遺跡例は鍔のある開口部の上部と下端部に相当すると考えられる。一部分のみのため、型式論的検討は保留したい。

県内では中堀遺跡などで、ごく小さな破片の出土が知られるのみで、本遺跡のものはある程度の位置まで推定できる点で貴重である。置きカマドについては、祭祀用具としての所謂韓竈とされている。実際の祭祀の対象や目的は不明ながら、第４号住居跡ではカマド周辺の遺物がカマド本体ではなく、その上層からの出土であることと何らかの関係があるようにも思われる。同時に、同一個体と考えられる破片が調査区内の他の箇所から破片で出土している状況は、使用後の取り扱いについての示唆を与える。他遺跡の例でも破片が圧倒的に多いことを考慮すると、置きカマドは故意に破砕されているのかもしれない。本遺跡例も含めて改めて検討する必要があるだろう。

遺跡の性格　古代の調査区は居住域として利用されていた。最大の特徴は、武蔵、下総、常陸、利根川流域の各地で生産された須恵器、ロクロ土師器、土師器が使われている点である。丸鞆や鉈尾、置きカマドの出土とも合せて、下級官人の関与など一般的な集落とは性格を異にするとも考えられる。

遺跡の字名である八條は条里水田に由来するとされ、遺跡周辺は吉川國男氏によって越谷八條条里と名付けられている（吉川 1987）。中世の荘園である大河戸御厨は、『吾妻鏡』によれば平安時代に遡る可能性がある。こうした周辺の状況から本遺跡は条里水田、あるいは荘園の管理に関係する集落であった可能性を考えておきたい。

引用・参考文献

浅野信英ほか 1988『三ツ和遺跡他３遺跡』鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第 24 集

池田匡彦・長滝歳康・中沢良一 2012『宮ヶ谷戸遺跡・砂田遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第 21 集

八潮市教育委員会 1976『八潮の金石資料』

金子直行・田中広明 2002『八木崎遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 281 集

越智俊夫・中野達也 2008『小渕山下遺跡第６次地点』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書第５集 春日部市教育委員会

佐々木彰 1996『舎人遺跡』足立区伊興遺跡調査会

佐々木彰 1999『伊興遺跡Ⅱ』足立区伊興遺跡調査会

実川順一 1992『伊興遺跡』足立区伊興遺跡公園調査会　足立区教育委員会

篠崎　潔 1992『皂樹原・檜下遺跡』皂樹原・檜下遺跡調査会報告書第４集

鈴木孝之 1985『蜻蛉遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 53 集

高橋一夫 1983 草加の遺跡（２）西地総田遺跡の調査　『草加市史研究』

瀧瀬芳之 2005『東地総田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 314 集

田中広明・末木啓介 1997『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 190 集

長滝歳康ほか 2011『新倉館跡・烏森遺跡・道灌山古墳　附　勝丸稲荷神社古墳』 美里町遺跡発掘調査報告書第 20 集

松田富美子ほか 2008『内田端山越遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 256 集

吉川国男 1987「第４節　条里遺跡と荒川」『荒川　人文Ⅰ』埼玉県

和島誠一 1971『見田方遺跡発掘調査報告書』越谷市教育委員会

草加市史編さん室・八潮市史編さん室 1981『中川低地遺跡確認調査報告書』草加・八潮遺跡確認調査団

橋本充史 2002「越谷市大道遺跡の調査」『第 35 回遺跡発掘調査会発表要旨』埼玉考古学会

写真図版

1　八條遺跡遠景（北から）

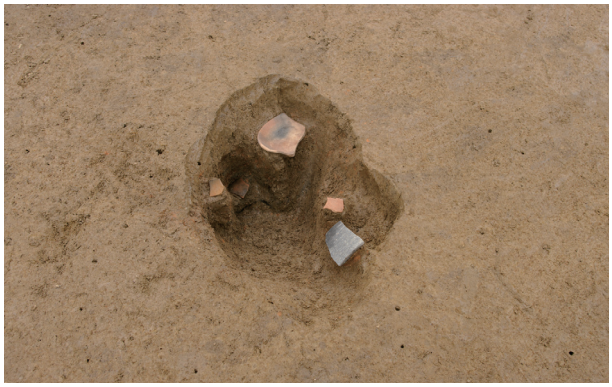
2　八條遺跡空中写真（垂直）

図版 2

1　第１号住居跡（南から）

2　第１号住居跡カマド遺物出土状況（南から）

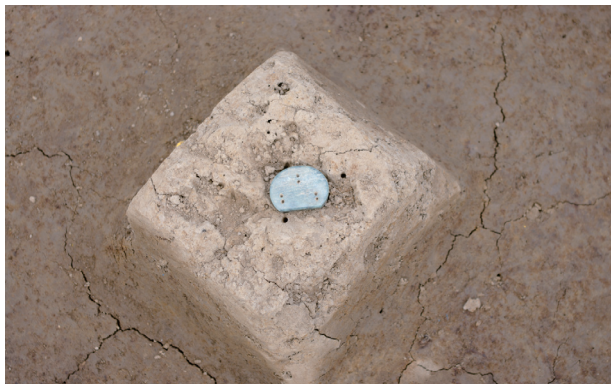
3　第２号住居跡（南から）



4　第２号住居跡カマド（北東から）

5　第２号住居跡遺物出土状況（１）（南から）

6　第２号住居跡遺物出土状況（２）（南から）



7　第２号住居跡遺物出土状況（３）（丸鞆）（西から）

8　第３号住居跡（南から）

1　第３号住居跡遺物出土状況（１）（南から）

5　第４号住居跡遺物出土状況（２）（カマド）（南から）

2　第３号住居跡遺物出土状況（２）（鉈尾）（東から）

6　第５号住居跡（南から）

3　第４号住居跡（南から）

7　第４号土壙（南から）

4　第４号住居跡遺物出土状況（１）（南から）

8　第５号土壙（北東から）

図版４

1　第５号土壙遺物出土状況（１）（北東から）

5　第２・８号土壙（南から）

2　第５号土壙遺物出土状況（２）（北東から）

6　第９号土壙（東から）

3　第５号土壙遺物出土状況（３）（北東から）

7　第 11 号土壙（東から）

4　第２・６～８号土壙（南西から）

8　第 12 号土壙（北から）

1　第 16・18 号土壙（南から）

2　第 18 号土壙（西から）

3　第 18 号土壙（粘土貼付）（北東から）

4　第 18 号土壙完掘（西から）

5　第 18 号土壙遺物出土状況（刀）（西から）

6　第 19 号土壙（南から）

7　第 26 号土壙（東から）

8　第 37 号土壙（東から）

図版 6

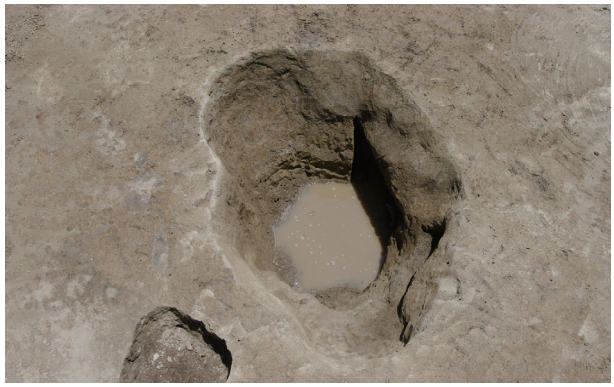
1　第 40 号土壙（西から）

2　第 42 号土壙（東から）

3　第 87・88 号土壙（北から）

4　第 96 号土壙（南東から）

5　第 97 号土壙人骨出土状況（南から）



6　第 2 号井戸跡（西から）

7　第 1 ・ 2 号溝跡（東から）

8　基本土層（K－3 グリッド）

1　第 1 号住居跡（第 10 図 1 ）

2　第 1 号住居跡（第 10 図 2 ）

3　第 2 号住居跡（第 12 図 1 ）

4　第 2 号住居跡（第 12 図 5 ）

5　第 2 号住居跡（第 12 図 6 ）

6　第 2 号住居跡（第 12 図 7 ）

7　第 2 号住居跡（第 12 図 9 ）

8　第 2 号住居跡（第 12 図 10）

9　第 2 号住居跡（第 12 図 13）

図版 8

1　第 3 号住居跡（第 14 図 2）

2　第 3 号住居跡（第 14 図 4）

3　第 3 号住居跡（第 14 図 5）

4　第 3 号住居跡（第 14 図 6）

5　第 3 号住居跡（第 14 図 12）

6　第 3 号住居跡（第 14 図 13）

7　第 3 号住居跡（第 14 図 20）

8　第 3 号住居跡（第 14 図 27）

9　第 3 号住居跡（第 15 図 29）

1　第 3 号住居跡（第 15 図 31）

2　第 3 号住居跡（第 15 図 32）

3　第 3 号住居跡（第 15 図 43）

4　第 3 号住居跡（第 15 図 45）

5　第 3 号住居跡（第 15 図 46）

6　第 3 号住居跡（第 15 図 47）

7　第 4 号住居跡（第 17 図 1 ）

8　第 4 号住居跡（第 17 図 2 ）

9　第 4 号住居跡（第 17 図 6 ）

10　第 4 号住居跡（第 17 図 7 ）

図版 10

1　第４号住居跡（第 17 図 11）

2　第４号住居跡（第 17 図 12）

3　第４号住居跡（第 17 図 13）

4　第４号住居跡（第 17 図 17）

5　第４号住居跡（第 17 図 22）

6　第４号住居跡（第 17 図 21）

7　第４号住居跡（第 17 図 26）

8　第４号住居跡（第 17 図 24）

1　第 4 号住居跡（第 17 図 28）

2　第 4 号住居跡（第 17 図 29）

3　第 4 号住居跡（第 17 図 31）

4　第 5 号住居跡（第 20 図 15）

5　第 5 号土壙（第 27 図 7 ）

6　第 17 号土壙（第 27 図 13）

7　第 17 号土壙（第 27 図 15）

8　第 37 号土壙（第 28 図 33）

9　第 42 号土壙（第 28 図 40）

10　第 50 号土壙（第 28 図 45）

図版 12

1　第 54 号土壙（第 28 図 47）

2　第 54 号土壙（第 28 図 48）

3　第 57 号土壙（第 29 図 49）

4　第 57 号土壙（第 29 図 50）

5　第 57 号土壙（第 29 図 51）

6　第 57 号土壙（第 29 図 53）

7　第 57 号土壙（第 29 図 56）

8　第 57 号土壙（第 29 図 61）

1　第 69 号土壙（第 29 図 68）

2　第 69 号土壙（第 29 図 69）

3　第 69 号土壙（第 29 図 70）

4　第 69 号土壙（第 29 図 71）

5　第 92 号土壙（第 30 図 79）

6　第 92 号土壙（第 30 図 84）

7　第 96 号土壙（第 30 図 85）

8　第 97 号土壙（第 30 図 86）

9　第 2 号井戸跡（第 36 図 5）

10　第 3 号井戸跡（第 36 図 9）

図版 14

1　第３号井戸跡（第 36 図 10）

6　第５号溝跡（第 42 図 16）

2　第４号井戸跡（第 36 図 15）

7　第５号溝跡（第 42 図 17）

3　第１号溝跡（第 42 図５）

8　第５号溝跡（第 42 図 18）

4　第１号溝跡（第 42 図７）

9　第５号溝跡（第 42 図 19）

5　第３号溝跡（第 42 図 12）

10　グリッド（第 49 図１）

1　グリッド（第 49 図 3）

2　グリッド（第 49 図 16）

3　グリッド（第 49 図 15）

4　グリッド（第 49 図 25）

5　グリッド（第 50 図 26）

6　グリッド（第 50 図 27）

7　グリッド（第 50 図 31）

8　表採（第 50 図 34）

図版 16

1　第 3 号住居跡鉈尾（第 21 図 2）

2　第 4 号住居跡
（第 17 図 30）

3　第 2 号住居跡丸鞆（第 21 図 1）

9　第 19 号土壙
（第 31 図 88）

10　第 37 号土壙
（第 31 図 89）

4　第 18 号土壙
（第 27 図 16）

5　第 18 号土壙
（第 27 図 17）

11　第 53 号土壙（第 32 図 98）

12　第 18 号土壙（第 32 図 99）

6　第 23 号土壙
（第 28 図 28）

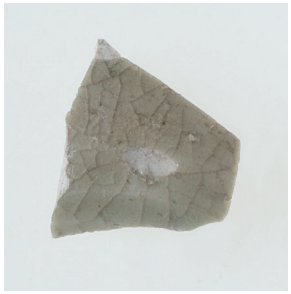
7　第 27 号土壙
（第 28 図 31）

13　第 92 号土壙（第 32 図 100）

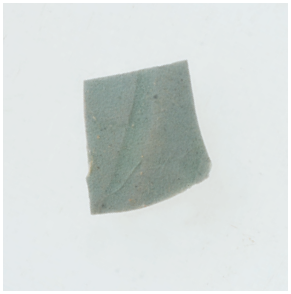
8　第 53 号土壙（第 28 図 46）

14　第 1 号井戸跡
（第 36 図 1）

15　第 2 号井戸跡
（第 36 図 3）



1　第４号井戸跡
（第 36 図 14）



2　第１号溝跡
（第 42 図１）

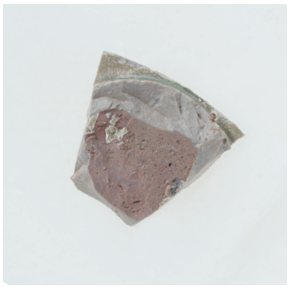
9　グリッド
（第 49 図８）

10　グリッド
（第 49 図９）

3　第５号溝跡
（第 42 図 20）

4　第５号溝跡
（第 43 図 36）

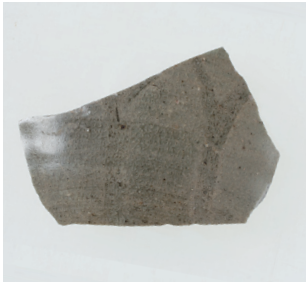
11　グリッド
（第 49 図 10）



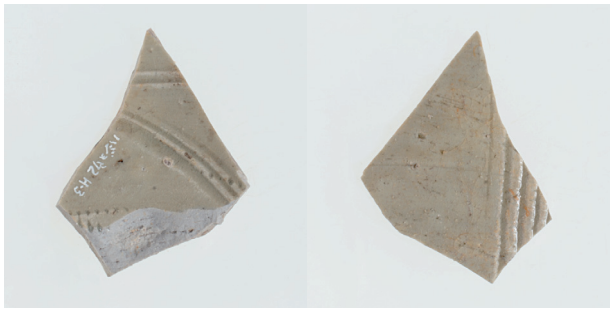
12　グリッド
（第 49 図 11）

5　第７号溝跡（第 45 図 42）

13　グリッド
（第 49 図 18）

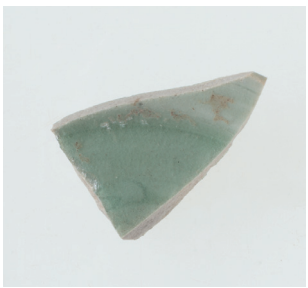


14　グリッド
（第 49 図 19）



6　グリッド（第 49 図５）

15　グリッド
（第 49 図 20）



16　グリッド
（第 49 図 21）

7　グリッド
（第 49 図４）

8　グリッド
（第 49 図７）

17　グリッド
（第 49 図 22）

18　グリッド
（第 50 図 28）

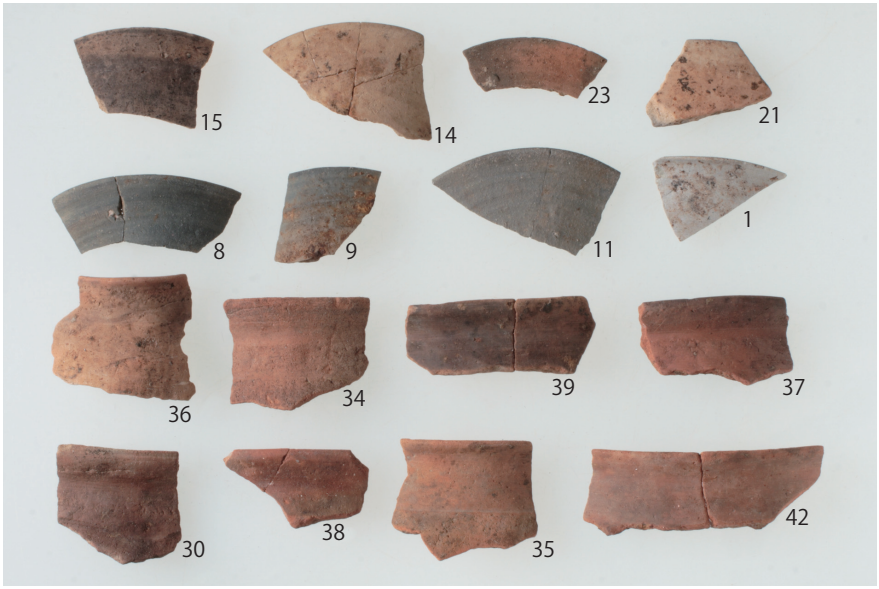
図版 18

1　グリッド
（第 50 図 56）

2　グリッド（第 50 図 57）

3　グリッド（第 50 図 58）

4　第 1・2 号住居跡
（第 10・12 図）



5　第 3 号住居跡（1）
（第 14･15 図）

1　第 3 号住居跡（2）
（第 14･15 図）

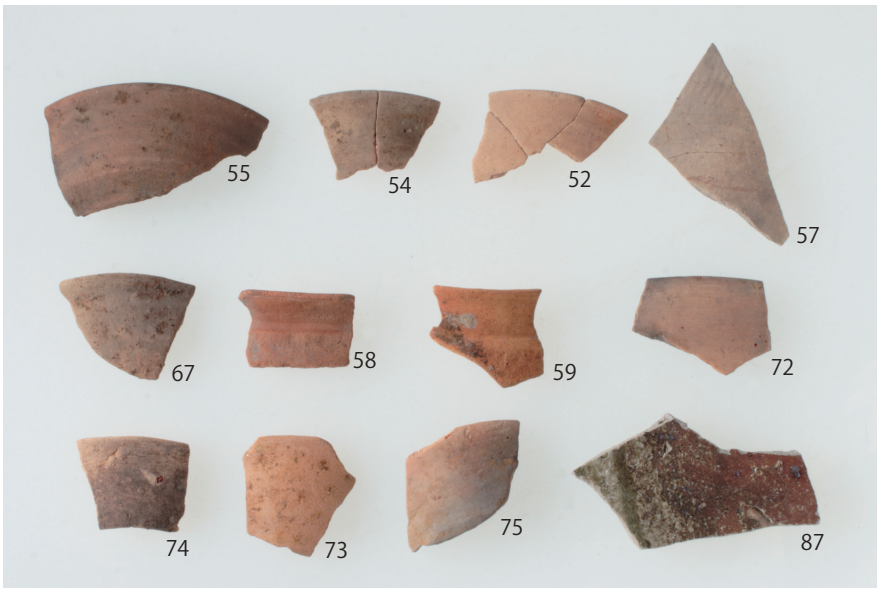
2　第 4 号住居跡（第 17 図）

3　第 5 号住居跡（第 20 図）

図版 20

1　土壙（1）（第 27･28 図）

2　土壙（2）（第 27･28 図）



3　土壙（3）（第 29･30 図）

1　井戸跡（第 36 図）

2　溝跡（1）（第 42 図）

3　溝跡（2）（第 42 図）

図版 22

1　グリッド（第 49・50 図）

2　置きカマド
（第 18･42･49 図）

3　第 92 号土壙（第 30 図）

1　灰釉陶器
（第 20・27・36・49・50 図）

2　第 18 号土壙
（第 33 図 101）

3　第 18 号土壙
（第 33 図 102）

4　第 18 号土壙
（第 33 図 103）

5　第 19 号土壙
（第 33 図 104）

6　第 97 号土壙
（第 33 図 106）

7　第 97 号土壙
（第 33 図 107）

8　第 97 号土壙
（第 33 図 108）

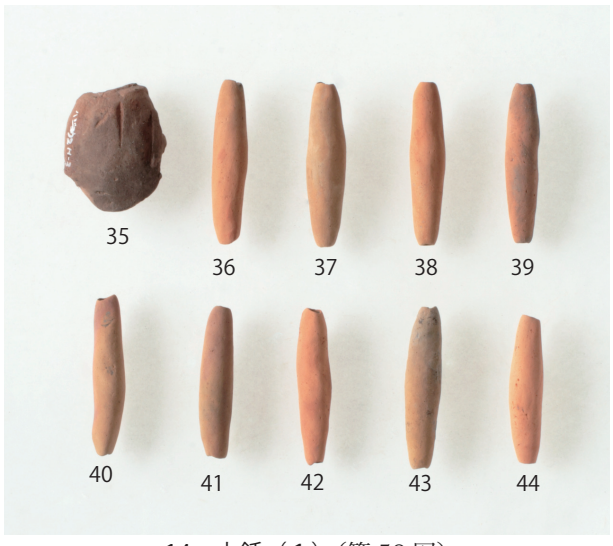
9　第 97 号土壙
（第 33 図 109）

10　第 97 号土壙
（第 33 図 110）

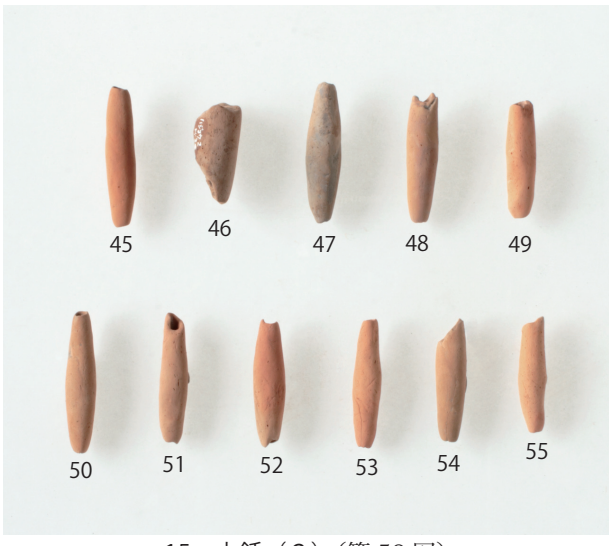
11　第 97 号土壙
（第 33 図 111）

12　第 1 号溝跡
（第 44 図 44）

13　第 2 号溝跡
（第 44 図 45）



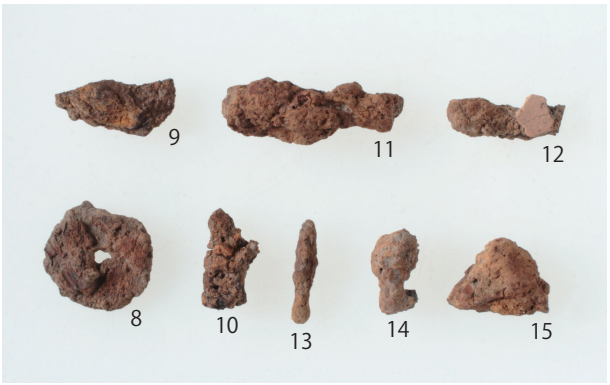
14　土錘（1）（第 50 図）



15　土錘（2）（第 50 図）

図版 24

1　第１・２号住居跡（第 22 図）



2　第３～５号住居跡（第 22 図）

3　土壙（第 32 図）

4　第１・５・９号溝跡（第 45 図）

5　第２・５号井戸跡（第 36 図）、グリッド（第 50 図）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はちじょういせき
書 名	八條遺跡
副 書 名	中川右岸改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シ リ ー ズ 名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第407集
編 著 者 名	福田 聖
編 集 機 関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台４丁目４番地１ TEL 0493-39-3955
発 行 年 月 日	西暦2013（平成25）年11月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
はちじょういせき 八條遺跡	さいたまけんやしおしはちじょう 埼玉県八潮市八條 ばんち 4067番地７他	11234	80-001	35° 51′ 20″	139° 50′ 21″	20120201～ 20120331 20120406～ 20120630	4,800	河川改修

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八條遺跡	集落跡	平安時代	住居跡 ５軒 土壙 62基 井戸跡 ２基 溝跡 10条 畠跡 １箇所	灰釉陶器・土師器・須恵器・ロクロ土師器・石製品・土製品・鉄製品	平安時代では住居跡から蛇紋岩製の丸鞆、鉈尾、置きカマドが出土した。 中世では土壙墓が検出され刀･青磁･北宋銭などの副葬品が出土した。
		中世	土壙 11基 井戸跡 ３基 溝跡 ４条	青磁・陶磁器・かわらけ・土製品・鉄製品・銭貨	
		近世	土壙 17基 井戸跡 １基 溝跡 ８条 ピット 137基 （不明分含む）	磁器・銭貨	

要 約

八條遺跡は中川右岸の自然堤防上に立地している。調査では平安時代の住居跡から、官人の腰帯具である丸鞆や鉈尾、下総、武蔵、常陸産の須恵器、土師器が出土し、地域や物流を管轄する役人の存在が考えられ、周辺には大規模な集落の存在も想定される。中近世では土壙墓が検出され、同安窯系青磁や刀などが出土し、有力者層の存在が推定される。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　　第407集

八條遺跡

中川右岸改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

平成２５年１１月２０日　印刷
平成２５年１１月２５日　発行

発行／公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108　熊谷市船木台４丁目４番地１
0493(39)3955
http://www.saimaibun.or.jp

印刷／株式会社 文化新聞社